

BanG Dream ! ～隣を歩む者～

TRcrant

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年……美竹一樹は、伝説のバンドを目指し幼馴染四人とバンド『Moonlight Glory』を結成する。

怒涛の勢いで上り詰めていった彼らだったが、ある事件によって活動停止を余儀なくされる。

普通の学生として日々を過ごし、出会いと別れの季節ともいえる春を迎える。

それは一樹たちにとって、新たな物語の始まりを告げるものだった。

*偶数月の日曜日、午前0時に投稿いたします。

本作は、『Bang Dream!〜隣の天才〜』の続編になります。

前作をを知らなくても楽しんでいただけるようにさせていただく予定です、前作をお読みいただけるとお楽しみいただけます。

目次

第1章 『始まりのライブ』

プロローグ | 1

第1話 始まり | 7

第2話 充電 | 14

第3話 始まる新しい生活 | 20

第4話 ライブの誘い | 25

第5話 告知 | 30

第2章 『主催ライブ』

第6話 交渉 | 35

第7話 嫉妬 | 40

第8話 予感 | 44

第9話 準備とライブ | 49

第10話 覚悟 | 54

第3章 『予兆』

第11話 相談 | 59

第12話 生徒会 | 64

第13話 フィードバック | 69

第14話 不穏な影 | 74

第4章 『詳細不明』

第15話 念には念を | 81

第16話 大切だからこそ | 86

第17話 謎の来客 | 93

第18話 カオス | 97

第5章 『出会いと始まり』

第19話	始まりの言葉	104
第20話	怪しい雲行き	111
第21話	サポート	118
第22話	狂犬との出会い	125
第23話	祭り	131
第24話	YOLO	137
第25話	出された答え	143
第6章『合同文化祭く計画編く』		
第26話	合同文化祭計画	150
第27話	スカウト	156
第28話	男のロマン	161
第29話	テスト	166
第30話	条件	172
第31話	日菜の暴走	178
第32話	被害拡大	184
第7章『合同文化祭く予兆編く』		
第33話	目指すもの	191
第34話	予兆	197
第35話	作曲	202
第36話	目処とスカウトと	207
第37話	リハーサル	215
第8章『合同文化祭』		
第38話	ライブの知らせ	221
第39話	我儘	226
第40話	そしてライブは始まる	234

第41話	嵐の文化祭	242
第42話	文化祭	252
第43話	ライブ	258
第44話	残酷な現実	266
第45話	試練	272
第46話	理由	278
第47話	動き出す者たち	285

第1章 『始まりのライブ』 プロローグ

季節は春。

「……よし。行くか」

出会いと別れの季節とも呼ばれているこの時期に、僕……美竹一樹は羽丘の制服に身を包み窓から見える青空を仰ぎ見て一つ気合を入れて、自室を後にする。

「兄さん、何してるの?」

朝食を済ませて、玄関で靴を履いていると、義妹の蘭が話しかけてきた。

「何って、これから学園に行くんだけど」

「兄さん寝ぼけてるの? 在校生は来週の月曜でしょ」

軽く笑いをこらえたように言ってくる蘭に少しむっとしつつも、

「普通はね」

と意味ありげに返した。

「あ、そうか。兄さん風紀委員だったっけ」

ようやくここで、蘭も僕の言わんとすることに気づいてくれたようだ。

「なんだか、兄さんが風紀委員って似合わないね」

「言ってる。じゃ、行ってきます」

自分でも似合わないのは自覚している。

バツが悪くなった僕は、悪態をつきながら家を後にすると、羽丘に向かって足を進めた。

(まあ、確かに僕が風紀委員っていうのは驚きだよな。普通)

啓介や田中君たちから“今年一番の衝撃事件”とまで言われたぐらいだ。

そんなことを考えながら歩いていると、T字路に差し掛かる。

そこは啓介った位との待ち合わせスポットだったが、今では意味合いが少しだけ変わりつつある。

そのT字路には、一人の少女が立っていた。
鞆を手に持って立つその人物は、僕の姿を見つけると顔をほころばせる。

「一樹君」

「紗夜」

彼女の名前は、氷川紗夜。

昔、僕の家隣の隣に住んでいた子で、今は僕の最愛の人だ。

そんな彼女のもとに、やや駆け足で合流した僕は、自然な動作でカバンを持っていないほうの手でつなぐと、駅に向かって足を進める。

あのT字路は、今では朝登校する時の紗夜との待ち合わせスポットとなっている。

啓介たちは色々と気を使ってくれているみたいで、

『お前たちを見てくると無性に走りたくなる時がある……ちつくしよ
おおお!!』

という、言葉をもらってからというもの、啓介たちとは別々に学園に向かうようになった。

(なんとなく、気を使っているというよりも、耐えられなくなったような気がするけど)

物事何でも考えすぎはよくない。

そんなわけで、僕はそれ以上考えることはなかった。

「一樹君が本当に風紀委員になるとは、予想もしてなかったわ」
「もうみんなに言われてるよ」

そんな僕にかけられた紗夜の言葉に、僕は苦笑交じりに答えるしかない。

「前にも聞いたけど、どうして風紀委員に？」

「うーん。あの時の交流会にかな」
交流会。

それは、去年の夏ごろに行われた留学のようなものだ。

お互いの学園の風紀活動をシェアすることにより、今後の風紀活動がよりよくなることを目的として行われた交流会だったのだが羽丘川の花女に行くはずだった風紀委員のメンバーが、僕にその役目を押

し付けてきたのだ。

尤も、僕もそれに応じたので、押し付けられたというのは誤りだけど。

それはともかくとして、そんな経緯で僕は羽丘の風紀委員として花女に向かうことになった。

そこでいろいろと事件に巻き込まれていくわけなのだが、思い出すと長くなりそうなので割愛したい。

あれがきっかけで、僕と紗夜の距離は縮まったようにも思える。

それと同時に、僕の中で風紀委員としてのやりがいと言う物も感じていた。

“これを羽丘でも活かしたい”

その思いが強くなっていった時期に、僕に風紀委員にならないかという誘いが来たときは、運命を感じた。

だからこそ、僕は二つ返事で承諾したのだ。

「まあ、紗夜から教えてもらった風紀委員として大切なことを活かせるようにするよ。今年の生徒会は色々とあれだから」

「……すみません」

僕の言わんとすることが伝わったのか、申し訳なさそうに謝ってきた。

「大丈夫だよ。風紀委員になった理由が交流会の時の経験なのは本当だから」

「だと、いいのだけど」

どちらかと言うと、交流会関連のことは一つのきっかけで、承諾しようと思った理由はもう一つのほうがウエイトを占めているのだが、これは言わないでおこう。

「目指すは紗夜みたいな風紀委員かな。まあ、なれるかわからないけどね」

どうせ風紀委員になるのであれば、紗夜みたいな感じになったほうがいい。

慣れるのかどうかは別としても、目指すのは問題はないだろう。

「ふふ……大丈夫よ。貴方なら、なれるわ」

「……ありがと、紗夜」

柔らかい笑みを浮かべる彼女にお礼を言ったところで、駅に着いた。

そして僕たちは、電車に乗ると、最寄りの駅まで向かう。

それもまたいつものこと。

「あ……」

「着いたね」

楽しい時間は過ぎるのが一瞬だというのが、本当のことなんだと思いき知らされる。

紗夜の寂しそうな声が特に。

「こっちが早く終わったら、いつものところで待ってるね」

「べ、別にそんなことしなくてもいいのに……でも、ありがと」

今日は生徒会の活動なので、いつ帰れるのかは分からないが、それでも紗夜を笑顔にすることができたのであれば、それだけで十分だ。

「それじゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

僕は電車を降りてお互いに手を振って、その場を後にする。

今振り返ればどうしても尾を引きそうだったので、それを断ち切るのに必要だった。

(ああ。これが始まりの予感というやつか)

僕はもう一度青空を仰ぎ見た。

B a n G D r e a m ! ~ 隣を歩むもの ~ 第1章『始まりの

ライブ』

羽丘学園。

おとしに入学をして、今年でとうとう最高学年でもある3年生。半年も過ぎれば進路などを考える必要も出てくる年だ。

(まあ、僕の場合は決まってはいるけどね)

春休みの時に、義父さんから『お前は家元の跡取りとして、これからも学んでもらう』と言われたことから、もはや確定だろう。

それ自体は覚悟していたことなので、別に後悔も異論もない。

また、大学にも必要であれば行ってもいいという義父さんからの返事も貰っているのです、進路に関しては進学するという選択肢だってある。

残す問題は、“バンド活動のほうをどうするのか”だ。

僕としては続けていきたい気持ちはある。

だが、僕を含めてみんなの今後によっては、それが困難になる可能性だってある。

(一度、ちゃんと話さないかね)

そう結論付けたところで、羽岡の校門前に到着した。

校門の横には『入学式』という立て看板が掛けられており、今日が入学式であることは一目瞭然だった。

中に入っていくのは、今年入学する僕たちの後輩にあたる生徒たちだ。

まだ早い時間もあって、中に入っていく人はそんなに多くはない。

そんな中、僕は校門をくぐって少し進んだ先の横のほうに設置された、簡易式の受付にいる彼女のもとに向かう。

「おはようございます。こちらをお持ちになって左手のほうにお進みください」

「頑張ってるね、副会長」

集合時間よりも前に来る新生入生に、資料と胸元につけるリボンを渡しながらい入学式の会場へ誘導しているのは、生徒会の副会長でもあり、妹の幼馴染でもあるつぐだ。

「あ、一樹先輩！ おはようございます」

軽い口調で声をかけると、元気のいい返事が返ってくる。

若干ではあるがつぐっていないかが心配ではあるが、取り合えずそれは置いておこう。

「おはよう。任せっきりにしてごめんね」

「いいえ！ そもそも先輩はもう少し後でも大丈夫なくらいですし、私の仕事なので、気にしないでください！」

確かに、僕が来なければいけない時間はもう少し後だ。

生徒会メンバーとはいえ、そこまでの必要性はないのだが、ヘルプ要因にはなれるし、初日から風紀が乱れているのは風紀委員長の名が廃るというものだ、

「それで、会長はどこ？」

「あ、日菜先輩でしたら生徒会室にいます！」

「あそこか……少しばかりくぎを刺してくるから、悪いけどもう少しだけここ任せてもらってもいい？」

「はい！」

つぐには申し訳ないが、今は懸念される問題を未然に防ぐことが先だ。

そんなわけで、僕は生徒会室に向かうのであった。

第1話 始まり

「すー……」

学園内の二階の一室の前にたどり着いた僕は、軽く息を吸うと軽くノックをする。

「どーぞー」

中から返ってきた声で、僕は目的の人物がいるのを把握し、ドアを開けて中に入る。

対面がガラス張りされ、中央には6人が座れるデスクが置かれたところが、この学園の生徒会室だ。

その奥側、木目調の机の席が、生徒会長の席となる。

「ここで何をしてるんだ？ 日菜さん」

そこに腰かけていた、友人でもあり恋人である紗夜の妹にあたる人物でもある日菜さんに、僕は声をかける。

「ちよつと座り心地を確かめてたんだ。とつてもるんってするね！」
生徒会長なのだから、もつとしつかりかと思われているかもしれないが、実際はこういう人物なのだ。

(ある意味、日菜さんが生徒会長になったことが、一番の衝撃的な事件だと僕は思うよ)

ある意味台風の目にもなりかねない彼女が、生徒会長になれたことは、驚かすにはいられない。

対立候補がいなかったからと思う人もいるかもしれないが、それでも信任投票は避けては通れない。

その信任投票で大多数の信任を得たことで、彼女は生徒会長に就任したのだ。

それは、紛れもなく日菜さんが生徒たちから信頼を得たということだ。

友人として、それは他人事であったとしても嬉しくないと言えるだろう。そうなる。

とはいえ、日菜さんが台風の目になりかねないのも事実なわけだけだ。

「それはそうと、今日は何の日かわかってる？」

「え？ 入学式でしょ？ なんだかるるんってするよねー」

(あー、これは浮かれてるな)

念のために聞いておいたのだが、楽しそうに答える日菜さんのその姿は、やはりというべきかかなり浮かれているようにも見えた。

「そう。新入生にとっては大事な始まりの日。生徒会長の日菜さんは、入学式で挨拶をするんだから、おふぎけとかは一切なしで真面目にやるように。就任演説の時のようなことは絶対ッッ対に辞めてね」
「だって、あの時はみんなの挨拶が、全然るんってしなかつたんだもん」

“絶対”の部分でもかというほど強調して言うと、日菜さんからそんな反論が返ってくる。

それは、生徒会長に就任し、生徒会メンバーが確定したことを受けて全校生徒の前でメンバーの紹介と、挨拶を行う就任演説の時のことだ。

「生徒会、風紀委員長の美竹一樹です。全校生徒の皆さんが落ち着いて学園生活を送れるよう、生徒会としてできる限りのサポートを行います。お困りの際は生徒会風紀委員までお尋ねください」

僕を含めた生徒会役員の演説は、このような形で無難なものとなっていたのだ。

このまま静かに就任演説は終わるだろう。

最後のオオトリを務める彼女が来るまでは、その場にいる誰もがそう思っただけだった。

「えー、生徒会長の氷川日菜です！ 私は、みんながるんってする学園生活になるように、頑張ります！」

何を思ったのか、日菜さんは彼女の代名詞にもあたる“るん”という言葉を大きな声で言いながら、原稿を上空に放り投げてしまったのだ。

(あーあ、紗夜と一緒に“るん”は使うなって言っておいたんだけどな……)

まず間違いなく、彼女の言う“るん”の意味は伝わりにくいと思

い、演説などでは使わないように言い聞かせておいたのだが、最後の最後で使ってしまったのだ。

後に彼女は、『盛り上がっちゃったから使っちゃった♪』と言っていたけど。

「でも、あの時はみんな盛り上がって、るんっ♪てしたからいいじゃん」

「良くないよ。あの後怒られたの忘れてないでしょ」

日菜さんの言う通り、確かに生徒たちへの受けはよかった。

それは不幸中の幸いだろう。

ただ、このような型破りな演説をしてしまえば、当然お説教は免れないわけで、僕を含めて日菜さんの二人で理事長からのありがたいお言葉を頂くことになってしまった。

それは、少しずつ寒くなり始めようとしている秋のことだった。

「大丈夫だよ。一君、まるでおねーちゃんみたい」

ぷーっと頬を膨らませてはいるが、こうでもしておかないと安心ができない。

「どういうわけか、僕は生徒会長の暴走を止めるブレーキみたいな役割になっっているみたいだし、風紀委員としてそれを乱すような行動は慎んでもらうからね」

「……むうー」

理事長のありがたいお言葉の中で判明した、僕の生徒会における役割はある意味理にはかなっているが、勘弁してほしいというのが本音だ。

そんな僕の宣言がお気に召さないようで、日菜さんは不服そうに唸り声をあげていた。

「おにーちゃん厳しすぎ〜」

「それでも、紗夜からすれば大甘らしいけど」

さつきは役割とか慎んでもらうとか言っただけだが、さすがにそう何度もするつもりはない。

彼女のやることで、最終的には間違いだったということがそうそうないというのを、僕は知っている。

きつとそれは生徒会長になった今も変わらないと、僕は信じているのだ。

少しだけスケールは大きくなると思うけど、彼女のような存在が時にこの学園をよくしていくきっかけになることだって十分あるのだ。

なので、ブレーキ役を期待している教師陣には申し訳ないが、僕の基本的なスタンスとしては特に止めはしない形にするつもりだ。

止めるのは、あくまでも行き過ぎた場合のみ。

(まあ、振り回されるほうとしては考え物だけどね)

分かっただけでも、振り回されるほうとしては勘弁願いたいけど。

「あと、学校とか人前で」おにーちゃん”はやめてって、言っただけだよね?」

「えー、ここにはあたししかいないし、いーじゃん」

僕の中での困りごとと言えば、日菜さんの”おにーちゃん”呼びだ。

黙認はしているが、人前で言われたときの周囲の視線については、あまり思い出したくない。

「壁に耳あり障子に目ありともいうから、絶対にやめて」

「はーい」

本当に大丈夫なのだろうかと不安ではあるが、これ以上話していても何も変わらないので、話を切り上げることにした。

「さてと、僕は受付のほうに行くから、日菜さんは準備の方進めておいて」

「うん、わかった」

時間的に、受付が混雑するタイミングなので、僕は日菜さんの返事を聞いて生徒会室を後にすると、受付にいるつぐのフォローに向かうのであった。

入学式も終わり、副会長であるつぐと共に、軽く生徒会室にある資料の整理をしていた。

今日は特にやることもないので、本当であればすぐに帰れるのだが

……

「日菜先輩、戻ってきませんね」

「まあ、自業自得だけどね」

僕の言葉に、つぐが苦笑する。

今、生徒会長である日菜さんは、理事長たちに怒られている最中なのだ。

「釘は差しておいたんだけど、意味なかったみたい」

「あ、あはは……」

僕の言葉に、つぐは苦笑を浮かべるしかなかった。

それは、入学式での生徒会長からの挨拶でのことだ。

『えー、テストス』

壇上上がった日菜さんは軽くマイクのチェックを行って、挨拶を始める。

『羽丘は勉強も大事だけど、生徒会長的には……るんつですよー!』

「ひ、日菜先輩?! げ、原稿!」

就任演説の時とほぼ同じことが目の前で繰り広げられたのだ。

それでも、新入生の受けはよく、沸き上がった歓声の日菜さんも手を振って応えていた。

その横で、日菜さんが放り投げた原稿を必死に回収しようとするつぐの姿に、僕は頭を抱えるしかなかった。

そんなことを行って、ただで済むはずもなく、日菜さんは挨拶を終えてすぐに先生たちに連れていかれた。

今頃は、みっちり怒られているだろう。

「今年一年、お互い頑張ろう」

「そ、そうですね」

僕とつぐは顔を見合わせると苦笑しあう。

つぐもなんとなくではあるけど、悟っているのだ。

今後待ち受ける自分の運命を。

「ただいまー」

「あ、おかえりなさい日菜先輩」

「おー、その様子だとすさまじく絞られたみたいだね」

生徒会室に入ってきた日菜さんは、どこか疲れている様子だったこともあり、僕は先生のお説教がどれほどのものだったのかがすぐにはわかった。

「今、お茶入れてきますね」

「ありがとう、つぐちゃん」

生徒会長の席に腰かける日菜さんを見て、つぐはお茶を入れに立ち上がる。

「これに懲りたら、もう少し真面目にやることだね」

「あたしは、いつだって真面目だよ」

（それであれになるのであれば、すごいを通り越すんだけど）
「どうぞ」

日菜さんの受け答えに、どう反応しているのか困惑していると、ちようどお茶を入れてきたつぐが戻ってきて日菜さんの席に茶碗を置いた。

「はい、一樹先輩も」

「僕は別にいいんだけどね。ありがとう」

頼んではいなかったが、せっかくつぐが入れてくれたのだから、僕はありがたくいただくことにした。

「……あたしって、生徒会長に向かないのかな？」

「ええ!？」

茶碗を手につむいている日菜さんの口から出た弱音に、つぐが目を見開かせて驚きをあらわにする。

「何を急に」

「理事長先生に、今のあたしは生徒会長としてふさわしくないって言われて……」

どうやら、あの挨拶は理事長の逆鱗に触れてしまったようだ。

（しようがない……少しフオローするか）

「……皆がここに楽しく通えるようにする」

「え?？」

いきなり僕が口にした言葉に、日菜さんはがばつと顔を見上げる。

「これ、日菜さんの演説の時のセリフだよ。あえて抽象的な表現にし

たのか、算段があつてしたのかは知らないけど、あの時の言葉はこのくらいでへこたれるような軽い物なの？」

「そ、それは……」

「日菜さんはしょっちゅう周りを振り回している。それでも、最終的にはそれが悪い方向に行ったことなんてそんなにない。だったら、自分がやりたいと思うことをやってみればいい。僕もつぐも力を貸すから。だよな？」

「はい！ 私で力になれるのでしたら頑張ります！」

僕の言葉に、つぐもガッツポーズをして答える。

(……つぐらないようにしないと。本当に)

あまりつぐに負担をかけると黙っていないのが数名ほどいる。

「つぐちゃん……一君。ありがとうー!!」

僕たちの言葉がよほどうれしかったのか、日菜さんはぱあつと表情を明るくすると僕とつぐを一緒に抱きしめてきた。

「ぎゃ!? ひ、日菜先輩苦しいですよ」

「ちよつと！ 抱き着かないで！」

日菜さんとつぐに挟まれる形になった僕は、身動きも取れず日菜さんに離れるように言うことしかできなかった。

結局、日菜さんの抱擁が終わったのは、それから数分後のことであつた。

第2話 充電

生徒会の仕事も終わり、紗夜と合流するべく花女の校門前で彼女が来るのを待つ。

「うーん、彩ちゃんいないかなー」

いつも、何かと僕が早く学校が終わることもあり、紗夜を校門前で待つのは僕の日課と呼ぶのにふさわしい状態になっていた。

「ねえねえ一君。あの子、彩ちゃんみたいだよー」

(まあ、今年はどうなるかはわからないけどね)

僕も新米ではあるが生徒会に所属する風紀委員長だ。

「ちよつと声をかけてみようかな?」

そうになると、今度は紗夜が羽丘の校門前で待つことになるのだろうか?

(いや、紗夜のことだから、ここで待っていきそうな気がするな)

「あたし、声をかけてくるね!」

目の前には、新生が校門から出てきており、僕たちに視線を向けられている。

「ね——」つて、ちよつと待てい!!」あう……何!?

「何をしようとしてるんだ、君は!」

今にも飛び出していきそうな彼女の襟首をつかんで、何とか行動を阻止することができた。

「何つて、彩ちゃんみたいな子がいたから声をかけようかなーつて」

「辞めなさい。変なトラウマを投稿初日に植え付けない!」

いきなり見たことがない人から質問攻めにあうのは、一歩間違えればトラウマコース直行だ。

「えー。だつて、さつきから話しかけてるのにおにーちゃんが無視するんだもん」

「だから、人前で——」あなた達、一体何してるのよ!——……あ」

これまた何度目かの注意をしようとしたところで、声をかけてきたのは僕たちが待つていた相手だった。

「一樹君……それに日菜まで。いったい何してるのかしら?」

「おねーちゃんと一緒に帰りたいなーって思ったから、一君と一緒に待ってたんだ！」

「で、ここの生徒にちよつかいを出そうとしたから止めたところ」

日菜に続くように、僕は状況説明をする。

「はあ……」

そんな僕たちに、紗夜は鋭い視線から一転して、深いため息を漏らした。

「とにかく、ここにいたら他の人の迷惑になるから、離れるわよ」

「はーい！」

「そうだね」

紗夜に促されるようにして、僕たちはその場を後にした。

僕が道路側で、紗夜と日菜の順に並んで歩いている。

もちろん、ほかの歩行者の迷惑にならないように。

「日菜が来るなんて聞いてないわよ」

「だって、さつき思いついたんだもん」

紗夜が漏らした言葉に、日菜さんは笑みを浮かべながら相槌を打つ。

「二人はこの後どうするの？」

「今日はバンドの練習よ」

「で、僕はそのコーチ」

「残念、一緒につぐちゃんのとこに行こうかなって思ってたんだけどなー」

どうやら日菜さんの中では、僕と紗夜と一緒につぐの両親が経営する喫茶店の『羽沢珈琲店』に向かうことになっていたようだが、さすがにこういう日に練習を入れないわけがない。

尤も、練習の開始時刻は色々な事情があって午後からだけど。

「あ、でも行こうといけばいつでも行けるね。一君も用事とかないー
ー「っ！ 日菜っ！——あ……ごめんさい」

日菜さんの言葉を遮るように、紗夜が声を荒げると日菜は思い出したように、それまで笑顔だった表情を曇らせて謝ってくる。

（ん？ どうしたんだらう……あー、そういうことか）

「大丈夫だよ。別に地雷でも何でもないから」

二人の様子からきつと今のが地雷に触れたのだと思ってしまったのだと考えた僕は、それが地雷でないと手を振りながら笑みを浮かべて答える。

「一樹君……無理はしてない?」

「全然。だって、終わったわけではないんだから」

紗夜が心配そうにしていること理由は、今から二か月ほど前に起こったあの騒動だろう。

それは、年末に僕が海外でのライブツアーを行ったことが発端となった。

簡単に言えば、最後の国でのライブで、暴漢に襲われたのだ。

その暴漢は、僕をはじめとした啓介や森本さんといった幼馴染五人で結成したバンド『Moonlight Glory』の所謂“やらかし”と呼ばれるファン（と呼んでいいのかわかればあれだけど）によるものだった。

幸いなことに、僕たちに大した怪我もなかったのだが、弦の張り替えのために、僕がギターを持っていたのが災いして、ギターに大きなダメージを与えてしまったのだ。

弦を張り替えて、残りの曲の演奏を続けたのだが、張り替えたはずの弦が次々に切れていき、それでも何とか気合で全楽曲を弾ききることができた。

……ギターのネックが折れるという代償と引き換えに。

もちろん、ギターが壊れたことはショックだったが、壊れたら直せばいい。

そのことを僕は理解していたので、それほど尾を引くことはなかった。

だが、現実とは残酷なもので、どの修理会社からも断られ続けた。理由は、僕のギターが他のギターとは作りが違うという感じのもので、直すことはできても元の音色が出せる保証がないというものだった。

僕個人でいろいろと調べた結果、中井さんの伝手で何とか引き受けてくれる業者と出会うことができた。

直せばまた弾けるようになる。

その希望の光が見えた矢先に、さらなる問題が発生した。

それが、僕たちが襲われた事件の脅迫状が事務所に届けられており、それを隠ぺいしたというニュースだった。

そのニュースは事実であり、簡単に話すと僕たち宛ての脅迫状が事務所に届いた際に、ムングロのスタッフである相原さんに渡すと言って受け取った人物が、それを怠ったのだ。

そして、これを起こしたのがPastel*Palettesのスタッフで、倉田派の人間だったのだ。

この倉田派と言うのは、パスパレのデビューライブの一件を引き起こした元凶で、僕がつぶした人物の残党たちだった。

その結果、彼らから恨みを買っていた僕たちは彼らの報復を受けたという格好になったのだ。

当然、このようなことが世間が許すはずもなく、大炎上となった。

事務所に対しての抗議の電話やメールが殺到し一時的に業務が停止状態になりかけたらしい。

その状況を逆手に取ったのか、倉田派の残党の一人である『新田』という人物が僕たちに対して無期限の活動停止処分を要求してきたのだ。

通常であれば、認められるはずのない要求だが、幹部たちも倉田派の仲間だったこともあり、あっさりとは処分が下ってしまった。

そのことが、また報道機関に取り上げられこの大炎上は、もはや収束不能にまで陥ってしまったのだ。

そんな中で、とばっちりを受けたのがPastel*Palettesのメンバーたちだ。

ネット上やメールなどで、彼女たちへの誹謗中傷が相次いだのだ。

そして、とうとう最悪の事態に発展していく。

それが、彼女達に対する殺害予告だ。

イベントに出ればただでは済まさないという脅迫状を、色々なイベ

ントの運営会社などに送り付けたらしく、予定されていたイベントはすべてキャンセルされてしまったのだ。

その結果、彼女たちは仕事が、なくなってしまう事態にまで陥ってしまったのだ。

そんな中で、何とか開かれたリリイベに、僕たちは彼女たちを守るために変装して潜入した。

それによって、彼女たちは特にケガなどなく無事にイベントを終わらせることができた。

……という一連の流れは、実は社長が仕組んでいたものであり、倉田派の残党を一掃するためのものだったらしい。

社長でも、ここまでの事態になるとは想像すらしていなかったらしく、頭を抱えていたのは記憶に新しい。

(うん。思い出すだけでもかなりすさまじいな。これ)

ざっと事件のことを振り返っていたが、もはや『これで一つのドラマでもできるのでは?』と思うほどの濃厚さだった。

ちなみに、この事件の続きだが、社長の目的も成就したのだが、炎上がまだ続いている状態であり、この状態で復帰しても、僕たちにとってかなり危険な状況であるという判断から、ほとぼりが冷めるまでこのまま休止状態にさせておくこととなった。

その期間、僕たちはスタジオオミュージションとして活動することで、レベルアップした状態で、みんなが集まりステージに立とうと決意を新たにしたのだ。

(とはいえ、まだまだ先は長いなあ)

先日、ネットで丸山さん直伝のエゴサをしたのだが、未だに炎上は収まる気配がない。

事務所に対する批判が5割、パスパレに対する誹謗中傷・それに対するパスパレファンからの反撃等が4割、そして僕たちへの批判が1割と言った感じだった。

僕たちに対しては誰かが言っていたように、海外ライブを行うのが悪いというものが大半だったが、その批判はごくごくわずかな意見だ。

そんなわけで、まだ再開するのは無理だというのが相原さんの結論で、いつになるのかも検討がつかないらしい。

(この充電期間、一体いつになったら終わるんだ?)

活動停止期間ではなく、“充電期間”と呼んでいるのだが、一体いつまで続くのか……終わりのないそれに、僕は静かにため息を漏らすのであった。

第3話 始まる新しい生活

そうこうしているうちに、僕たちと日菜さんは別れて、僕たちは R o s e l i a の練習場所となっているライブハウス C i R C L E に着いた。

「おはようございます。遅れてしまいすみません」

「おはよう、紗夜。大丈夫大丈夫、まだ時間まで余裕があるよ」

C i R C L E のロビーには、僕と紗夜以外のメンバーがそろっていたが、リサさんの言う通りまだ集合時間より少し前だった。

僕たちは彼女たちが座っている席のところへ歩み寄る。

「それにしても燐子と紗夜に一樹君は生徒会の仕事があるから大変だよね」

「すみません。ですが、練習には支障が出ないようにしますので、安心してください」

リサさんの言葉に、紗夜は生真面目に力強い口調で返す。

(紗夜がそういうことは、大丈夫っぽいかな)

「ふっふっふー。さらなる進化を超えた大魔姫、あこ姫ここに降臨っ！」

「あー、あこさん入学おめでどう」

相変わらずと言えばあこさんだろうか。

語彙力は高まったが、相変わらず中二病のようなセリフは、高校になっても健在のようだった。

先ほどの、練習の時間が午後になった理由が、今日が入学式を迎えるメンバーがいたりそれ関連で学校に行く必要がある人がいたからだ。

「……雑誌を広げて何をしてたんですか？」

そんな中、彼女たちが座っている席のテーブルに置かれていた音楽系の雑誌と思われるものに視線を向けながら、紗夜さんが疑問を投げかける。

「あー、これ？ これは……」

「美竹君、あなたのことが書いてあるわ」

紗夜の疑問に答えようとするリサさんの言葉を、遮るようにして湊さんは僕のほうを見ながら言うのと、僕に見えるように雑誌を移動させた。

紗夜と一緒に雑誌をのぞき込んでみると、そこには『謎のギターリスト、カメレオンの正体に迫る！』という見出しの記事が書かれていた。

雑誌には、今年の冬に突如として現れた性別や年齢が不詳の謎のギターリストで、どのようなバンドでもリハを行っただけで、まるで元からそのバンドのメンバーだったかのようにバンドの音に合わせられることから、体の色を変化させることができる動物である『カメレオン』の名前で呼ばれている。

過去にも同様の名前が愛称のギターリストがいたが関連は不明らしい。

そのようなことが羅列されており、最終的には正体を特定するには至っていない。

尤も、その正体は僕なわけだけど。

「この記事は、どの雑誌よりも、かなり美竹君に迫っていると思うわ」「うん、これはかなりいい線行ってると思うよ」

湊さんの言葉に、僕は相槌を打つ。

これまで、いくつかの説を僕は見聞きしている。

例えば、プロバンド説。

プロのバンドのギターリストが話題作りのためにやっているというものだけど、これは全く持って見当違いだ。

他にも、幽霊とかオカルトチックな説があげられていたが、この雑誌で提唱されていたのは『HP説』だった。

今回は、黒装束を身に纏っていたのだが、それが数年前に現れたバンド『hyper—Prominence』の特徴と酷似していると指摘している。

仮にそうだとしたら、このカメレオンは順当に考えれば『GK』……つまり僕か『AG』……森本さんのどちらかになるが、この説の真偽及び人物の特定には至っていない。

それがこの記事での最終的な締めくくられ方だったのだ。

「一樹君、本当に大丈夫なの？」

「そもそも、なんで名前とか素顔を隠してるの？」

心配そうにこちらを見てくる紗夜に続くように、リサさんが根本的な疑問をぶつけてきた。

確かに、そうだ。

元から素顔をさらしていれば、苦勞することはそうそうないはずだ。

「それはね、リサ姉。そうするとカッコいいからだよ！」

そんなリサさんに、あこさんは自信に満ちた様子で断言してきた。

「あ、あこちゃん。さすがに、それは……」

「まあ、そんなところかな」

「ええ!？」

僕の答えに、リサさんはおろか断言していたあこさんまでもが驚きの声を上げる。

「一樹君……」

そして、そんな僕に注がれる紗夜からの呆れたようなまなざしは、かなりつらかった。

「というのは冗談で、かつこいいからっていうのもあるにはあるけど、面倒だからというのも一つの理由かな」

その視線に耐え切れなくなった僕は、慌てて説明し直す。

素顔をさらしたことで、生じるであろう問題を考えれば、このくらの手間はとうていではない。

もちろん、何もかもが謎に包まれているというのは、僕的には男のロマンにも思っているからという理由もあるのが事実だけど。

「そういえば、主催ライブのほうはどう？」

数日前に、湊さんが口にした主催ライブのことが気になっていた僕は、湊さんに聞いてみることにした。

「その件で、あなたに意見を聞こうと思ったのよ。このライブの目標の部分でね」

「そうそう、一樹君からも意見とかほしいかな」

「うーん、そうは言われてもねえ……」

意見を求められるのは僕とすいてはうれしい限りだが、果たしてどうしたのか……

「とりあえず、各々が抱えている問題点を一つでも克服すること。そのうえで、主催ライブを成功させること……かな」

結局僕が癒えたのはそのくらいだった。

彼女たちがレベルアップをしてくれればそれだけでもいいが、今回やろうとしているのは主催ライブ。

主催ライブと言うのは、ライブハウスがバンドを集めて行うライブである『ブッキングライブ』とは違い、そのバンドが開催するライブを言う。

ブッキングライブは、ライブハウスやスケジュールなどは、そのほとんどがライブハウス側で決められているので、ライブの練習に専念できるメリットがある一方で、自分のやりたいようなライブができないというデメリットもある。

逆に、主催ライブではライブをしたい場所やライブの構成等々自分たちで決めることができるので、自由度は増すメリットがある一方で、すべての準備を自分たちでやる必要が出てくるうえに、チケットのノルマといった諸々のことまで考えて行かなければいけないデメリットが存在する。

そういう意味では、主催ライブとは一言でいうが、開催するまでにはとてつもない労力と交渉術が問われるのだ。

僕たちは、事務所に所属しているので、こういった問題については気にする必要がない。

そういう意味では、事務所に所属していることのメリットともいえるだろう。

(まあ、今は完全にデメリットのほうがでかいけど)

自分の置かれている現状に、僕は心の中で苦笑する。

「わかったわ。リサ、あこ、紗夜、燐子。この主催ライブを成功させるわよ」

『おー！』

湊さんの言葉に、みんなが右手を上にあげて声を上げる。

紗夜も顔を赤くしながらではあるものと同じように右手を上げて
いる姿は、なんとも感慨深くもある。

「さあ、練習を始めるわよ」

「はいー」

練習の開始時間が来たようで、湊さんの号令により僕たちはスタジ
オに向かっていく。

これが、いつもの僕の日常なのだ。

第4話 ライブの誘い

入学式を終え、土日を挟めば始業式。

最初のHRで自己紹介を済ませつつ、その日のうちに授業が始まるというのも慣れたものだ。

(それにしても、今年は静かでいい)

これまで、日菜さんとは同じクラスで、席も隣同士という状態だった。

それはまるで呪いでもかけられているのではないかと思うくらいで二年連続で続いていた。

別に、それが嫌なわけではない。

ただ、授業中などに声をかけてきたりちよつかいを出されたりするのは少々考え物だ。

(おかげで、先生に問題を解かされたりする羽目になるし)

そして、正解のために先生が苦虫をつぶしたように悔しい表情を浮かべるといのが、恒例行事にもなっていた。

それも去年までのこと。

今年は、日菜さんは別のクラスなのでその心配は一切ないのだ。

そして、僕の隣の席になったのが

「……………」

湊さんだった。

今年はA組。

リサさんも同じクラスではあるのだが、やはり出席番号順で、僕と湊さんが隣の席になってしまったのだが、彼女の場合は静かすぎるのだ。

(これは、慣れるまで少し時間がかかりそうかな)

静かだったら静かだったで、落ち着かないという矛盾に満ちた状況に、僕は苦笑を浮かべながらも授業に集中する。

今年は生徒会に入ったことで、色々と忙しい日々が続いていた。

とはいえ、仕事は割と早くに終わってしまっていたりもする。

理由は……生徒会長が主な要因だということに察してほしい。

そんなある日の放課後、僕はいつもの通学路とは真逆の道に歩いていた。

それは紗夜を迎えに行くためではない。

人通りが少なくなり始めるあたりに差し掛かったあたりで、まるで僕が来るのを待っていたかのように僕の真横に、一台のワンボックスカーが滑り込むように止まった。

「兄貴、迎えに来ましたぜ」

運転席に座っていた男性に一礼しつつ、僕は車に乗り込むと後部座席に腰かけた。

「アリバイ工作みたいな事させてすみません」

「いやいや、謝らないでください。お役に立てて自分たちは光栄なんですから」

ドライバーはトモさんだ。

阿久津たちの一件の時にお世話になって以来、色々と力を貸してくれている人だ。

「さあ、いつもの衣装用意してありますから、着替えてください」

「すみません」

そして僕は素早くブレザーを脱ぐと黒装束に身を包んだ。

それは僕が、カメレオンである証でもある。

この日は、スタジオミュージシャン“カメレオン”として、演奏をしてほしいという依頼が入っているために、依頼者がいるライブハウスまで向かっているのだ。

僕が素性を隠すうえで一番のネックは、依頼者のもとへ向かうまでの道中と帰宅する時だ。

歩いて帰れば後を付けられてしまうし、かといってタクシーというものもあれだ。

そんな時に、トモさんが救いの手を差し伸べてくれたのだ。

最初は気が引けたけど、トモさんの厚意に甘える形となったのだ。そうした経緯があって、毎回目的地までの送迎を、してもらっているのだ。

「そろそろ目的地です。この辺でお止めします」

「ありがとうございます」

僕はトモさんにお礼を言いつつ、車を降りて目的地に向かうのであった。

「カメレオン、今日はありがとう」

「最高のライブができたぜ！」

「いえいえ。こちらこそお声がけいただきありがとうございます」

ライブも無事に終わり、依頼人である人たちからのお礼に、僕もお礼を返す。

「なあなあ、差し出がましいがよ、俺のバンドに入らないか？」

このようにスカウトされるのも、いつものことだ。

「俺達だったら、あのムングロのように……いや、それ以上まで高みに行ける！」

「……」

バンドリーダーの男性の言葉に、僕は少しだけ腹が立った。

僕たちは、これまで一步一步前に進み続けてきて今がある。

それを貶されたような気がしたのだ。

「ありがたいお誘いですが、私にはあなた方には合いません。何せ私はカメレオンですから」

「あ、おい——」

僕は一礼すると、呼び止めるのを無視してその場を後にする。

これもまたいつものことだ。

僕のことをバンドメンバーに引き抜こうとしてきては、門前払いにあう。

相手に対して申し訳なさは少しだけではあるが存在する。

でも……

(僕は啓介たち以外とバンドを組む気は、まったくないんだよね)

その一言に尽きる。

僕が全力で暴れられるのは、後にも先にも啓介たちしかいないのだ。

「兄貴、尾行のほうは大丈夫みたいですので、着替えてもいいですよ」「すみません」

帰り道、家の近くまで送り届けてくれるともさんにお礼を言いながら、僕は制服に着替える。

車の後をつける不審車がないかどうか、トモさんは確認してくれているのだ。

おかげで、そういったルートから僕の正体がばれるという心配は軽減されている。

「今日もお疲れ様です。感触のほうはいかがで？」

「ええ、今日もいいライブができました」

「それは何よりです。俺たちは、兄貴のバンドの大ファンっすから」

「あ、ありがとうございます」

真正面から言われて、少し恥ずかしく感じてしまった僕は、頭を掻きながらお礼を言う。

トモさんには「いいライブ」と答えながらも、本心では全く違うことを感じていた。

(全然物足りない。もっとももっとも激しい音を出したいのに)

曲調の話ではない。

スタジオミュージシャンとして活動する中で、僕は自分の力の3割も出せない状況が続いていた。

もしそれ以上出してしまうえば、そのバンドのライブは失敗になってしまう。

それでも、力を抜いて演奏をしていることで、僕はフラストレーションが溜まりつつあった。

全開でライブをやりたい。

そんな欲求が出てくる一方で、それを受けとめられるような人はいないというのも、僕は分かり切っていた。

(はあ……これはいつかスタジオで全力で演奏するようかな)

車窓を眺めながらそんなことを思っていると、ポケットに入れてい

たスマホが震えだす。

僕はスマホを取り出すと、画面を確認する。

(メール? 紗夜からだ)

それはメールの受信を知らせるものだったようで、僕は紗夜からのメールを確認する。

(galaxyで、リニューアルライブ?)

そこには、Roseliaが“galaxy”というライブハウスのリニューアルライブに出演することが決まったことを知らせる内容が記されていた。

(そういえば、森本さんがそんな名前のライブハウスが商店街にあるって言ってたような)

キャパも少なく、そんなに興味もなかったので気にも留めていなかったけど。

(なんだか彼女たちも、色々と変わってきてるんだね)

少し前だったら、自分のレベルには合わないと言って拒否していたはずなのに、それを受け入れるようになったことは、僕としては喜ばしい限りだ。

(えーっと、『頑張ってるね』で……送信っと)

我ながら、もっと気の利いた文面があるのだろうが、僕にできる精一杯の返事はそれだった。

この時の僕は、このライブが何もかも始まりを告げることになるとは、思いもしていなかった。

第5話 告知

ライブハウスgalaxyのリニューアルライブ当日。

僕は、一足先にライブハウスの客席に来ていた。

ライブハウス内は座る席がわずかに用意されているが、基本的には立ってライブを見るのがメインのようだ。

壁のレンガ造りっぽい感じが、何とも言えない渋さを醸し出しておりまた、ステージの背景が宇宙(?)なのも、斬新だなど思わせるのに十分だった。

そんなライブハウスgalaxyのリニューアルライブ。

どう変わったのかがわからないので、あれだけ僕はこのライブを堪能することにした。

トップバッターは僕の妹である蘭と幼馴染である五人が結成したバンド『Afterglow』だ。

中々に熱い演奏をしてくるので、ステージは一気に彼女たちの熱で満たされる。

「galaxy、悪くないね!」

彼女たちの演奏が終わり、蘭のいつもの言葉が放たれる。

ちなみに言っておくが、蘭の“悪くない”は大まかに言うと、“良かった”という意味だ。

『Afterglowでしたー!』

「良かったよー!!」

みんなが手を振ってステージを去って行く中、僕も彼女たちに手を振って彼女たちにねぎらいの言葉をかける。

……聞えているかは知らないけど。

というより、間違いなく聞こえてないと思うけど。

そして彼女たちが去って行って数分後。

「ミッシェルー!」

「かのちゃんせんぱーいー!」

(うわ!?! い、一体どこから出てきてんの!?!)

次の演奏を行うバンドである『ハロー、ハッピーワールド』のボー

カルの弦巻さんにギターの薫さん、ベースの北沢さんの通称三バカ（奥沢さん命名）が姿を現した。

ステージの反対側の扉のほうから。

聞えた言葉からして、おそらくは花音さんたちを探しているのだろうけど、間違いなく彼女たちが間違ったところから出てきている。

当然、彼女たちの登場で歓声が沸き起こり、それに気が付いたミッシェルと花音さんがステージ袖から現れた。

そんな二人を見つけた三人は、なんとまるで泳いでるかのようになり、ステージのほうまで移動し始めた。

この時ほど観客席の端のほうにいいといてよかったと思ったことはないだろう。

「ハッピーー！」

途中で、聞えた弦巻さんの声から推測すると、おそらくは彼女たちのバンドの掛け声を言ってるのだろう。

『えがおのオーケストラー！』

そんなハプニングはあったが、普通にライブが始まった。相変わらず、弦巻さんはステージの上をよく動いている。

（なんだか、見ていると自然と笑顔になれるんだよね）

彼女たちの存在は、ある意味謎の塊だった。

そして、最後は弦巻さんがものすごい高さまでジャンプをして、ライブは終わった。

（次はRoseliaか、Poppin' Partyか……）

どっちが来てもおかしくないバンドたちだ。

特にポピパのほうは最近はライブに行っていないので、どのくらい演奏がうまくなったのかはわからないので、楽しみではある。

そう考えていると、ステージの上に現れたのはRoseliaだった。

「行くわよー！ LOUDER！」

湊さんが告げた曲名で観客たちは歓声を上げる。

（なるほど、凄まじく熱い曲をぶつけてきたわけだ）

Afterglowの熱い演奏に対抗していると思わせるような

選曲に、僕は顔をほころばせていた。

一気に照明が暗くなり薄暗い青色の照明が彼女たちを照らし出す。

(何度聞いてもいい曲だね、これ)

Afterglowとはまた別の熱さがあるこの曲は、間違いなくRoseliaの代名詞と言っても過言ではないほどの曲だった。

(ちよつとドラムが走りがちだけど……まあ、後で言えばいいか)

もちろん、演奏のうまい下手を見てくことも忘れない。

この後に控えているライブのためにもなるのだ。

彼女たちの演奏も終わり、残すのはPoppin' Partyのみだ。

あこさんと白金さんの二人がステージ袖に移動すると、照明が落ちた。

『ポピパ、ピポパ、ポピパピポパー!』

(それ、毎回言ってるの!?)

確かに会場は一気に盛り上がったが、ものすごく噛みそうな掛け声は、何度聞いてもツツコミを入れたくなってしまう。

もし誰かが、僕に言うようにお願いされたとしても断るであろうその掛け声とともに再び照明がつくと、ステージの上には戸山さんたちの姿があった。

『私たちは、Poppin' Partyです!』

最初の掴みはぼつちりだった。

『久しぶりのライブで、緊張していますけど、とてもうれしいです!』

『うん。まるで帰ってきたみたいだね』

『いや、ここに立ったの初めてだろ!』

(あはは、相変わらずだね)

恐ろしいのは、素で言っていることだったりもするのだが、MCとしては十分だ。

『それでは、聴いてください! Happy Happy party
y~!』

そして始まったのは、ポップな曲調のものだった。

(演奏技術はそんなに高くないんだけどね)

演奏が下手というわけでもないが、それほど高いわけではない。それでも、楽しくなってくるこの感じは、彼女たちでしかできないことだ。

なんだかんだごちやごちや言っても、彼女たちの演奏はとてもいいという最終的な結論が変わることはない。

こうして、リニューアルライブは何の問題もなく、無事に幕を閉じることとなり、最後に今回のライブに出演した全バンドがステージに上がる。

『ありがとうございます！』

そのお礼の言葉に、僕の周りの観客たちも歓声で応える。

そんな中、紗夜はマイクの前に移動する。

『最後に、皆さんに告知があります』

『私たち Roselia は来月、主催ライブをやるわ』

(なるほど、そういう狙いもあったわけか)

経験値積みという理由だけではなく、来月開かれる主催ライブの告知という狙いもあったのかもしれない。

もしそうだとすれば、お見事といったところだろう。

とはいえ、Roselia クラスのバンドであれば、このような場での告知をしなくても、十分見に来てくれる人はいるとは思うけど。

観客たちの反応もいい感じだった。

『他に誰か告知のある人はいますか？』

その紗夜の言葉を受けて戸山さんは花園さんたちと頷き合うと、さっさと手を挙げた。

『私たちも、ライブやります！』

『Poppin' Party, ライブします！』

戸山さんの告知に続くように花園さんたちも声を上げた。

それによって、会場内は再び歓声に包まれる。

(あの感じだと、たぶん思い付きだろうな……)

彼女たちの様子から、かねて計画していたという印象は感じられなかったので、僕はそう結論付ける。

こうして、リニューアルライブは無事に幕を閉じるのであった。

彼女たち、Poppin, Partyの主催ライブが後々、僕たち
を巻き込んだ騒動に発展するとも知らずに。

第1章、完

第2章 『主催ライブ』 第6話 交渉

「あ、一樹さん！」

「お、あこさんにみんな。ライブお疲れ」

galaxyの外で待っていると、中からあこさんたちが出てきたのでねぎらいの言葉をかける。

「私たちのライブ、どうだったかしら？」

湊さんの問いに、僕は少しだけ考えて結論を出した。

「何時ものように素晴らしいライブだった。合格かな」

「いえーい！ 一樹君の合格貰っちゃった☆」

(ものすごいはしゃぎようだ)

「宇田川さん、今井さん周りの迷惑ですよ」

「す、すみません」

そして紗夜に咎められるのも、いつものことだ。

「主催ライブの告知をした以上、これからは本格的に準備を進めない
と。場所とかは候補とかあったりする？」

「ええ。話し合いで決めた人数に合うライブハウスは見つけられた
わ。交渉はこれからよ」

「なるほど、見切り発車で言ったわけじゃないようで安心だよ」

「これで見切り発車で告知だったら、僕は間違いなく頭を抱えてい
ただろう。」

……まあ、湊さんたちに限ってそれはないだろうけど

「それじゃ、明日からはライブの準備を……まずはライブハウスを抑
えるとしましょうか」

こうして、僕たち……というよりはRoseliaのみんなは主催
ライブに向けて準備を始めるのであった。

BanG Dream! ～隣を歩むもの～
ブ』

第2章 『主催ライ

数日後のある日、僕たちは渋谷を訪れていた。

その目的は、Roseliaの主催ライブを行う場所……ライブハウスとの交渉の付き添いだ。

「それでは、よろしくお願いします」

その交渉もうまくいき、ライブハウスを押さえることはできた。

「リサ姉すごい！」

「あはは、そんなに褒められると照れちゃうなー」

目を輝かせているあこさんに、リサさんは照れた様子で、自分の顔を手うちわしていた。

「ええ。今井さんの一歩も引かない交渉はさすがとしか言えないですね」

「そんな、紗夜まで〜」

（確かにすごいけど……諸刃の剣だね、これ）

リサさんの交渉術は確かにすごかった。

それこそありとあらゆる手を使って、使用料を値切っていたのだから。

とはいえ、危惧しているのは条件の一つにしている『当日のライブのセッティングを自分たちで行う』というやつだ。

ただでさえ当日はかなりの忙しさが予想されるのに、ライブのセッティングまでできるものだろうかという疑問があるけど。

（まあ、基本的にフォローはしないようにしはしてるけど、やばくなったらするようになろうかな）

これは、彼女たちのレベルを大きく上げるためのもの。

僕が手を貸してしまっただけの意味がなくなってしまうため、基本的には彼女たちの手で準備を進めてもらうのが僕の方針だ。

もちろん、雑用や一番手が掛かりそうな交渉事などは、必要があれば僕のほうでも動くようにはしている。

とはいえ、準備が進まずライブができないとなれば一番被害を被るのはこのライブを楽しみに来てくれるであろうオーディエンスの人たちだ。

それだけは何があっても回避しなければならぬ事態。

よって、このままだとライブができなくなる危険水域まで達した際には僕は手を出すようになるだろう。

(足手まといになるかもだけど)

もつとも、僕にできることなんてそれほどなかったりはするが、人手は多いに越したことはない。

次の週末、僕と紗夜は再び渋谷を訪れていた。

「一樹君、ここで間違いないのね？」

「うん。先方からはここを指定されてるよ」

先方から指定された待ち合わせ場所であるオープンカフェだった。

とりあえず喫茶店なのだから、何も頼まないのは失礼なので僕と紗夜は、コーヒーを注文して空いている席に腰かけると、相手が来るのを待つことにした。

「……………」

コーヒーを口に行っている僕たちに、会話らしい会話はない。

今日ここに来たのは、遊びではなくかなり真面目で、なおかつ神経を使うような内容が目的の物だ。

また、いつ相手が来るのかがわからない以上、気を抜くわけにはいかないのだ。

「失礼、貴方達があのRoseliaの方？」

そんな時、僕たちに女性が声をかけてくる。

その女性は短めの金髪でなんとなくではあるが、ボーイッシュな印象を感じる。

「はい。ギターの水川紗夜と申します」

「私は、付き添いできた美竹一樹です」

紗夜に続いて、僕も席を立つと名前を伝えて一礼する。

「ご丁寧にも。ウチは『Magnolie』のボーカルのシェリーよ」

とりあえず悪い人ではなさそうなので、一安心といったところだろ

う。

今日の目的は、Roseliaの主催ライブのゲストバンドの出演交渉だ。

やはり、依頼するからにはRoseliaのレベルに見合うバンドのほうがいい。

そんなわけで、僕のほうでいろいろと下調べをして、いくつかの候補をピックアップを行ったのだ。

後は湊さんたちがその中からバンドを選び、本格的に出演の交渉を開始することになる。

(本当はリサさんと交渉にあたる予定だったんだけどね)

こういった交渉事は、リサさんのほうが適任であるのは、これまでの数々の場面からも立証されているので、今回も交渉をリサさんが行い僕はそれの付き添いと思ったのだが、突然名乗りを上げたのが紗夜だった、

名乗りを上げたことにもだけど、それを認めた湊さんたちにも驚きだったのは記憶に新しい、

(でも、なんでリサさんは笑ってたんだろう?)

その疑問だけは、未だに不明のままだ。

「ところでさ、キミ」

シエリーと名乗った女性が席に着くのを確認して、僕たちも席に着くとシエリーさんはこちらの顔を興味深げにのぞき込む。

「はい、何でしょうか?」

若干後ろに引きながら、シエリーさんに用件を尋ねる。

「もしかして、ムングロの一樹?」

「え、ええ。そうです」

やはり、知っている人は知ってるんだなと思いつつ、否定する必要もないので頷きながら応える。

「やっぱり! いやー、ウチキミのファンなのよ! 握手してよ」

「ど、どうも」

前のめりになって握手を求めるシエリーさんの高いテンションに、僕は圧されながらも握手に応じる。

活動停止中とはいえ、ファンは大事にしなければいけない。
むしろ、これが完全にプライベートで行われなくてよかったと喜ぶべきだ。

「ゴホン。そろそろいいでしょうか？」

「あー、ごめんごめん」

紗夜のやや大きな咳払いに、シエリーさんは軽い口調で謝りながら手を放して姿勢を正した。

（なんか、怒ってない？ 紗夜）

紗夜の全身からどことなく怒りのオーラが立ち込めているのを感じて、僕は違う意味で圧される。

「大丈夫よ、貴方の彼氏さんを奪うつもりはないから」

「ッ?! べ、別にそういうつもりでは」

軽く笑いながら言うシエリーさんに、紗夜は顔を真っ赤にしながら反論するが、説得力は皆無だった。

（やっぱり、嫉妬してたんだ）

そして、ようやく紗夜の怒りが嫉妬によるものだという確信を得ることができた。

「それにしても、二人が交際してるのってホントだったのね」

僕と紗夜との交際は、阿久津たちの一件で報道されているので、もはや世間に知れ渡っているといっても過言ではない。

「あの、本当にその話は……」

とはいえ、その話をされるというのもかなり僕たちにとっては恥ずかしかったりもするので、話を本題に変えることにした。

「ごめんごめん。で、あなた方のライブの出演の件だけ」

こうして、何とか本来の目的である出演交渉が始まるのであった。

それを僕は、ほっと胸をなでおろしながら、コーヒーを口にして交渉を見届けるのであった。

第7話 嫉妬

「それじゃ、当日はよろしくと友希那に伝えて頂戴」

「はい、責任もってお伝えします。ありがとうございます」

交渉も無事に終えることができ、シエリーさんに再度お礼を言っ
て見送った。

結果は文句なしの物だ。

先方も出演に快く応じてくれた。

「それじゃ、ちよつと会計済ませてくるから待ってて」

そう言っつて、紗夜の返事を聞かずにレジのほうに向かっつくと、自
分たちの分の精算を済ませて紗夜のいる場所に戻る。

そんなわけで、僕たちは湊さんたちが待っているであろうC i R C
L Eに向かうことにした。

「良かったね、紗夜」

「そうですね」

僕に対する返事が、どこか刺々しかった。

「えっと、紗夜さん。もしかして怒っていらつしやいまするか？」

彼女のオーラに圧されて、変な言葉遣いになってしまった。

「別に。……あなた、鼻が伸びてましたよ」

「そ、それは気のせいじゃないかな？」

本人は否定しているが、完全に認めているようなものだった。

無言で、すたすたと歩いていく紗夜に、僕は謝るべきなのかそれと
も紗夜が落ち着くのを待つべきなのか悩んだ。

「もしかして……嫉妬？」

その僕の言葉に、紗夜は足を止めた。

(あ……今のは地雷だった)

そして、言っつた後で自分の今の言葉がまずいのはということに気
が付いた。

「だつて……す、好きな人が他の女性の人と楽しそうにしてるのよ
……嫉妬くらいしても当然じゃないっ」

頬を赤くしながらこつちを見て声を荒げる紗夜の表情は、怒りとい

うよりも、どこか泣き出しそうな感じに見えた。

「ごめん。無頓着すぎた」

紗夜の言うとおりで。

もし僕が紗夜と同じ立場だったら、同じことになるはずだ。

ほんの一時のことだと、軽く考えていた自分に今更ではあるが、後悔の念に駆られる。

「……………本当に、反省してる?」

「うん」

仮に数秒だったとしても、僕には数分にも感じられた無言の後に、紗夜からの問いに僕は即答で答える。

「じ、じゃあ……………ぎゅって、抱きしめて」

「え、ここに?」

紗夜の要求に、僕は辺りを見回して聞いた。

僕たちのいる場所は、人通りが多いとは言わないが、そこそこある場所だ。

今は人の姿は見当たらないが、それがいつまでも続く保証はない。紗夜の言う“抱きしめて”は、普通に抱きしめるという意味だけではなく、どちらかというところ“抱きしめてキスして”という意味のほうが強いのだ。

紗夜はこくと頷くと目を閉じる。

それは、“ここでして”というのを言っているようなものだった。

(紗夜、完全に自棄になってるぞ、あれ)

恥ずかしさに顔を赤くしながらも、やめようとしなのを見ても、嫉妬が彼女をやけにさせているのは間違いないかった。

(ええい! 考えるよりも応えよう!)

考えている間にも、人が来る可能性だってある。

そもそも、こうなった原因は僕にあるのだ。

僕は、踏ん切りをつけると紗夜の腰に手を回して、静かに抱きしめる。

最初は強張ったからだだが次第に弱まっていく。

「一樹君……………」

そして、僕は目を閉じて紗夜の唇に軽くキスをした。

「これで、許してくれる？」

顔を離れた僕は目を開くと、紗夜に声をかける。

「ええ……ふふ」

僕の言葉に答える紗夜の表情は、幸せそうに微笑んでいた。

(今後はいろいろ気を配ろう)

こういう場所でのそれは、スリルがあつていいかもしれないけど、さすがに精神的によくはない。

と、そんなことを考えながら、誰にも見られてはいないかと、もう一度あたりを見回してみる。

「ジューー」

「っ!!??」

真横で、興味深げに見ていた人物に、僕たちはものすごい速さで離れたが、時すでに遅く思いつき見られてしまっていた。

「おねーちゃんに「君、だいたーん☆」

「ひ、ひな……い、いつから?」

笑みを浮かべている日菜さんに、紗夜が問い詰めるが、それは完全にはいけないうような気がする。

「えーつとね、おねーちゃんが『本当に、反省してる?』って言ってる
ところから」

(ほとんど最初からじゃん)

要するに、すべて見られていたということだ。

「――」

(あ、固まった)

恥ずかしさに耐え切れなくなった紗夜は、顔を真っ赤にして固まってしまった。

だが、そこで一つの疑問が浮上する。

「……一体どこで見てた？」

僕は確かにあたりを見回したはずだ。

日菜さんの言っている通りだとすれば、その時に僕が見つけているはずだ。

「あの植え込みの壁！」

「思いつきりデパガメじゃないか!!」

あまりにも胸を張って言い切る日菜さんに、僕のツツコミも自然と強くなる。

「えー、二人ともガードが堅いから、二人のイチヤイチャなんてめつたに見れないんだもん」

「当たり前だ！ 見世物じゃないんだから」

「でも、その割にはこんなところで堂々とやってるじゃん」

日菜さんのその言葉に、僕は完全に言葉を詰まらせる。

そう言われてしまうと、僕には反論のしようがないのだ。

「とりあえず、この話は誰にも言わないこと。紗夜がああなるから」

「あーうん。今度からはもう少しそつととして見るねっ」

そういう問題でもないのだが、もうこの時点で僕には突っ込むほどの気力もなかった、

その後、正気に戻った紗夜と共に、CIRCLEに向かうのであった。

……その道中、紗夜からはものすごく距離を取られてしまったけど。

一つだけ確信したのは、紗夜と一緒に来ることになったのは、おそらく嫉妬によるものだったということだ。

そうだとすると、リサさんの笑みも頷ける。

(これは、リサさんからもからかわれるのは覚悟したほうがいいのか)

この先のことを考えると、妙に足取りが重くなってしまうのであった。

第8話 予感

主催ライブに向けての準備も本格的に始まった。

Rosealiaのみんなは、練習と主催ライブの準備を両立させるべく奮闘している。

そんなある日の放課後、紗夜からCiRCLEで待つように言われたため先にCiRCLEで湊さん達と一緒に紗夜と白鷺さんの到着を待っている

「お、おはようございます」

「おはようございます」

生徒会活動をしていたからか一緒にタイミングでやってきた二人に続いて戸山さんとみさんに市ヶ谷さんの三人もやってきた。

三人の表情はどこか緊張に満ちているような感じがうかがえる。

「湊さん、いきなりで悪いのですが主催ライブにPoppin', Partyの皆さんを招こうと思うのですが、どうでしょう?」

「……………」

紗夜の提案は突然だった。

「どういうこと?」

「実は——」

僕の問いに、紗夜は事のあらましを話してくれた。

戸山さんのリニューアルライブでの告知は、やはりその場の勢いで言った感じだったらしく、準備はおろかどうすればいいのかも全く分からないありさま。

そこで、白金さんの提案で彼女たちをゲストバンドとして招くことで、主催ライブとはどのようなものなのか、そのヒントを得られるのではないかという考えに至ったらしい。

「お願いします!」

「お願いします!」

「します!」

三人も深々と頭を下げて頼みこんでくる。

「あこは賛成です! 友達と一緒にやったほうが楽しい!」

「あー、何度も言うけどこれは遊びじゃないのよ」

賛成の声を上げるあこさんに、湊さんの厳しい一言が入る。

「僕個人の意見だけど、別にお互いにとって悪い話ではないと思うけど……最終的な判断は湊さんに任せるよ」

彼女たちも、Roseliaの主催ライブに十分ふさわしいといえるバンドだ、参加してもらっても何も問題はない。

とはいえ、決めるのは彼女たち自身なので、僕にはそれ以上言うことはできない。

「私たちのライブに半端な熱はいらぬ。その覚悟はあるかしら？」

湊さんのその問いに、三人は顔を見合わせると

『はいー』

大きな声で返事をする。

「なら、決まりね」

その様子を見た湊さんは静かに席を立つと戸山さんたちのもとに歩み寄る。

「Poppin' Party……あなた達に正式に依頼するわ。受けてくれるかしら？」

「はいー」

こうして、急遽ではあるもののPoppin' PartyもRoseliaの主催ライブに参加することとなった。

決まるや否や練習の打ち合わせやら、連絡やらで一気に彼女たちはせわしなく動き出し始めた。

「気合入ってるねー」

「当然よ。彼女たちは、演奏技術はそれほど高くはないけれど……」

そんな三人の様子に感心した様子で声を上げるリサさんに、湊さんはそういうと肝心の部分を言わずに席に着いた。

(言いたいこと、わかるんだけどね)

演奏はそんなにうまいとは言えないが、彼女たちの場合は+αの部分がかかなり大きい。

ここに技術をのせれば、無敵状態になることができる。

それは、僕たちMoonlight Gloryが目指す一つの形

でもある。

「あ、チケットのノルマは……」

「あー、それなら気にしなくてもいいよ」

ふと思いついたように、心配そうな表情で確認するりみさんにリサさんは、安心させるように柔らかい表情を浮かべながら顔の前で手を横に軽く仰ぐようなしぐさをしながら答えた。

「チケットのほうは順調に売れていますので、会場代はこちらで賄えると思います」

「学割、ガールズ割、ギャル割！ アタシのもてるすべての力を駆使したよ」

ポーズをとりながら誇らしげに言うリサさんの姿が、なんだかものすごく輝いて見えた。

確かに、リサさんの交渉術はすごいものだった。

ただ、前二つは分かるけど、あと一つは一体どんな割引なのかが、ものすごく気になるけど。

「リサ姉の交渉術、本当にすごかったよ！」

(とはいえ、その値切りのほうでどうなってくるか)

今の状況を見ると、確実に凶となるのだが……。

「前売りもかなり安くしてるから、友達とか呼ぶなら取り置きとかがおすすめだよ！」

「取り置きー！」

「意味わかってんのか!?!」

もはや戸山さんと市ヶ谷さんのやり取りは見慣れた光景になりつつある。

「ちよつと！ なんでC i R C L Eじゃダメなの!」

そんな時、横から声を上げたのはこのライブハウスの従業員でもある月島さんだった。

「うちだつてつけるよ！ 常連割りとか!」

(その話、何度も聞いてるよ)

主催ライブの話をして場所を決めているときから、月島さんに言われていたが、最終的には

「さ、練習を始めるわよ」

という湊さんの一言で終了となるのがオチだった。

(ライブまで残り一週間。大丈夫か?)

少しだけ不安を抱きながらも、僕は練習を見るべくみんなの後に続いてスタジオに入るのであった。

ライブまで残り二日。

クラスのみんなも、この後に来るであろうゴールデンウィークに浮足立っているようにも思えた。

「このように、この問題の場合は先ほどの公式を利用して——」

そんな中、今行っているのは数学の授業だ。

三年ともなれば、内容はかなり難しいものとなっている。

とはいえ、この授業の先生は授業をちゃんと聞いていれば点数が取れるので、板書はしっかりとっておくことが、好成绩を残すコツというのが啓介の話だ。

ただし、その分先生のチェックは厳しく居眠りを一度でもした生徒には、いかなる事情があろうとも(流石に薬を盛られて眠らされたとかなら違うかもしれないけど)温情なしの地獄が待っている。

簡単に言うと、テストの点が芳しくなく(要するに赤点だけ)居眠りなどをしたことのある生徒への、平常点などでの救済措置は行わないというタイプだ。

テストで赤点をとっても、居眠りの誘惑に負ければそのまま赤点コースに行くが、居眠りをしなければ、赤点の度合いにもよるが救済措置として赤点を免れる可能性がある。

あの啓介が居眠りをしないおかげでテストでは赤点だったが、トータルではぎりぎり赤点を回避したというのは、色々な意味で僕たちの中で伝説となっている。

一応啓介の名誉のために言っておくと、啓介は馬鹿を装っているだ

けで成績は良い。

ただ、おつちよこちよいなところが、問題の解答を書く場所が一個ずれていたらしい。

それに気が付いたのは、終了3分前で修正したがしきれなかったとのこと。

こうして、啓介人生初の赤点という伝説と、赤点回避の伝説が同時に誕生することになったのだ。

さて、僕が何を言いたいのかというと

「すう……すう……」

僕の隣の席の湊さんが思いつきり居眠りをしているということだ。

しかも、彼女だけではなくちよつと前の席のほうを見ると、リサさんも思いつきり居眠りをしていた。

(もう知らない)

起こそうにも、時すでに遅く先生の厳しい視線が二人に向けられていたので、手遅れだろう。

(これは、後で確認したほうがいいかな)

二人がそろって居眠りをするということが何を意味するのか、僕は嫌な予感を感じずにはいられなかった。

第9話 準備とライブ

「完全に意識失ってたわー」

「恥ずかしいところを見せたわね」

休み時間、リサさんを湊さんの席のところと呼ぶと、やってしまったと言わんばかりの表情を浮かべながら言うリサさんに続いて、湊さんはバツが悪そうに言ってくる。

「いや、それはいいんだけど、二人そろって居眠りなんて……何があった？」

「主催ライブの準備にちょっと手間取っちゃってね」

そこで、僕の嫌な予感は的中した。

「湊さん、進捗ノートを見せて」

主催ライブをやることが決まった最初のほうに、やるべきことをまとめた進捗ノートを作っておくことを勧めておき、実際に作ったのを見ているのを知っている僕は、ノートを持っているであろう湊さんにそれを見せるように要求した。

それを見れば僕が感じているこの予感の正体が、はつきりするのだ。

「どうぞ」

湊さんに受け取ったノートを開いて、進捗状況を確認する。

(マジか)

それを見て僕は思わず頭を抱えなくなってしまった。

現在の進捗状況は、僕の予想よりも大幅に遅れている状況であり、ライブの開催自体が不能状態になるギリギリのラインだった。

「皆のためと思って手を出さなかったけど、これはさすがにまずすぎる」

「……やっぱり？」

なんとなくリサさんたちも察していたようで、顔がこわばっている。

「微力ながら、僕も手を貸すけど、いい？」

「ぜひ、お願いするわ」

一応湊さんにも確認をとった僕は、OKをもらったことで主催ライブの準備に加わることとなった。

「———ということで、今から僕も主催ライブの準備を手伝います」「すみません」

放課後、C i R C L E に集まってすぐに、僕は現状がどれほどやばいのかを説明したうえで、フォローに入ることを宣言した。

反応は主に、申し訳なさそうにしている白金さんと紗夜の二人と「やったあー!」一樹さんが手伝ってくれるならもう怖いものなしですわ!!」

と、素直に喜びをあらわにしているあこさんの二通りだった。

「宇田川さん、あまり喜べることではないですよ」

そんなあこさんに紗夜から檄が飛ぶ。

確かに、喜んでいい状況ではない。

「それじゃ、主催ライブの準備とライブの練習を始めよう!」

『おー!』

僕は士気を高めるべく、そう声高く号令をかけた。

「美竹君、それは私のセリフよ」

湊さんからのツッコミを受けながら。

これが、僕の睡眠時間3時間という極限状態の日々の始まりになるとも知らずに。

僕は真っ暗闇の中にいた。

音も何もない真っ暗なその空間は、どこか心地よささえも感じる。

「———い! か———さーい!」

そんな空間を侵略するように、誰かの声が聞こえてくる。

(一体、誰?)

僕は、その侵略者の正体を明かすべくあたりを確認する。

とはいえ、周囲は暗闇になのだから、見えるはずもないのだが、それすらも侵略者の狙いだったのかもしれない。

最初は声だけだったそれが、ついに空間自体にまで広がっていく。

白い光が暗闇に差し込みだしたのだ。

そして、その白い光は徐々に僕の意識を引っ張っていく。

「あ、一樹先輩起きたよー!」

「へ?」

引っ張られた先で見た光景は、誰かと話している戸山さんの姿だった。

(何で、家に戸山さんが?)

寝起きでぼんやりとした中で、僕の疑問は尽きない。

だが、徐々に意識がはつきりとしてくると、自分の置かれた状況が分かってきた。

(ここって……控室か)

最初は家だと思っていた場所が、今日Roseliaの主催ライブ会場となる『dub』の彼女たちの控室だったことに気づいた。

それに連なるようにして、色々なことを思い出していく。

ライブ当日を迎えたこの日、まだ終わっていないなかったライブの準備を済ませるべく、早めにdubを訪れて準備をしていたのだが、どうやらいつの間にか眠ってしまったようだ。

(しかもみんな寝てるし)

辺りを見回すと、同じく眠ってしまったのであろう湊さんたちの姿が確認できた。

(とりあえず立つか)

このままだとまた寝てしまいかねないので、僕は席を立って眠気を振り払うことにしながら、挨拶に来ていたのであろう戸山さんたちが湊さんたちを起こす光景をぼんやりと見ているのであった。

……眠い。

あれから、みんなが起きだした頃には僕のほうもようやく寝ぼけた状態から脱することができた。

「やばい、完全に意識失ってたわ」

「……恥ずかしいところを見せたわね」

この間教室で聞いたのと全く同じ言葉を、聞くことになってしまった。

「もしかして、今日も寝てないんですか？」

心配そうな山吹さんの言葉から察すると、どうやら僕たちと同様のやり取りが花女のほうでもあったらしい。

「主催ライブだと、色々と準備のほうに時間がとられてしまって」

「当日のライブのセッティングも、こちらですするという約束で会場費を抑えていたので、しょうがないのですが……」

今になってリサさんの交渉の弊害が出てきてしまったわけだが、それを言ったところで何も変わらないし、言う時間があるなら一つでも進めておこうということにしていたが、こればかりは反省会で上げることにはしよう。

僕は、心の中でそう結論付けた。

「でも、どうして一樹先輩も？」

「……フオローするつもりはなかったんだけど、進捗状況があまりにも悪かったから、僕のほうで手伝うことにしたんだよ」

願わくば、もっと早くに気が付いておくべきだった。

ちなみに、授業中に寝るといふ失態はしていない。

……休み時間で寝たけど。

「あ、あはは……」

りみさんが苦笑する中、リサさんの携帯の着信音が鳴った為、リサさんが電話に出た。

「はい……今日はお世話になります」

どうやら、相手は今日このライブにゲスト出演するバンドだったらしく、電話対応のため控室を後にしていった。

「ゲストの方が揃い次第、リハを始めます。リハの順番については、美

竹君から伺ってください。宇田川さん、ケータリングの買い忘れはありませんか？」

「はい、ばっちりです！」

紗夜はスタツフへ今の内容を伝えるために、控室を後にしていく。色々あつたが、準備のほうは何とかなりそうだ。

ちなみに、紗夜の僕への呼び方は、真剣モードという解釈が適当かもしれない。

……ただ単純に恥ずかしいだけかもしれないけど。

「あの！ 私たちも何か手伝えることはありませんか？」

慌ただしく動く紗夜たちの姿を見た戸山さんが、準備の手伝いをすると申し出てくれた。

「これは、私たちがすること。あなた達はライブのことだけに集中して」

「それに、ここまですれば彼女たちだけでも十分間に合うと思うから。気持ちだけ、受け取っておくよ」

睡眠時間3時間生活の甲斐もあり、何とか彼女たちだけで準備が間に合うところまで持つていくことができた。

もうこれで大丈夫だ。

そのことを僕は戸山さんたちに伝えたのだ。

「はい！」

そして、戸山さんは元気よく返事をするのであった。

第10話 覚悟

ゲストバンドもそろったことで、ついに準備は最終段階に突入した。

現在行っているのは本番に向けたリハーサルだ。

今リハを行っているのは、Poppin, Partyだ。

僕はそれを、二階席のほうで湊さんと共に見守っていた。

(正直、ここまでくればもう僕ができることはないし。このままここにいる感じかな)

この席はステージや会場を見渡せる絶好のスポットなのだ。

『ありがとうございます!』

『次、Roseliaさんお願いします』

Poppin, Partyのリハも終わり、次はステージの最終確認が始まった。

「友希那先輩! 一樹さん!」

紗夜たちがステージに立ったタイミングで、戸山さん達Poppin, Partyのメンバーが僕たちのところにやってきた。

「リハ、もう始まってますけど」

「リハならもう済ませているわ。今はステージの最終確認よ」

リハに遅れていると思ったのか、心配そうに聞く戸山さんに湊さんは簡潔に告げた。

「最終?」

「見る場所によって、機材などでステージが見えないという事態を避けるためのやつだよ」

「照明、もう少し暗くできますか?」

僕の説明の最中も、湊さんは調整を続けていた。

湊さんの言葉を受けて、照明が暗くなる。

「リサ、それで手元は見える?」

湊さんの問いに、リサさんはベースを軽く弾いて指で丸印のサインを出す。

「ギリギリまで調整するんですね」

「当然よ、Roseliaの音楽を最高の形で届けて見せるわ」

「そういった諸々の内容ができるかどうか、合否に大きく左右するんだよね」

湊さんの一斉の妥協もしないその姿勢は、十分に合格点だ。

「えっと、一樹先輩それはどういう……」

「ああ、今回の主催ライブの開催ということで、軽く彼女たちのテストをしてるんだよ。Roseliaの目指すものを考えるのであれば、このくらいはできてほしいからね」

「お、鬼だ」

そんな僕の答えに、山吹さんは苦笑し、市ヶ谷さんは完全に引いていた。

(そういう風に言われるのは、心外なんだけどね)

「そろそろ開場時間よ」

そんな僕の心の声も、湊さんの一言で完全にかき消される。

ついに、主催ライブが幕を開けるのであった。

二つのゲストバンドの演奏も、特に滞りもなく終わり、Poppin, Partyの出番となった。

最初はどこか緊張していたような感じの彼女たちだったが、演奏を始めてからはいつも通りの感じに戻っていた。

彼女たちの楽し気な演奏は、会場内を包み込み、そして会場を温めていく。

『ありがとうございました！ Poppin, Partyでした！』
最後の曲目の演奏も終わり、会場中からは大きな歓声が沸き起る。

(流石はPoppin, Party。良い演奏だ)

そして、次はいよいよRoseliaの番だ。

そうなった瞬間、会場に大きな変化が起こる。

なんと、大勢の観客たちが会場に流れ込んできたのだ。

「……」

それは間違いなく、Roselia目当ての人たちだった。
そんな中、彼女たちがステージに立った。

『早速だけど、メンバー紹介、行くわよ。ギター、氷川紗夜！』
湊さんに名前を言われた紗夜は、軽くギターを弾いて一礼する。

その後もあこさんやリサさんという順番でメンバー紹介は進んでいき、最後に湊さんの紹介をリサさんがする形でメンバー紹介は終わった。

「いくわ、『BLACK SHOUT』」

そして、そのままの流れで彼女たちのライブが始まった。

その演奏はどのバンドにも引けを取らない……それこそ、絶対的な王者と言っても過言ではないほどの完成度だった。

会場にいた観客たちは、その演奏に青色のペンライトを振るなどの盛り上がりを見せていた。

紗夜のギターやリサさんのベースなどの音に加えて湊さんの歌声が会場で彼女たちの色に染め上げ、圧倒的な世界観を作り上げているのだ。

(最後の最後で巻き返すとは……そうでないよね)

彼女たちは非公式ではあるけど、僕たちの姉妹バンドだ。

なので当然と言ってしまうほどだが、それでもRoseliaの演奏はまさに圧倒的の一言に尽きるものだった。

観客の反応も非常によく、ライブ自体は文句なしの合格と言ってもいいものだった。

こうして、Roseliaの初めての主催ライブは盛況のうちに幕を閉じるのであった。

(リザルトでは、滑り込みの合格かな)

準備のほうでいろいろと課題は多かったのですが、文句なしの合格とは言えないが、それでも合格は合格だ。

(これはフィードバックのやりがいがありそうだ)

ステージ袖のほうに移動してそんなことを考えていると、ゲストバ

ンドたちへのお礼を兼ねた見送りをしていた湊さんたちが戻ってくる。

「あ、挨拶終わったんだ」

「ええ。今からPoppin Partyのところに行くけど、美竹君もどうかしら？」

「うーん……ライブ後の余韻に水を差しそうだから会うのは遠慮するよ。ただ、彼女たちの得たことには興味があるからついてはいくけど」

せつかくのライブ後の余韻を無駄にしそうだったので、僕は合うことはやめておくことにしたが、それでもこのライブで彼女たちが得たことが気になった僕はかげで聞くことにした。

「そう。じゃあ行くわよ」

それに対して湊さんが特に何も言わずに、すたすたと歩きだすので、僕もそれに続く。

「一樹さん、一樹さん。あこたちどうでしたか？」

「全員、文句なしの合格だよ」

「やったーっ」

その道中、今日の感想を聞かれた僕の答えに、あこさんは嬉しそうなりアクションをする。

「まあ、それについては後日フィードバックで話すとしよう。もう着いたみたいだし」

彼女たちがいる控室前についたのか湊さんが立ち止まったので、僕はドアの横の壁によりかかる。

「今日は助かったわ。ありがとう」

「私たちのライブは参考になりましたか？」

とりあえず中に入っていった湊さんたちの声は聞こえるので十分だ。

「はい！ 同じ風に行けるのか、ちょっと自信ないですけど」

(同じ?)

戸山さんの言葉に、僕は引つ掛かりを覚える。

戸山さんの言うことを推測すると、Roseliaのようなライブ

を主催ライブでやるという風にもとらえられる。

(いや、無理でしょ)

僕は、それを一刀両断で切り捨てた。

彼女たちが Roselia のようなライブをやることは 99% の確率で無理だ。

そもそも、ポテンシャル自体が Roselia とはきなきが出ている現状で、同じライブをするというのは現実的でもないし、土台無理なことだ。

(僕があなたたちに期待しているのは、そういうことじゃないんだけどね)

Poppin' Party が最強になるのは不可能。

どちらかというと、彼女たちが行きつくのは別にある。

(そのことに気が付かない限りは、ここどまり……)

やはり、直接会わなくて正解だった。

会っていれば今のことをオブラートに包まないで直球で言っていただろう。

これ以上聞いていたら、直接言いたくなりそうなので、僕は静かにその場を離れることにした。

だが、この時の僕はこのライブによって、僕たちにとっての“魔の手”が迫っているということに、気づいていなかった。

そして、その存在が僕たちに波紋を広げるような事件を引き起こすことになるということ、この時の僕はまだ知る由もなかった。

第2章、完

第3章 『予兆』

第11話 相談

Roselliaの主催ライブもなんとか終わり、いつもの日常が戻りつつあった。

朝の教室は、このゴールデンウィークという連休が終わったことを受け入れられなかったり、惜しんでいる声が多いようにも見える。

「やつほー、休みの間どう過ごしたのかな？ できれば甘々な話を聞かせてほしいな〜」

「朝っぱらからいきなりだね。それを言っていて恥ずかしくない人だったら、ある意味最強ですねりサさん」

そんな中、会つてすぐに小悪魔のような笑みを浮かべながら下世話なことを聞いてくるりサさんに、僕はそう切り捨てた。

「うゝっ！ か、一樹君今日は辛らつだ」

「りサ、今のはあなたが悪いわ」

「うう、友希那まで〜」

そしてさらに湊さんにまで言われたりサさんは地団太を踏んでいった。

「僕の休みつて、ずっと寝てた位だよ」

「むう……こうなったらヒナに後で聞こう」

(最悪だ)

どこか不満そうに頬を膨らませたりサさんの言葉に、僕は内心で頭を抱える。

日菜さんのことだから、おそらくはこの間の路上での出来事を言うのは明らかだ。

とはいえ、ここで止めたらすすがに何かがありましたと言っているようなものなので、僕は何も言わずにからかわれることの覚悟を決めた。

「ところで美竹君、相談に乗ってほしいことがあるのだけど、いいかしら？」

「……その顔だと、あまりいい相談ではなさそうだね」

湊さんの表情と、言い方のニュアンスからして、あまり内容ではないことを察した僕は自然と真剣な面持ちで彼女に聞くと、無言で頷いて答えた。

(とはいえ、時間がないか)

あと数分もすれば、HRが始まるような状態だ。

このような状況で聞くような内容ではないことはどう見ても明らかだった。

「続きは昼休みにでも?」

「ええ、構わないわ」

とりあえず、湊さんから話を聞くのは昼休みのほうに伸ばしてもらうことにした僕は、相談内容を気にしつつも先生が来るのを席について待つことにするのであった。

B a n G D r e a m ! ~ 隣を歩むもの ~

第3章 『予兆』

昼休み、僕は少しかだけ焦りを感じていた。

(まずい、全然授業の内容が頭に入っていない)

湊さんの相談内容が気になってしまい、どうしても授業に集中できなかつたのだ。

一応板書はしっかりとってはいるが、このままだといろいろとまずいのは明白。

(家に帰って復習を念入りしておかないと)

こうして、本日の僕の復習が本格的なものになることが、確定となった。

こうなるのであれば、先に聞いておくべきだったと悔やんでも遅い。

「湊さん、例の話は外で聞かせてくれる?」

「ええ」

とりあえず、今は湊さんの相談だ。

僕は湊さんを連れて廊下に出る。

人気のない場所であるのが無難だろうけど、変に詮索する人が出かねないので、苦肉の策でもあった。

「それで、相談っていったい何？」

「この間の主催ライブの後に、声をかけてきた人がいるのよ」

そう言っただけに一枚の紙を渡してくる。

黒い猫のような型の紙は、おそらくは声をかけてきた相手の名刺だろう。

(えつと……ちゅ……この“2”って二乗の奴?)

おそらくは芸名のようなものと思われる、“CHU”という名前の上側についている数字の2を、“二乗”とストレートに言うべきなのか、リピートの的なものなのか。

どちらの読み方が正しいのかがわからなかったのだ。

「背の低い子で、本人は“チュチュ”と名乗ってたわ」

(あ、リピートのほうか)

とりあえず、相手の名前は分かった。

そのうえで、もう一度名刺のほうに視線を落とす。

名前の下に書かれているのは、英語ではあるが住所だろう。

(帰国子女か何か?)

洒落て英語で書いているのでなければ、おそらくは帰国子女か留学で日本に来た感じだろう。

「それで、そのチュチュという人はなんて？」

話しかけてきた内容があまりいいものではないことくらいは、察しがついている。

ライブについての批評であればまだいいほうだ。

彼女たちへの誹謗中傷、もしくは脅迫めいた何かか。

考えれば考えるほど悪い方向に向かってしまう。

「私たちのプロデュースをするって言ってきたわ」

「プロデュース？」

湊さんの口から出たその言葉に、僕はオウム返しに口を開いた。

チュチュという人物の話の内容が、僕が考えていたこととは全く違うものだったからだ。

(最悪の事態ではないにしても)

とりあえず、そのことについては一安心といったところだろう。

だが、続いて問題となってくるのが話の内容だ。

「名声を上げている人なのであれば、自信過剰の馬鹿。そうでないのだとするとRoseliaのネームバリューを狙ってか……いずれにしても無理な話だね、それ」

どこにでもいるようなバンドのプロデュースならいざ知らず、彼女たちのプロデュースをしようとするその思い切りと勇気は評価はできるが、正気なのかと聞きたくなる。

彼女たちが奏でる独特の世界観を醸し出すその曲は、彼女たち自身が考えたからこそ成り立つものであり、一つでもピースがそろわなければその世界観は出来上がらない。

「Roseliaの曲はRoseliaで作るからこそ意味がある。第三者が作り出した曲はたとえどんなに素晴らしい物でも、それはRoseliaの曲じゃない」

「……そう真正面から言われると、少し照れるわね。でも、ありがとう」

一度彼女たちが演奏するための曲を作ったことがある。

だが、どんなに工夫しても、Moonlight Gloryで演奏するのにはふさわしいが、Roseliaが演奏するとなると、あまりしつくりとこなかった。

そういった僕の実体験から出た言葉だったが、少しだけ直球過ぎたようで、恥ずかしげに頬を赤く染めながらも、湊さんは微笑みながらお礼を口にする。

「もちろん、断ったんだよね？」

「ええ。だけど、昨日もまたスカウトに来たわ」

(す、凄まじい執念と言うべきか、ただしつこいというべきか)

とはいえ、この短期間に何度もスカウトに来るというのは考え物だ。

「とりあえず、こじれるようなら僕が出るから、その時は言ってくれる？」

「巻き込んでしまつて、ごめんなさい」

「気にしないで。演奏はしないけど、僕だつてRoseliaの一員……そういう意識をもつて練習を見ているから。逆に光栄なくらいだよ」

何も演奏しないからメンバーではないとは言ひ切れない。

練習を見ている自分だつて、十分にRoseliaの一員だ。

そのくらいの思いがなければ、教えられないし教えてはいけないと僕は思っている。

「ふふ、それじゃその時はよろしく頼むわね」

こうして、湊さんの相談事はひとまず今後の方針を立てることと区切りはついた。

(しかし、謎のチュチュという人物……いったい何者だ?)

僕はどこか、このチュチュという人物に底知れぬ不安を抱くのであった。

第12話 生徒会

湊さんの相談も終わり、昼食をとろうとしたとき携帯が震えて着信を告げる。

(今度は何だ?)

今日はいろいろと飛び込んでくるなと思いつながら発信者を見ると、相手は中井さんだった。

「もしもし」

『あ、昼休みにごめんね。いま大丈夫?』

電話先の、少しだけ優しい声色の人物が、電話をかけてきた中井さんだ。

名前を中井裕美といい、Moonlight Gloryではベースを担当している。

いつもは、やや内気な感じなのだが、変なスイッチが入るとハイテンションでベースを弾きだすという“暴走モード”に入ってしまう人物だ。

「何かあった?」

『うん。ポピパの戸山さんたちが、なんだか元気がないんだけど……』

中井さんの話で全て察した。

(そういえば、この前湊さんにきつい一撃を食らってたっけ)

それは、主催ライブ後の控室で、戸山さんたちに湊さんが放った『覚悟がない』という一言のことだ。

あまり多くは語らないのは、湊さんの魅力でもあり欠点でもあるわけだが、聞いた限りだと湊さんの言葉の真意は分かりかねているようだ。

「とりあえず、そのまま様子見で手は出す必要はないと思うから……今のところは」

このまま戸山さん達が答えを導かないのであれば、僕のほうで動くことになると思う。

その時は、湊さんの数倍はきつい言い方になると思うけど。

『うん、わかった。あと、今週末みんなでそろって練習しない?』

「今週末か……うん、僕のほうは予定とかなないから大丈夫。あとで啓介たちに聞いてみる」

『お願いね』

Moonlight Gloryとしての活動は止まっただけでも、個人で集まって練習をする分には何の問題はない。

それは、事務所側にも確認済み。

時々スケジュールがある日にCIRCLEなどのライブハウスに集まっては練習をしていたりするのだ。

(さてと、あとで三人に確認しておかないとね)

とりあえず、昼食を取りたかったので、メールで手早く済ませるところにした。

「よし。それじゃお昼を食べますか」

こうして僕は、少しだけ遅い昼食をとるのであった。

ちなみに、みんなの返事は『OK』だった。

放課後、僕と日菜さんにつぐやほか三名の生徒会役員が生徒会に集まっていた。

理由はもちろん、今日が生徒会で定期的に開かれる会議……定期総会の日だからだ。

「それでは……羽丘学園生徒会、定期総会を始めます。起立、気を付け、礼！」

「おー、流石つぐちゃん！ 号令にキレがあるね」

「ごほんっ」

確かにつぐの号令はキレがあつて良いが、こういう会議は全校生徒の代表のような存在として、気を引き締めて行う必要がある。

なので、僕は軽く咳ばらいをして生徒会長である日菜さんをけん制した。

「え、えっと来週から、風紀取り締まりの強化週間となります。風紀委員長のか……美竹先輩、お願いします」

来週から一週間、風紀の乱れが出ないようにその取り締まりを強化

することになっている。

今回の総会では、その取り締まりの内容について協議を行い、問題がなければその内容で可決となり、取り締まり強化週間で実行されることになる。

前年の資料を確認したが、例年通りに行っても特に問題はないようなので、内容自体は今までと同様にしている。

「はい。風紀委員長の美竹です。来週の風紀取り締まり強化は、例年通り校門付近での服装チェック、およびすべての学年で抜き打ちでの持ち物検査を行わせていただきます。詳細は副会長が配布いたしました資料をご覧になりながらお聞きください」

そして、僕は取り締まり強化週間についての説明を続けた。

「以上です。何か質問などはありませんか？」

僕のその言葉に、書記を務める女子生徒が手を上げる。

「あの、この“指導者の氏名を明記”という内容ですけど、これって……」

「そのままの通りです。これまでは、引っ掛かった生徒はお咎めもなく解放されています。これでは取り締まりの意味がありません。なので、引っ掛かった生徒の学年や氏名などの記録を行い、教職員の方にご報告します」

どういうわけかは知らないが、取り締まりで検挙された生徒は注意か指導のみで、特にお咎めがないのだ。

最高学年は進路などで比較的大丈夫だが、1年や2年生はこの取り締まりを何とも思っていない傾向が強い。

(だから、反日菜グループみたいのができるんだよ)

天才である日菜さんが気に入くわない生徒たちで形成されたそのグループは、まさに風紀の乱れの象徴たる存在だった。

「でも、それだとかわいそう——」

「かわいそうなのは、真面目にやっているのにそうでない人が何のお咎めも受けないのを見せられることです。実際、昨年風紀委員の存在感皆無……私はこれを是正したい」

僕のその説明に、書記と会計の二人が顔を見合わせる。

その表情は、誰が見ても腑に落ちない様子だった。

だが、実際問題風紀委員の存在感はなく、もはやオブジェクト状態なのだ。

これを早急に改善させる必要があるのだ。

ほとんどと重くなる空気に、副会長のつぐも落ち着かない様子だったのをしり目に、僕は言葉を続ける。

「二つだけ勘違いしないいただきたいのが、これは風紀を乱した生徒を取り締まるためではなく、まじめに学園生活を送っている生徒たちを守るための物です。どうぞその旨ご理解いただきたい」

僕のその言葉に、他の二人は何も言うことはなかった。

「生徒会長、決議を」

「はい。それじゃー、一君——「風紀委員長」——……風紀委員長の今回の提案に反対の人」

いつものように名前と呼ぶ日菜さんに、僕は役職名で呼ぶように彼女の言葉を遮って言うと、不服そうではあるが言い直した。

それはともかくとして、日菜さんの呼びかけに、手を上げる者はなく満場一致で可決となった。

「ふう……」

「一樹先輩、お疲れさまでした。粗茶ですが」
「ありがとう」

定期総会を終えて、背もたれに寄りかかりながら脱力している僕に、ねぎらいの声をかけながらつぐがお茶を持ってきてくれたので、お礼を言いつつそれを口にした。

「初めてだから、色々緊張したよ」

「でも、とても凛々しかったです」

「うんうん、一君カッコよくてもうるうるんっ♪ ってしちゃった」

生徒会の会議なんぞ、これまで出たことがなかったの、どう立ち回ればいいのか全部分からない中での初陣だったが、これはこれによかったのかもしれない。

「なんだか一君、おねーちゃんみたいだった」

「あ、そう言われれば少し紗夜さんに似ていましたね」

「……やっぱり、ばれたか」

日菜さんにはばれるだろうなとは思っていたが、つぐにまで見破られたのは少しショックだった。

……悪い意味ではないけど。

「風紀委員といえば、紗夜ぐらいしか思い当たらなかったから、彼女の雰囲気を見て見たんだけど……駄目だった？」

氷川紗夜のふるまい通りを試してみたのだが、あまりにも不評であれば改める必要がある。

「いえいえものすごく様になってました！」

「うん！ さすが、おにーちゃんだね♪」

そんな僕の不安も、二人の感想が吹き飛ばしてくれた。

「二人とも、ありがとう。あと、おにーちゃん言うな」

「ぶーぶー、つぐちゃんだって知ってるんだからいーじゃん」

「あ、あはは」

頬を膨らませて抗議してくるが、知っているというよりバレたというほうが適当だ。

名前を呼ばれたつぐは、ただただ苦笑するだけだった。

こうして、今日の生徒会活動は無事に終えることができるのであった。

ちなみにこれは余談だが、日菜さんから生徒会でのことを聞いたのか、

「私を目標にするのはうれしいけど、行動を真似するのはやめて」

という紗夜からの抗議によって、紗夜のふるまいをまねることは禁止となるのであった。

第13話 フィードバック

「じゃ、あたし帰るねっ」

「はい、お疲れさまでした。日菜先輩」

日菜さんはこの後、パスパレの仕事があるらしく、足早に生徒会室を後にした。

「それで、一樹先輩は帰らないんですか？」

「あ、うん。資料整理でもしようかなって」

今後またどの資料を使うかわからない以上、資料となりそうなもの（主に議事録など）は整理整頓しておいたほうがいい。

本当は時間に余裕のある日に行うべきだが、生憎とそのような日がないため、少しずつ進めているのだ。

「やっぱり一樹先輩ってすごいです」

「何？ 急に」

突然褒めてきたつぐに、僕は資料整理の手を止めずに反応する。

「あの会議の時、私はどうすればいいかわからずにあたふたしてるだけだったのに、一樹先輩は落ち着いてまとめたのを見て思ったんです。私は副会長としてまだまだだなんて」

「……」

力なく笑みを浮かべる彼女のその姿は、劣等感のようなものを感じているようにも思えた。

「どうして副会長だからって、その場をまとめられなければいけないって思うの？」

「え？ それは、副会長だから……」

僕の疑問に答えるつぐの言葉は、どんどんと尻すぼみになっていく。

「人には、向き不向きもある。僕はあの場をまとめるのに向いていて、つぐには向いていなかった。ただ、それだけのことだよ。それにもしかしたら、つぐには向いていて僕には向いていないことだってあるはず。だから、僕は自分にできる範囲でやっているだけ。役職なんて、それほど関係ないんだよ。僕にとってはね」

僕はたまたま風紀委員長になったが、そうなったからまとめられたのか、まとめられる適性があるから風紀委員になれたのかは誰だつてわからないはずだ。

なので、この役職だからこうでなければいけないというのは、ナンセンスだと思うというのが僕の持論だったりする。

「それに、蛇足だけどつぐは十分副会長としてふさわしいと思うよ」「本当ですか?」

「うん。そのうちわかると思うよ」

まだあまりぱつとしていない様子のつぐだが、きつと彼女がそのことに気づけるときは来るはずだ。

それがいつかは分らないけど。

(僕も頑張らないと)

風紀委員長になった理由は、紗夜に話したのもあるがもう一つの理由がある。

今後、日菜さんのような天才クラスの生徒がここに現れるかもしれない。

そうなった時、また反日菜グループのようなものができるかもしれない。

日菜さんの場合は、できたとしても彼女の友人もいるし、僕がそばで守ることだってできる。

でも、その人はどうだろうか?

そのようなことが起こらないように、風紀委員の活動を活性化させて、それを後輩に受け継いでもらう必要があるのだ。

なので、僕の最終目標は、それを実現することでもある。

僕はもう一度それを思い出しながら、資料整理を続けるのであった。

「ちよつと遅くなっちゃったかな」

あの後、終わるまで付き合おうと言ってくれたつぐに、やんわりと帰るように促して資料整理を続けていたのだが、どうやらものすごく熱

中してしまっていたようで、かなりの時間が経っており、当初予定していた時間より少し遅れてしまった。

それでも、あらかたの整理は終わったので、僕的には大満足だけど。「あれ?」

廊下の窓に目をやると、木のそばにしゃがみ込む湊さんの姿が見えた。

(湊さんもまだ帰ってなかったんだ)

ちようどいいので彼女と一緒にCIRCLEに向かおうと、昇降口に向かうと上履きから靴に履き替えて、先ほど湊さんがいたであろう中庭に足を進める。

(ん?)

中庭に移動した僕が見たのは、いつの間にか来ていたりサさんともう一人の見知らぬ女子生徒の姿があった。

青っぽい髪をシュシュのようなもので束ねている眼鏡をした彼女は、ここでは見たことがないので、おそらくは新入生だと思われる。

その女子生徒は、まるで二人から逃げるように“タタタ”と校舎の中に入っていく。

「二人して、こんなところで何してるの?」

「あ、一樹君じゃん。生徒会?」

「まあ、そんなところ」

どっちかという生徒会活動が終わった後に資料整理をしていたのだが、そこまで言う必要もないので、言葉を濁した。

「ほら、昨日ポピパにちよつときつく言ったでしょ? 友希那が少し気にしてたんだよ」

「別に、私は……」

ある意味湊さんらしいとも言える内容だった。

「まあ、今は無理でもそのうち分かるはずだと思うけど。湊さんが言いたかったこと」

これで分からなければもれなく僕が出ていくことになるけど。

尤も、その時には湊さんよりも大きなダメージになることは間違いないだろう。

「……それ、さつきりサに言われたわ」

「あはは、アタシ達気が合うね☆」

どうやらりサさんと同じ内容を僕は言ったらしく、ウインクしてくる彼女に、僕はどういうリアクションを取っていいものか悩んだ。

「そういえば」

そんな時、ふと先ほどの光景を思い出した僕は、二人に聞いてみることにした。

「さつき二人が話していた女子生徒って知り合い？」

「知り合い……というより」

「g a l a x yでバイトをしてた子だよ。この間の主催ライブにも来てたんだって」

どうやら、ライブハウスの方で知り合いになった人のようだ。

「何々？ 早速浮気？」

「……美竹君そうなの？」

湊さんの視線が凄まじいくらいに鋭くなる。

「否！ 断じて否！ 違うから！ ただ、ちよつとどこかで会ったよ
うな気がするだけ」

「あはは、そんなに必死になって否定しなくても、冗談だから大丈夫だよ。ごめんね☆」

「冗談にしても性質が悪すぎるって」

舌をちよこんと出して謝るりサさんに、僕はやや脱力感を感じながらいいかえs

これがもし紗夜の耳にでも入れれば最悪、命が危なくなる。

りサさんは笑ってはいるが、こちらは全然笑えない。

「それより、どこで会ったの？ やっぱりライブハウスとか？」

「いや、そもそもg a l a x yなんて今まで一度も行ったことないし
色々と頭をひねって考えてみる。

啓介たちの友人という可能性もないし、ファンとして会ったわけではない。

ただ、僕の勘が音楽関係で知り合っていると告げているのだ。

「美竹君、そろそろいいかしら？ この後練習よ」

「あ、うん。ごめん」

あとちよつとで出てくる答えだったが、湊さんの言葉に中断せざるを得なかった。

(まあ、そのうち思い出すか)

おそらくこれ以上考えても出てくる可能性は低いのだから、一度考えることを止めるのも重要なことかもしれない。

そういう結論に達した僕は、湊さんたちと一緒にC i R C L Eへと向かうことにした。

「美竹君、今日の練習だけど時間配分をこういう感じに組んでみたのだけど、どうかしら?」

「ちよつと、拝見」

その道中、湊さんから手帳を借りた僕は、この日の練習の配分に目を通す。

最初の小一時間ほどで通常通りの練習。

その後、いつもより大幅に短めの休憩の後に、C i R C L Eのロビーを借りてフィードバックを行う。

そしてその後の練習では改善のための弱点克服をメインとした練習を行う。

それが、湊さんの手帳に書かれていた。

「うん、いいと思うよ。最初は通しで練習をして、後半で弱点をなくしていく感じにするほうが効率的だし」

文句のつけようもない完璧な配分に、太鼓判を押しつつ湊さんに手帳を返した。

「そう。それじゃ、今日はこの通り練習をするわ」

「ロビーを借りるって書いてあるけど、許可とかは取った?」

「もちろん☆ まりなさんがぜひって」

一つだけの懸念事項でもあるC i R C L Eのロビーの使用だが、許可は取ってあるようなのでこれも一安心だろう。

こうして、僕たちはみんなが待っているであろうC i R C L Eに向かっていくのであった。

第14話 不穏な影

「それじゃ、フィードバックを始めるよ」

CIRCLEのロビーを借りて、僕たちはフィードバックを始める。

「今回の主催ライブ、トータルで見ればギリギリ合格。ライブに関して言えば、文句なしの合格だから、問題なのは準備のほうかな」

まず最初に、僕の総評をみんなに告げる。

ライブだけを見れば、いつものように文句なしだったが、今回は主催ライブ。

彼女たちで準備を行いライブを開くという意味においては、準備のほうも十分に考慮しなければいけないのだ。

「た、確かに……当日に、寝てしまいました……から」

「アタシも、授業中に寝ちゃったしね」

「今井さん、授業中に寝るのは感心しませんよ」

「す、すみません」

授業中に寝ていたことを口にしたリサさんに、紗夜から厳しい声がかけられる。

「さて、どうしてそうなったのか。まずはそれを話し合おうか」

「あこ、途中で自分がどこまでやってたかわからなくなって、りんりんに確認してもらってました」

「私は、もう少しやるべきことのリストの項目を細分化しておくべきだったと思います。あの内容でも問題はないのですが、もう少し細分化したほうが自分のやったところがより具体的にわかると思っていますので」

「アタシは、会場費を抑える条件に、もう少し考えを巡らせおおくべきだったと思うかな。当日のセッティングとかでも大変だったし」

みんなから次々に出てくる反省点は、流石としか言えないほどの得ているものだった。

「それじゃ、みんなのフィードバックをまとめると、こうなるよね」

あらかた意見が出たところで、僕はみんなが出した意見をまとめて

書きだす。

「まずは、自分がどこまでやったのか、そのチェックリストをしつかりと作っておくべきだったかな。あれは、どこまで進んだかというのと、次にするべき内容とかも明らかにしてくるからね。後は優先度をつけてもよかったかも」

「優先度？」

「例えば、ライブの衣装作りのような、時間のかかりそうなものを早めに始めておいて、すぐに終わりそうな内容の優先度は低めにしておくとか。そうしておけば準備はもう少しスマートになつていたと思うよ」

オウム返しに口にするあこさんに、僕はできるだけわかりやすく説明をした。

とはいえ、主催ライブをやったことなどないので、完全に自分で調べたうえでの意見だけど。

「主催ライブの準備はライブとは違うのだから、効率を重視してもいいんだと思うよ。もちろん、当日のセッティングは念入りに、妥協せず」

せっかく準備が良くても、当日のステージのチェックでミスをすればすべてが台無しになる。

そういう意味では、湊さんのチェックは非常に素晴らしかったともいえる。

「みんなが、行こうとしているステージで、最高の演奏ができるように、一歩ずつレベルを上げていこう。そのためには遠回りだと思うことでもやっておくことこそが、重要だよ。この主催ライブは一つの通過点であり、ゴールでもないんだから」

「……………美竹君らしい、意見ね。考えておくわ」

結局のところ僕が言いたい内容は、地道にコツコツと経験値をためていくことが、重要なのだということだった。

そういった意味では、この主催ライブで得たものはかなり大きかったと思う。

「それじゃ、ライブで気になったところ言っていくから、この後の練習

でそこを改善できるように練習をしようか」

「はい！」

「が、頑張り、ます」

元気のいい返事をするあこさんと、若干言葉を詰まらせながら返事をする白金さんの二人の反応に苦笑しながら、僕は各パートに対して気になったことを指摘していく。

そして、練習を再開した彼女たちは、その個所を改善するべく必死に練習をしていた。

そんな真剣な皆に応えるべく、僕も真面目に練習を見るのであった。

練習を終え、スタジオを後にした時には、外はかなり薄暗くなっていた。

「疲れたー」

「お疲れ、あこ。今日も充実した練習だったね」

疲れた様子で声を上げるあこさんに、リサさんは相槌を打ちながら、次の予約を入れるために受付にいる月島さんのところに向かっていった。

僕たちはそれが終わるのを待つだけだったのだが

「ちよつといいかしら？」

「ん？ どうしたの湊さん」

突然声をかけてきた湊さんに、僕は用件を聞く。

「さっき話した人が、来てるわ」

「ん？」

湊さんの言葉に、一瞬視線を向けた方向を辿ってみるとそこにいたのは一人の少女だった。

背は低く、一見すると小学生と間違われてもおかしくない感じだった。

その少女は、オレンジ色の髪に、頭には猫耳のようなものを付けて

いた。

(あの子が、チュチュ……)

予想していた人物像とはかけ離れたその姿に、僕は呆然としてしまった。

「あれ、友希那さんどこに行くんですか？」

「ちよつと、話してくるわ」

その間に、動き出した湊さんに声をかけたあこさんにそう返すと一人を外に向かい、チュチュと思われる少女と共に、横のほうに移動していった。

「お待たせ……つて友希那は？」

「えつと、外にいた人と話に行きました」

「どういうこと？」

予約を取ったりリサさんの疑問に、あこさんが答えると僕のほうを見てさらに聞いてきた。

「なんだか、プロデュースをするって言ってる人がいて、断っているんだけど、諦めてないみたい」

「そういえば、そんなこと言ってたかも」

やはり、湊さんから聞いているようでリサさんはすぐに察してくれた。

「湊さん一人で、大丈夫かしら？」

「……ちよつと見てくる」

紗夜の言うとおり、僕は底知れぬ不安を感じ、様子を見に行くことにした。

外に出ると、すぐに二人が向かった方角と反対の方向に足を進める。

C i R C L Eはそれぞれの端の細い路地を通ると、裏側に出ることができる。

なので、一度裏側に出て反対側の細い路地を通れば、二人が向かっていった方向にたどり着けるという寸法だ。

このままストレートに向かつて、余計にややこしくなるだけだ。そもそも、湊さんから直接断るようというお願いもされていない

ことを、僕が出しやばって良いものなのかと思った結果、二人のやり取りをこっそり聞くことに留めたのだ。

断られたことで彼女がもし、物理的に湊さんに危害を加えるようなことがあるのであれば、止められるようにするためでもある。

「どうしてダメなの!」

反対側の路地を通っていると、チュチュと名乗った少女のものとと思われる声が聞こえてきた。

僕の予想通り、話がこじれているようだ。

「私のプロデュースを受ければ、最強のバンドになれるのに! Ch
ange the world!」

(やっぱり帰国子女か)

彼女の英語の発音から、僕はそう結論付ける。

「何度来ても、答えは同じよ」

チュチュと名乗った少女に、湊さんは淡々と告げた。

「Roseliaの演奏だから——」

(あまり、聞えない)

距離があるからか、それともチュチュと名乗る少女の声が小さいからか、声が聴きとりづらくなってきた。

(こうなれば、多少リスクはあるけど)

建物の角からこっそり顔を出して、様子をうかがえばもう少し声は聞き取れるようになるはずだ。

ただ、立ち位置によってはどちらかに僕の姿が見られる可能性は高い。

もし、こちらに背を向けているのが湊さんであれば、チュチュと名乗る少女に僕の存在がバレる可能性がある。

とはいえ、このままなわけにもいかないので、僕はできる限りばれないように細心の注意を払って建物の角から顔をのぞかせる。

見えたのは、困り果てた顔をしている湊さんと、こちらに背を向けるチュチュと名乗る少女の背中だった。

(よし! これで何とかなる)

「友希那——!」

「ごめんなさい、すぐ行くわ！」

彼女の背後ということもあり、こちらにとつて有利な条件がそろった状況に心の中でガッツポーズをとるのと同時に、待ちくたびれたのか、それとも心配になったのか湊さんと呼ぶりサさんの声が聞こえてきた。

そして、それに返事をして彼女たちのもとに向かうべく、湊さんが彼女に背を向ける。

「待って！」

それを彼女は湊さんの腕をつかんだことで止める。

「聞けばわかる！」

こちらからは死角になって全く見えないが、彼女の良いようだと何かを……音源かどうかは知らないけど湊さんに渡したのだろう。

「私の最強の曲を奏できれば、Roseliaは最強のバンドになれる！」

(す、すごい自信だ)

湊さんから相談をされたときも思ったが、もはや彼女の中では確定しているの結果なのだろう。

でも、それに湊さんが応じることはない。

現に、困っているような表情を浮かべた湊さんは

「私たちは、私たちの曲で頂点を目指す。プロデューサーは不要よ」

そう冷たく言い放って彼女の前を去っていった。

今度は彼女は湊さんと呼び止めることはなかった。

むしろ、俯いて肩を震わせているだけだった。

(もしかして、泣いてる?)

もしそうだとすればこのまま無言で立ち去るべきか、フォローをするべきか。

そう悩んでいると、すさまじい音と共に端に置かれていたポリバケツが、吹き飛んだ。

それは、先ほどまで泣いていると思っていた彼女の繰り出した蹴りによってもたらされた結果だ。

「信じられない！ 許さない！」

先ほどの泣いているというよりも、むしろこみあげる怒りのようなものだったのかもしれない。

かと思うと、すたすたと歩きだす。

向かうは、先ほど自分が蹴り飛ばしたために、倒れているポリバケツのところ。

何をするのかと思って見ていると、彼女は散乱したごみをポリバケツに戻して元あったように戻した。

(も、戻すんだ)

彼女の行動に、心の中で苦笑しながらツツコミを入れていた時だった。

「あんなバンド、ぶっ潰してやるツ!!」

その言葉が僕に聞こえてきたのは。

第3章、完

第4章 『詳細不明』

第15話 念には念を

(これは、かなりやばいことになってきたな)

すでに人の気配が無くなってもなお、僕は先ほどいた建物の陰に身を潜ませて考えに耽っていた。

『あんなバンド、ぶっ潰してやるツ!!』

それは、Roseliaをプロデュースするとスカウトしに来ていたチユチユと名乗る少女が、それを断られた時に発したものだっただけ。

それまでは、あり深刻にはとらえていなかったが、この一言がそれをすべて一変させた。

(相手は子供、洒落言と捉えるべきか……それとも)

前者であれば、わざわざこちらが相手にする必要もないので、勝手にさせておくだけなのだが、問題なのはもしこれが本気で言っている場合だ。

“潰す”と言つてもやり方はいくらでもある。

例えば、バンドメンバーの何人かの存在を消してしまうとか。

湊さんに関する不信感を、何らかの方法で湊さん以外の人に信じ込ませられれば、Roseliaを簡単に空中分解の危機に陥らせることができる。

現に、彼女への不信感がRoseliaの空中分解の危機に発展した過去がある。

最悪の場合は、命を奪うというのも考えられる。

他にも、Roseliaに対する悪い噂を流して、活動停止を余儀なくさせるというのだった。

(僕が危惧しなければいけないのは……最初の奴だよ)

噂関連はどうとでもなるが、紗夜たちに危害を加えられれば、取り返しのつかないことになる。

(とりあえず、この住所を調べてみるか)

まだ、あの少女がそのようなことをするとは決まっていなかった僕は、

できる限り情報を集めることにした。

それがあの名刺に書かれた住所だ。

(えっと……)

僕は携帯の地図アプリを起動させると、英文字表記の住所を日本語表記に直しながらスマホに打ち込んでいく。

そして、すべての入力を終えてその住所の場所を画面に表示させる。

「……って……超がいくつついてもおかしくないお金持ちが住むようなところじゃん!？」

表示されたのは、明らかにお金持ちが住んでいるであろうタワーマンションだった。

そのマンションの名前は『HEPHAESTUS TOWER』調べてみると、フロント付きでコンシエルジュまでいるという、僕たちには一生縁がないであろう場所だ。

(これって、嫌な予感がするんだけど)

“お金持ち”

その単語で脳裏をよぎったのは阿久津と大蔵の二人だ。

あの二人の一件は、忘れようにも忘れられないほど、受けた被害は甚大だった。

事件中でもだし、今もそれは変わらない。

「そういうえば、あれどうなったんだろ」

ふと、僕は「大蔵」という人間がどうなったのかが気になったので、携帯で調べてみることにした。

彼が死刑判決を受けたのは知っているが、そこから先は知らないのだ。

……いや、知る気もなかったというべきだろうか。

「あ、死んだんだ」

結果はすぐに出た。

『大蔵雄一受刑者、死亡を確認。自殺か』というニュースサイトの見出しが。

一応大手新聞社のサイトなので、ガセネタではないと思うが、念の

ためいくつかの新聞社のサイトで調べてみるが、どこも同じような内容だった。

僕はそれだけを知るとそのサイトを消した。

今重要なのは、彼らではなくチュチュという少女のほうだ。

(これは、子供だからとかで判断するのは危険だ)

僕はそう結論をつけると、携帯のカメラでチュチュの名刺の写真を撮る。

そして、メール画面を開き件名に『調査依頼』と記し、本文に彼女の名前や住んでいる場所や対象者の特徴をできる限り記したうえで、この人物に関する全ての情報を調べるようお願いする旨の文章を入力して、さらに先ほど撮った写真をメールに添付させて送信した。相手はマツさんだ。

探偵事務所を生業としている人物で、その情報収集能力は折り紙付きだ。

先に登場した阿久津たちの一件も、この人たちの尽力によって解決にこぎつけたぐらいだ。

「あ、返信きた」

依頼の連絡をして数分で、メールの返信が来たので確認すると

『了解しやした！ 調査が終わり次第連絡します』

という内容の返信が来ていた。

「これでよし、と」

メールを確認し終えたタイミングで、紗夜から電話がかかってくる。

(あ、そういえば何も言わずに来たっけ)

様子を見るとしたあこさんに行ってないので、もしかしたら心配で連絡してきたのかもしれない。

(とりあえず、先に帰ったって言っところ)

今合流すれば、色々と根掘り葉掘り聞かれるのは目に見えているので、ごまかすことにした僕は電話に出る。

『一樹君、今どこにいるのよっ』

案の定、電話先の紗夜の声は心配そうなものだった。

「あー、ごめん。門限が近かったから先に帰っちゃったんだよ」

僕はできるだけ紗夜に心配させないように、軽く笑い飛ばしながら応える。

『ならいいけど……気を付けて帰るのよ』

「あ、うん」

僕の返事に、紗夜はどこか腑に落ちないような感じで言う“また明日”と告げて、電話を切った。

(もしかして、バレてる?)

なんとなく、紗夜の口調がそんな感じにも思えたのだ。

とはいえ、相手が何かするかもしれないとわかっている以上は、何もしないわけにはいかない。

(もう、あの時の過ちは犯さない)

僕の過ち。

それは、阿久津たちの一件の時に、彼にとって知らればお先真っ暗になるような弱み……いわゆる爆弾を投下しなかったことだ。

あの時、相手が何かをしたらこちらもやってやるというカウンター方式でいた。

何せ、こちらは向こうにとってバラされたくはない爆弾を持っているのだ。

そうすれば下手に行動を起こすことなどできるわけもなく、膠着状態になると考えていたのだ。

だが、僕の考えは甘かった。

阿久津たちは、僕の持つ爆弾を取り戻す……僕の口を封じるべく、過激な行動をとり始めたのだ。

そのせいで、僕はいろいろな人に迷惑をかけただけではなく、大切な人を悲しませてしまった。

最終的には僕は九死に一生を得ることになったのだが、あの時のことを思い出すだけでもぞつとする。

幸いにも、今は何とか収まるところに収まっていつも通りの日々を過ごしているが、一歩間違えればすべてが終わっていたかもしれないのだ。

今の僕があるのはただ単に運がよかつたに過ぎないのだ。

あの時のことを繰り返し返すわけにはいかない。

しかも、今回の狙いはRoseliaであり、紗夜も含まれているのだ。

「Roseliaは、絶対に潰させない。お前の好き勝手には、させない」

僕は独り言のように決意を新たにすると、その場を離れるのであった。

B a n G D r e a m ! ~ 隣を歩む者 ~

第4章 『詳細不明』

第16話 大切だからこそ

マツさんに、チュチュと名乗った少女のことを調べるようお願いした翌日の朝。

「……さすがにまだ来ないか」

僕は自室で携帯の画面を見て、一人で苦笑していた。

もしかしたら、もう結果が出たのでは……等という根拠のない予感の結果だ。

いくらマツさんがすごい人でも、ほんの数時間程度で調べられるわけがないのだ。

(少しだけ、落ち着こう)

色々とナーバスになっている自分を落ち着かせるように、僕は一度深呼吸をすると、朝食を食べるべく自室を後にするのであった。

「紗夜！ おはよう」

「一樹君。おはよう」

いつもの合流場所で、紗夜の姿を見つけた僕は心なしか速足で彼女のもとに駆け寄っていた。

「そんなに急がなくても、別に私はどこにもいかないわよ」

「あはは、紗夜のところに早くいきたかったんだよ」

クスリとほほ笑む紗夜に、僕は笑みを浮かべて思っていることをそのまま答えた。

「も、もう……あまり恥ずかしいことを言わないで」

そんな僕の言葉に照れたのか、帆を赤く染めた彼女はそっぽを向くように顔をそむけると、すたすたと歩きだしてしまった。

「あ、ちよつと」

そんな彼女を追いかけられるように、僕はやや速足で後に続いた。

「ねえ、一樹君」

「何？」

少し歩いたところで、ややトーンを低くして声をかけてきた紗夜

に、僕は静かに先を促す。

「あなた、何か危険なことしようとしてない？」

「……」

紗夜の核心をついたその問いに、僕は息をのんだ。

何とか顔に出すのは防いだけど、もしかしたら紗夜にはお見通しかもしれない。

「別に、一樹君が何をしようとしているのかを、無理に聞き出すつもりはないわ。ただ、あの時みたいなのは、もうしないで」

「紗夜……」

“あの時”がどのことを差しているのかは自分でもわかっている。その時のことを思い出したからか、紗夜の声色は悲しげなものだった。

あの時のことは、紗夜のところに消えない傷跡を残していた。それを僕はあらためて思い知らされた。

S

「僕は紗夜のこと好きだから。だからこそ、だよ」

「一樹君……ほんと、あなたって頑固ね」

「それはお互い様だよ」

僕が頑固であるというのはいにしめて、紗夜も十分頑固なところはある。

そんなやり取りがおかしくて、僕たちはついつい笑いあってしまった。

これもまた、幸せなひと時というものなのかもしれない。

そんなことを実感する朝の一幕だった。

突然だが、僕のある種の悩みの種を聞いてほしい。

「……リア充の一樹！ お前は包囲されている！」

今の何年前の刑事ドラマだよと言いたくなるような声こそが、僕の悩みの種だ。

ここは羽丘の屋上だ。

ここにいる理由は、単純に外の空気を吸いたくなつたからなのだが、そんなところにやってきたのが

「我々は、リア充のごとくイチャイチャして周囲に嫉妬の炎をまき散らせるものに正義の鉄槌を下すもの。その名も」

『妨害レンジャー！』

総勢8人の男子で構成された、妨害レンジャーだ。

「……まだ活動してたんだ。嫉妬レンジャー」

この間は数十名いたはずなのだが、そのうちのほとんどが彼女と付き合うことになつたことでメンバーが減つていったので、もう存在しないものだと思つていたのだが。

「妨害レンジャーだ！ 大魔王一樹！ ハーレム計画は、この俺が止めて見せるツ!!」

「隊長！ カッコいいっす！」

「隊長輝いてるっす！」

意味不明なことをわめいて、左手の人差し指を天に突き刺すようなポーズを決める嫉妬レンジャー隊長に、歓声を上げる隊員たち。

そのシニールさもさることながら、問題なのはその隊長が僕の幼馴染でもあり、Moonlight Gloryのキーボードを担当している啓介であることだ。

「……もはやばかばかしすぎて、付き合いたくないんだけど、どういう経緯でそんなことになつてるわけ？」

今にも頭痛がしてきそうなのを必死にこらえて、僕は啓介に問いかける。

「よくぞ聞いてくれた！ 説明しよう！ 御堂君！」

「サー、イエッサー！」

御堂と呼ばれた生徒が、威勢よく声を上げながら一歩前が出る。

「美竹一樹！ 貴様は、生徒会風紀委員長という身分を悪用し！ 生徒会副会長の羽沢つく様だけではなく、会長の氷川日菜ちゃんを手籠めにしようとしている疑惑がある！ そして、一番の大罪は会長の姉である氷川紗夜と交際しているということだああ!!」

「以上から、我が妨害レンジャーは大魔王一樹に決闘を申し込むっ!!!」

御堂という生徒の言葉を引き継ぐようにして、啓介が宣言してきた。

「……」

予想以上のひどさに、僕は絶句していた。

いや、それ以上にどうしろというのだろうか？

「俺たちの総力を挙げていくぞ！　くらえ、ウォータボム!!」

啓介率いる8人の男子生徒たちは両手に水風船を持つと、それ僕に向かって投げてきた。

それを僕は

「……」

無言で全弾受けとめた。

当然水風船は割れて中に入っていた液体が、僕の体にまき散らされる。

(つて、これお酢じゃん!?)

鼻につくこの匂いは、間違いなくお酢だった。

(あの野郎、水じゃなくてお酢を入れてきやがったな)

さすがに、これはやりすぎだ。

「あれ？」

啓介としては、軽いいたずらのつもりだったのだろう。

彼のいたずら好きは、僕も理解している。

啓介の中では、僕はあの水風船を避けるものだと思っていたはずだ。

つまり、彼にとってこの状況は非常事態なのだ。

「あ、あの一樹さん？」

恐る恐る声をかけてくる啓介には悪いが、僕は処刑を始めることにした。

「三つだけ言わせてくれますか？」

「は、はひいっ！」

僕の声色に、啓介達は背筋をただした。

「まず一つ。水風船にお酢を入れたのはどういう理由？」

「そ、それは……お酢の力で悪しきものを洗い流せると思ったからで

す！」

この水風船を考案したのか啓介が背筋をただしたまま答える。

「二つ目。お前らがどう思おうと自由だが、人の彼女を彼氏の前で呼び捨てとは……いい度胸してんじゃねえか」

「も、申し訳ありませんでした!!!」

僕の自分でも驚くほどドスの効いた声に、その場にいる全員が一斉に土下座をして謝ってきた。

多分、僕が一番怒っているのはそこだと思う。

さすがに他人に自分の彼女を呼び捨てにされて、何にも思わない人はいないはずだ。

……たぶん。

「そして三つ目。今日は何の日か知ってる?」

「今日って……」

僕はその問いに、全員顔を見合わせているが、誰も答えようとしな
い。

「正解は、取り締まり強化週間です」

『ツ!』

そこでようやく彼らはすべて気づいたのかもしれない。

自分たちの運命というものを。

「貴方達8名を、取り締まらせていただきます」

「そ、そそそそれだけはご勘弁を〜」

啓介の命乞いに耳を貸すことなく、僕は職員室に向かうと、生活指導部の先生に事のあらましをすべて説明した。

尤も、説明しなくても僕の体中から発せられるお酢の匂いが、すべてを物語っているけど。

一応、彼らのために『お酢の入った水風船を没収しようとしたら過って被ってしまった』という感じに先生には報告しておいた。

いじめだと思われないうようにするための策だが、それでも彼らが処分を受けることになるのは変わりなく、彼らは処分を受けることになるのであった。

これが後に、妨害レンジャー事件として語り継がれていくことにな

ると同時に、風紀委員の存在感をアピールするのに一役買うことになった。

(まあ、それを狙ってたんだけどね)

妨害レンジャーに対する苦情は、風紀委員長の僕の耳にも入るほど多く寄せられており、それに対して取り締まりを行えば一気に風紀委員の知名度や、生徒たちからの支持を得ることができると踏んでいた僕は、彼らの好きな風にさせておくことにしたのだ。

その結果が水風船になるのだが。

これによって、妨害レンジャーは解散となったのは言うまでもない。

ちなみに、この一件の被害だが、まずは加害者でもある啓介。

「この大馬鹿野郎がっ!!」

「調味料を粗末にするなんてっ……しかも、あれは母さんのお気に入りのおツツ……啓介、お小遣いは一生ありませんからねっ」

今回の一件が学園から知らされ、あまりにも陰湿……というよりもばかばかしい内容におじさんの怒りに火をつけ、また水風船に使ったお酢はおばさんのお気に入りでかなり高いものだったらしく、火に油を注ぐことになったらしい。

そして、僕。

「美竹君、お酢の匂いがきついわ」

「……取れないんだよ」

あの後シャワーを浴びて、制服もジャージにしたのだが、お酢の匂いが強すぎて洗い流したくらいではなかなか匂いが取れることもなく、肩身の狭い思いをする羽目になった。

「あたしの、これはどうかな?」

と言ってリサさんが差し出した芳香剤で、何とかお酢の匂いは消えたのだが

「どうして、一樹君から今井さんの匂いがするの?」

放課後、C i R C L Eで合流した紗夜に問い詰められるという事態に発展することになった。

目の色彩が失われているような気がする彼女のその姿は、お化けを

彷彿とさせるほどの不気味さと恐ろしさがあつた。

湊さんの助太刀のおかげで、何とか誤解は解くことはできたが、その場にいた月島さんは、のちにその時のことをこう言っていた。

「うん。あれは修羅場だね」と。

第17話 謎の来客

「さてと、これで予習もばっちりっ」と

数日後の夜、僕は自室で次の授業の予習を行っていたが、それもなんとか終わらせた僕は、両腕を伸ばして固まっているであろう体の筋肉をほぐした。

程よい気持ちよさを感じつつ、僕は時間を確認する。

時刻は午後8時30分。

明日は日曜なので、もう少し起きていてもいいが、早寝早起きは決して悪いことではない。

そう思いながら、眠りに就くべく明かりを消そうと立ち上がった時だった。

来訪者を告げるチャイムの音が聞こえてきたのは。

それに対応したのは義母さんだったが、数秒ほどして慌ただしくこちらに駆けてくる音が聞こえてくる。

「か、一樹!」

「うわ!? な、何?」

まるでけり破るかのように開けられたドアから入ってきた義母さんは、ものすごく慌てていた。

その様子に、僕はただ事ではないと感じながら、義母さんに声をかける。

「あ、あああああなたを迎えに来たってひひひ人が」

「…………? ちよつと行ってくる」

慌てているためか、要領を得ないので直接会ってみることにした。

「兄さん、何事?」

「なんだか、僕に来客みたい」

外に出ると、蘭の部屋から蘭が顔をのぞかせると、僕に聞いてくるが僕ですら事態を呑み込めていないのだ。

「…………あたしも行く」

何かを悟ったのか真剣な表情でそう言うと、蘭は部屋を出て僕のところまで歩いてくる。

蘭が頑固なのは知っているので、何を言っても無駄だと思った僕は、蘭と一緒に訪問者がいるであろう玄関まで向かうことにした。

「あ……」

そして玄関まで移動した僕が見たのは黒服にサングラスをしている複数の女性の姿と、その人たちと対峙している義父さんの姿だった。

「一樹、この方たちは」

あらかじめ相手から話を聞いていた父さんが、僕にそれを説明しようとするが、僕にはこの人たちの正体に見当がついていた。

「えっと……弦巻さんのところの人……ですよね」

この前、ちよつとしたきっかけで一度会ったことがある、弦巻さんのところの黒服の人だ。

弦巻さん曰く、『よくわからないが、弦巻さんがお願いすると、大体何でもやってくれる人たち』だそうだ。

「突然の訪問申し訳ありません。美竹 一樹さま、ごころさまのライブでキーボードをやっていただけではないでしょうか？」

「へ？」

黒服の一人の申し出に、僕は言葉を失う。

(どういうこと？ というより……)

「あの、ハロハピって『キーボード』はないですよね？」

僕が心の中で思ったことを蘭が代わりに口にしてくれた。

そう、ハロハピの編成はボーカル、ギター、ベース、ドラム、DJだ。

キーボードはなかったはずで、これまでもそういうパートは打ち込みだったはずだ。

(まさか……)

「実は、ごころさまが今回のライブではキーボードを加えたいとおっしゃっております、その際に松原さまより美竹一樹さまが、キーボードができるとご学友から聞いたことがあるとお聞きしまして、お願い申し上げに伺わせていただきました」

やはり、弦巻さんの気まぐれだった。

(中井さんめ……)

おそらく、花音さんに伝えたであろう中井さんに恨み言を心の中でこぼすが、本人に悪気があるわけではないし、やったところで何も変わらない。

僕は義父さんのほうに視線を向ける。

「義父さん、今から出かけてもいい？」

「兄さん!？」

「ああ、大丈夫だが、気を付けるんだぞ」

蘭の驚きに満ちた声をよそに、父さんからOKをもらった僕は、黒服の人たちのほうに視線を戻すと

「分かりました。着替えてくるので少しだけ待ってください」

とだけ答えて自室に向かうと、素早く寝間着から、私服に着替えて玄関に戻った。

「それじゃ、行ってきます」

「……」

腑に落ちないといわんばかりの蘭達に見送られつつ、玄関を出るとそこにはものすごく長いリムジンカーが止められていた。

「どうぞ、お乗りください」

一か所のドアを開けて乗るように促された僕は、そのまま車に乗り込むと、ドアが閉められた。

(なに、この急展開)

車の中は、広がった。

もつと何か言うことがあるのだろうか、もはや状況に追いついていくのでやっただ。

そしてそのまま車が動き出す。

『美竹さま、中央のテーブルに弾いていただく楽曲の楽譜と音源がございますので、ご確認ください』

「は、はいー」

スピーカーなのか、聞えてきた黒服の人の声に慌てて返事をした僕は、真ん中のテーブルに置かれたキーボードの楽譜と、音源が入っているであろう音楽プレーヤーを手取る。

(えっと、曲名は『せかいのつびのびトレジャー!』か)

その曲は、前に彼女たちのライブで聞いたことがあるので、知らない曲ではないが、念のために曲を頭に叩き込んでおくことにした僕は音楽プレイヤーを再生させる。

(これ、確か数十万もするプレミアとかじゃなかったっけ)

そこまで考えた僕は、その考えを忘れるべく、流れてきた曲に神経を集中するのであった。

そして、数十分ほど経ったとき、車が止まりドアが開いた。

「こちらにお乗りになって、お待ちください」

「は、はい」

そこはどこかの港の倉庫街のような場所で、目の前にあるのは円盤状のまるでサーカスのステージのようなものだった。

柵が円状に囲っており、その内側にはドラムやDJ用の機材にキーボードが用意されていたので、まず間違いないだろう。

(つまり、ここでライブをするってことか)

そうあたりを付けた僕は、後付けで作られたであろう階段を上ってステージ内に入ると、キーボードの前に立った。

(このキーボード、啓介が使ってるのより上位機種だ)

もはや何も言うまい。

上位機種ではあるが、奏でられる音色は基本的には変わらないので、これなら本番で戸惑いことはないだろう。

これで準備は万端。

あとは、ハロハピのみんなが来るのを待つだけだ。

こうして僕は、ハロハピのみんなが来るのを待つのであった。

第18話 カオス

僕は彼女たちがやってくるのを待っていた……のだが。

「来ない」

どれほど待っても、人っ子一人来ない。

ライブを見るであろう人はおろか、ハロハピのメンバーすら。

(もしかして、何かのいたずら？ ドツキリ?)

あの弦巻さんだ、そのくらいは平気でやりそうだ。

そうだとすると、これはどういった趣旨の物なのだろうか？

「ダンスでもすれば動きがあるかな？」

ドツキリならば『何も無い場所に放置されたら人はどうするのか？』的なものだろう。

もうこうなればかかったふりでもして、速く終わらせよう。

そう決めた時だった。

「あ、カズ君だ！」

「おやおや、一樹ではないか。ああ、こうして同じステージに立つとは……夢い」

北沢さんの声が聞こえたかと思うと、今度は薫さんの声も聞こえてきた。

声とともに二人がステージの上に向かってくる。

「一樹君、いきなりでごめんね。驚かせちゃった、よね」

「いや、大丈夫。困惑はしてるけど」

続いてステージが上がって僕の姿を見るや否や謝ってくる花音さんに、僕は苦笑しながら返すと、ミッシェル(奥沢さん)もまた申し訳なさそうに謝ってきた。

「本当に、うちのこころがすみません」

「いいんだけど、できれば——」

「さあ、いっくわよー!!」

“この状況を説明してくれる？”と言おうとした瞬間、弦巻さんの元気のいい声に遮られてしまった。

そして、弦巻さんの号令を待っていたかのように、いきなり今まで

立っていたステージに明かりがともる。

「うお!？」

そして、いきなり揺れたかと思うと、周辺の景色がどんどん変わっていく。

「あの、これって飛んでる!？」

景色が上から下に移動していくので、まず間違いない。

「もしかして、ライブって……」

「そうよ! 空を飛ぶのよ!」

ステージ衣装に身を包んだ弦巻さんが、飛び切りの笑顔で答えてくれた。

どうやら、今回は空中ライブのようだ。

そして、これは

(す、スケールが違うすぎる)

もう、ここまでくると何が来ても驚かないような気がする。

僕ですら、空中ライブなんて考えたこともなかったことを考えて、そして実行に移す弦巻さんは、ある意味最強と言っても過言ではない。

「それじゃあ、行くわよ! 『せかいのつびのびトレジャー!』」

そして、ライブが始まった。

僕はこの状況に混乱しつつも、キーボードを弾いていく。

「ゲート曰く、まずは自分を信じてみるのだ……そうすれば、すべてが見えてくる」

そんな中、薫さんの表情が完全に真っ青に変化していた。

(あ、そういうえば薫さんって高所恐怖症だったっけ)

そんな人が、よく舞台上がれるなどと思うけど、きっと役者モードのようなスイッチがあるのだろう。

それはともかくとして

「薫さん、その鳥全部飛べないけど」

「うっ」

先ほどから、鳥の名前を言っているがその鳥はすべて飛べない鳥だった。

僕の指摘に、心なしか薫さんの表情がさらに青くなったような気がする。

(悪いことしちゃったかな)

ツツコミを入れたことに、多少の罪悪感を抱いてしまった。

「それじゃ、白鳥とかはどうかな?」

そこへ、花音さんからフオローが入る。

「そうだ! 私白鳥! つまりは、そういうことさっ!」

それによつて、薫さんはいつもの調子を取り戻すことができた。

とはいえ、僕は困惑したままだけ。

「あの、ところでこの状況を——」

「ミツシエル、飛ぶわよ!」

これまた僕の言葉は弦卷さんに遮られた。

「イエーイ!」

ミツシエルも声を上げるが、もうすでに飛んでいるのだが……

「え……あれはやらないって言ったじゃん!」

「奥沢さま、こちらを」

一体何をしようとしているのかは分からないが、慌てているミツシエルの背中に黒服の人が何かを付けた。

(いや、まさか……ね)

本当はなんとなくだが、弦卷さんが何をしようとしているのか予想がついていた。

そして、曲がサビに入った瞬間、弦卷さんは僕の予想通り、飛び降りたのだ。

しかも高度何百メートルあるのか知らない場所から。

下に飛び降りた弦卷さんを追いかけて下を覗いたミツシエルは、思い立ったように顔を上げると、こちらに向かって後ずさりをはじめ

「飛べない熊は、ただの熊さんだあ!!」

(いや、それでいいんだよ)

この世に飛べる熊なんていたら色々な意味で恐ろしい。

それはともかくとして、飛び降りて行った二人が心配ではあるが、

他の三人は普通に演奏を続けている以上、僕も演奏を続ける必要がある。

これはもはや、演奏者としての意地だ。

(いや、僕もよく演奏できてるよ)

もはやめちやくちやを通り越して意味不明な状況にもかかわらず、演奏できている自分をほめたい。

(よし、演奏も終わった。後は……)

先ほど飛び降りた二人の様子を見るべく、僕は彼女たちが飛び降りたほうまで移動すると下を覗き見る。

(大丈夫なのか、これ?)

弦巻さんのことだから、パラシュートの的なものはちゃんと用意しているとは思うけど、未だに落下し続けている二人の姿に色々と不安を感じずにはいられなかった。

そう思っていると、ミッシェルの足の部分が火を噴いた。

かと思えば、そのまま重力に逆らって飛び始めた。

(なるほど、ジェット機みたいなのをつけてたのね)

「カズ君！ ミッシェル飛んだよ！」

「あ、うん。そうだね」

その様子を興奮した様子で言う北沢さんに相槌を打ちつつ、ミッシェルたちのほうを見ていた。

「うわ!? びつくりした」

すると、今度は花火が撃ちあがり始めた。

「きれい……」

花音さんの言う通り、カラフルな花火は確かに綺麗だが、これらの方をやるのにどれほどの費用やら手間がかかっているのかを考えると、気が遠くなりそうだった。

(あ、降下し始めた)

役目を終えたといわんばかりに、降下を始めるステージに、僕はもう驚きすらしなかった。

そのまま僕たちをのせたステージが、船のデッキ上に着地するタイミングで、ミッシェルが尻餅をついた。

「ミツシエル！」

そんなミツシエルに元に、北沢さんと花音さんが慌てて駆けよっていく。

「大丈夫？ 乗り物酔い？」

「いや、なんだか……急に腰が抜けちゃった……みたいで」

(そりや、空高くから飛び降りればそうなるよ)

僕としてはどんなことがあっても味わいたくない恐怖を、ミツシエルは味わったことになる。

ある意味ミツシエル……奥沢さんって弦巻さん達よりもすごい人なんじゃないかと思ってしまうたりもする。

「薫さんー！」

「え？」

そんな時、少し離れたほうから聞こえてきたりみさんの切実そうな声に、僕とミツシエルは思わず同じタイミングで声を上げるとその方向に顔を向ける。

そこには、地面に仰向けに倒れている彼女の肩を、両手でつかんでいるりみさんの姿があった。

「鳥でした！ 私、薫さんの背中に白い翼が見えましたっ!!」

「……え？」

なんだかりみさんが大きな動きをして叫んでいるが、その内容が僕には意味が分からなかった。

……多分薫さんが何かを言っただと思っただけ。

そんなことを思っていると、薫さんはぐったりと糸の切れた人形のようになった。

おそらくは、意識を失ったのだろ。

(薫さんも薫さんで、本当に頑張ったもんね)

高所恐怖症にもかかわらず、演奏をしきった彼女に、僕は心の中でねぎらいの言葉をかける。

「薫さん!! 目を開けてください！ 薫さんっ!!!」

とはいえ、意識を失った薫さんにしがみついて、泣いているのか肩を震わせているりみさんの姿は、まるで最愛の人を亡くしたヒロイン

のようにも見えた。

(ナニコレ)

それを、僕は呆然と見ることしかできなかった。

「ということで……ハロー、ハッピーワールドでしたー」

そしてこの状況を強引にまとめるミッシェルもすごいが、彼女もそのまま気を失ってしまった。

「ミッシェル！ ミッシェル！」

「美咲ちゃん！ 美咲ちゃん！」

そんなミッシェルを揺さぶりながら名前を呼ぶ北沢さんと、中に入っている奥沢さんの名前を呼びながら揺さぶる花音さん。

ちなみに奥沢さんいわく、北沢さん達三バカは奥沢さんがミッシェルであることを、わかっていないとのこと。

つまりは……

「え？ みーくん？ どい？？」

花音さんの言葉に反応して、辺りを見回して奥沢さんを探し始める北沢さんと

「ふええええつ」

そんな状況に困り果てた花音さんという状況が出来上がってしまった。

「薫さあああん!!」

さらに向こうのほうでは、まだりみさんが薫さんにしがみついて名前を叫んでいるし。

(カオスだ。これはまさしくカオスだ)

もはやこの場はカオスと化していた。

「恐るべき弦巻ごころ。一瞬にしてカオスを生み出すとは……」

僕は、改めて弦巻さんの恐ろしさを思い知らされることになった。

「流石薫にミッシェルね！ 寝顔まで笑顔だわ！」

「いやいやいや！ あれは寝てるんじゃないやなくて、気を失っているんだってー！」

「……?? 寝ているときは気を失うのよ？」

「だ、だめだ……歯が立たない」

そんな力オスな状況でも、笑顔で言う弦卷さんにツツコミを入れるが、僕一人では無力だった。

首を傾げて弦卷さんに反論されてしまった。

(というより、誰かこの状況を僕に説明してくれ!!)

結局、僕がこの状況が生み出されたきっかけが、ものすごく大雑把にまとめて言うてしまうと、Poppin' Partyの皆を笑顔にするためであることが分かったのは、しばらく経ってからだった。

第4章、完

第5章 『出会いと始まり』 第19話 始まりの言葉

そろそろ夏の足音も聞こえてきそうな季節。

詳細が一切わからないライブ？に巻き込まれながらも、僕はいつも通りの日々を過ごしていた。

果たして、それを日常と呼べるのかは疑問だけど。

(何だろう、今年は色々と波乱万丈な気がするんだけど)

まだ半年もたっていないにもかかわらず、この現状だ。

そう思わずにはいられなかった。

そんな5月のある日の昼休み、僕は廊下である人物と電話で話していた。

『……お役に立てず、申し訳ありません』

「そうですか……」

電話の相手の言葉に、僕は落胆の色を隠すことができなかった。

電話の相手はマツさん。

その内容は、今月の初めごろに依頼したチュチュと名乗る少女に関する調査結果だった。

(出なかったか)

その結果は、僕にとっては一番残酷なものだった。

なにがしらか爆弾は見つかるのではと、期待していた分落ち込みは大きい

『……差し出がましいですが、一つだけいいですか？』

そんな僕に、マツさんはいつになくきつい雰囲気で声をかけてきた。

「は、はい」

そのあまりの雰囲気、僕は圧されていた。

『お金持ちや権力者で、彼らのような感じの方はいることにはいますが、それは少数です。全員がそんな感じだと思われているのですから、そちらは改めることをお勧めします』

「そう……ですよね。すみません、ちよつと気が動転してました」
マツさんの言うとおりで。

僕の考えが正しければ、身近なところで言うと、弦巻家も悪事を重ねていることになってしまう。

でも、弦巻家の人は悪人ではない。

弦巻さんの両親に会ったことはないけれど、それでも僕にはそれが分かるのだ。

弦巻さんを見ていけば、何となく。

『ただ、このチュチュという少女、現在スカウトを行っている情報がありません』

「スカウト……それってプロデューサーとしてですか？」

それであれば、スカウトをするのは至極当然のことだ。

『いえ、どうもそうではないようです。これは、未確認の情報ですが、実は——』

そう前置きを置いたうえで、マツさんが僕に伝えてくれたチュチュという人物の動向は、僕にとっては意外なものだった。

『では、これにて失礼いたしました』

『はい、ありがとうございます』

マツさんから色々とお話を聞き終えた僕は、お礼を言ってお電話を切った。

(進展したというべきか、停滞しているとみるべきか)

僕にとってはかなり微妙な感じになってしまったが、いつまでももうじうじはしていられない。

マツさんの情報をもとに、僕もまた色々とお今後の動きを考えて行かなければいけないのだから。

「ん？ なんだろう」

そんな時、携帯が着信を告げるように震えだす。

だが、その振動は一瞬で、僕は首を傾げながらも画面を見る。

「メール？ 若宮さんからだ」

その相手は、Pastel*Palettesのキーボード担当で花女に通っている若宮さんからだった。

一応メールアドレスは交換しているが、そんなに連絡を取り合うこともないので、彼女から連絡が来るといふのはある意味驚きであった。

「……は？」

その内容を見た僕は、今度は首を傾げることになる。

そこに記されていたのは

『賄賂です！』

という一文だった。

B a n G D r e a m ! ~ 隣を歩む者 ~ 第5章『出会いと始まり』

R o s e l i a 関連でいろいろと不安要素や問題が山積み状態だが、僕にはもう一つの懸念事項がある。

それが、P a s t e l * P a l e t t e s だ。

同じ事務所に所属するアイドルバンドで、現在色々ところで活動を行っている。

そんな彼女たちに関して、僕や啓介たちの間ではある格言もどきが存在する。

それが『パスパレが下手踏めば、ムングロも下手を踏む』

これは、彼女たちのデビューライブの失敗を受けての物だ。

そのライブは、ある意味トラウマにもなりかかっているレベルだ。

別に、歌詞を間違えたり、下手な演奏をしたというものではない。

もはやそれとは次元が違うのだ。

簡単に言ってしまうえば、『アテフリアテレコ』がばれたというものだ。

当初、P a s t e l * P a l e t t e s がデビューする際に、堂々と『生演奏』と謡っていた。

だが、事務所側の方針は『事前収録したプロバンドの演奏に合わせて演奏しているふりをする。ボーカルもまた同様』というものだった。

僕からすればふざけていることこの上ない方針だ。

スタッフの言い分としては、練習をしていては、時間がかかるからというものだった。

そのような方針に、彼女たちが反対することなど実質不可能であり、結局としてその方向でデビューライブに挑んだのだが、結果は見事に観客にばれるという惨状だ。

電源トラブルなどという理由らしかったが、そんなことはどうでもいい。

この時に、楽曲を作曲したことが公になり、こちらにも批判が殺到したのだ。

色々あったが、何とか今の形に持ち直したのは、ひとえに彼女たちの努力の結果なので、そこは純粋にすごいと思っっているが、ただ一つだけ気に入くないといえは

(姉妹バンド……ねえ)

勝手にPastel*Paletteが僕たちの姉妹バンドという宣言を、パスペレのスタッフにされたことだ。

彼女たちのバンドが気に入らないとかではなく、僕たちのスタイルと彼女たちのスタイルは全く似て非なるものだからだ。

現在は非公式ではあるが『Roselia』が僕たちの姉妹バンドということにしている。

僕たちがRoseliaが姉妹バンドと言っているても、事務所が“パスペレが姉妹バンド”と言っている以上“非公式”になっってしまうわけだけど。

とはいえ、これはこちらにも当てはまるわけで、僕たちが下手を踏めば彼女たちに影響が出てしまうことになるので、もはやお互い様だったりするわけだが。

それはともかくとして、僕は事務所内のある一室のドアの前に立つと、ノックをする。

『はい』

「失礼するよ」

中からの返事を聞いた僕は、ドアを開ける。

「あれ、美竹君？　どうかしたんですか？」

「あ、おにーちゃんだ！」

中にいたのは、ドアのそばに立っている大和さんと、日菜さんに丸山さん。

そして、ソファーに腰かけている若宮さんの、四人だった。

「……日菜さん、何度も言ってるよね？　人前でおにーちゃんって呼ぶのはやめて」

「別にいーじゃん」

返ってくる日菜さんの言葉は、大体がこんな感じだ。

もはやあきらめるしかないのだろうか？

「あはは、相変わらずですね」

「でも、いいなー。私も、お兄ちゃんって呼んでみたいな」

「彩ちゃんでも、おにーちゃんは渡さないよっ」

うらやましそうに言葉をこぼした丸山さんに、日菜さんは僕の腕をつかむと小悪魔のようなからかうような目で丸山さんを見て、宣言しだしたのだ。

「……丸山さん、そういう願望でもあるの？」

「じ、冗談だってば〜！」

ジト目での僕からの追撃に、丸山さんは慌てふためいて否定するが、そうすればするほどに疑惑は深まっていくのだが……。

もちろん、冗談で言ってるのは分かっているけど、ちよつと日菜さんにのってみただけだ。

「とりあえず、丸山さんのブラコン説とかは、それはおいといて」

「置いておかないですよ！」

日菜さんが丸山さんをからかう理由が、何となくわかるような気がした。

面白いリアクションをしてくれるので、ついつい悪乗りしてしまう。

「若宮さん、昼休みのあの怪文章は何？」

「怪文章？」

僕の言い回しに首を傾げている大和さんに、僕は先ほど届いた彼女

からのメールを見せる。

「わ、私は……忍びは口が堅いんですっ」

「でも、知りえた情報を仲間にも共有するまでが忍びの務めじゃない？」
(ブシから始まって忍びにまで行ってる)

武士と忍びは果たして同じものなのだろうかという疑問はあるが、とりあえず、今はそれには触れないでおこう。

「実は、私見ちゃったんです。チサトさんが……」

「はっ!? もしかして、スキャンダル!?」

「大問題じゃん」

(おいおい、勘弁してよ)

大和さんの口にした言葉に、僕は思わず頭を抱えなくなってしまった。

「それで、その相手は？」

「タエさんです」

誰なのかを聞くと、彼女が口にしたのはPoppin' Partyでリードギターの花園さんの名前だった。

「……たえちゃん？」

その意外な名前に、丸山さんも思わず素っ頓狂な声で聞き返した。

「チサトさんが、山吹色のお菓子を……あれは賄賂です」

若宮さんが、そう言い切った瞬間だった。

「お疲れ様です」

話題の人物である白鷺さんが部屋に入ってきたのだ。

「おー、本人登場!」

「……??」

「千聖ちゃん」

日菜さんの言葉に、目を丸くする彼女に、丸山さんが声をかける。

「……何かしら?」

ただならぬその雰囲気、白鷺さんも何かを感じ取ったのか困惑の色を強めた。

「えっと……」

話を切り出しづらかったようで、丸山さんは若宮さんのほうに視線

を向ける。

そうなれば、当然全員の視線は若宮さんに注がれるわけで……

「……………」

「イヴちゃん?」

挙動不審になり始めた若宮さんに白鷺さんが声をかけた瞬間だった。

「せ、拙者!・これにてドロンです!」

「い、イヴさん!?!」

とうとう耐えられなくなったのか、忍者のポーズをとったかと思うと、ソファアの下に潜り込もうと……いや、逃げようとし始めた。

「それー!」

「ニンニンニン、あーれー!」

そんな彼女に日菜さんが抱きついて、上半身を起き上がらせると、必死に逃げようともかく若宮さんと、それを阻止する日菜さんという図が出来上がった。

(どうすんの?・これ)

僕はその光景を、何とも言えない表情で見ていることしかできなかった。

……というか、あれに割って入りたくない。

(僕、また何かに巻き込まれようとしている?)

そして、今更ではあるが、僕はそのことに気が付くのであった。

結局、若宮さんが落ち着きを取り戻したのは、少ししてからのことだった。

第20話 怪しい雲行き

「実は――」

あれから若宮さんが正気を取り戻したことで話を聞くと、どうも白鷺さんが花園さんに山吹ベーカーリーの紙袋を手渡しているのを見たらしい。

それを見て、若宮さんが賄賂だと勘違いしたというのが、事の経緯だった。

(しようもないといえはそれまでだけど、白鷺さんだからな……)

なんとなく、彼女なら本当にそれをやりかねないと思ってしまう節がいくつもあるだけに、ばかばかしいと切り捨てるのはかなり難しい。

「だってよ。どうなの?」

とりあえず白鷺さんの言い分を聞かないことには何も始まらないので、僕は彼女に話を振る。

「あれは、人気のパンをあげただけよ。ちよつと買いきちやつたから」

白鷺さんの説明は、一応筋は通ってはいるけど、何か腑に落ちない「ふーん。だって、彩ちゃん」

「……うん」

それは丸山さんも同じなのか、あまり浮かない表情をしていた。

「えつと……千聖さん今日は練習はできませんよね?」

「ええ、追加の撮影があるから30分だけなら」

気まずい雰囲気振り払うように、大和さんが白鷺さんに聞くが、空気は変わらない。

「あの! ゆらゆらをやりたいと思うのですが……どうでしょうか?」

「何で敬語?」

いつもは普通に話しているのに、なぜか敬語で話している丸山さんの姿は、かなり違和感を強く覚えた。

(ああ、なるほど)

それだけで、すべてを察した。

このような変な感じになったそのすべての理由を。

「……いいわよ」

「ありが——」でも、今はベースに集中したいからボーカル話でいいかしら？」——「……うん」

一瞬表情が明るくなるも、白鷺さんの言葉で、また表情を曇らせてしまった。

「……僕も、見学させてもらうね。もちろん、良いよね？」

「……ええ」

僕も一応彼女たちの練習をたまにはあるけど教えていたりするので、練習風景を見る権利はあるはずだ。

……たぶんだけど。

白鷺さんは断ることはしなかったが、その表情は見てほしくはないといっているようなものだった。

それも、あの事存在がかなり大きいのかもかもしれない。

そんな重い空気のまま、レッスンスタジオに移動しての練習が始まった。

演奏しているのはゆらゆら……『ゆら・ゆらRing—Dong—Dance』は僕が作曲した楽曲だ。

ただ、これにはある特徴があり、それがボーカルとベースによるツインボーカルだ。

丸山さんのふわふわした声色と、白鷺さんの凛とした歌声が醸し出すそれは、うまくハマれば至極の一曲になるようにできている。

そんなこの曲は、今までの没曲ではなく、僕がMoonlight Gloryの時と同じように一から作曲した楽曲なのだ。

当然、思い入れもかなり強い曲なのだ。

それなのに、ボーカルは丸山さんだけ。

そのせいで、この曲の良さが無へと化してしまっている。

「……」

それは、演奏している彼女たちだっつていやというほどわかっているはずだ。

「うーん、なんだかるんってしないなー」

浮かない顔の日菜さんの言葉がすべてを物語っていた。

「…………ごめ——」ごめん！ 私、全然集中できてなかった——…………彩ちゃん」

白鷺さんの言葉を遮るようにして大きな声で謝る丸山さんに、白鷺さんは表情を曇らせた。

「もう一回いいかな？ できれば本番のように二人で歌わない？」

「…………それじゃ、練習にならないわ」

丸山さんのその提案に、白鷺さんは顔を背けて拒絶する。

それでも丸山さんはあきらめずに、白鷺さんになを説得していく。だが、

「いやよー！」

「っ!？」

白鷺さんからこれまでの中で一番強い拒絶の言葉を投げかけられた丸山さんは、その場でうつむいてしまった。

「ご、ごめんなさい。そういうつもりじゃ——」

「わ、私ちよつと顔洗ってくるね！」

まるで逃げるように去って行く丸山さんの後を追うように、若宮さんと大和さんがレッスンスタジオを飛び出していった。

(丸山さんは二人に任せておいて十分だ。後は…………)

「…………撮影に行かないと」

「どうして歌わない？」

まるで逃げるように、撮影に行くと言い出す白鷺さんに、僕は声をかける。

「一君?？」

「それだと練習にはならないから…………よ」

「練習なのに練習をしないも同然の練習に何の意味がある？ そもそも、これを練習と呼べるのか？」

白鷺さんの答えを、僕は切り捨てる。

そして、しばらく間を開けて

「…………あの時のことを気にしてるのか？」

「ッ！」

白鷺さんの反応から見ても、どうやら、凶星だったようだ。

それは、今から半年ほど前のこと。

この日、Pastel*PalettesはシングルCDの収録を行うべく、事務所のレコーディングスタジオに集まっていた。

僕は収録風景を見学するために、スタッフの人たちのところで同席させてもらっていたのだ。

「では、お願いします」

『はい…』

スタッフに促されるまま、レコーディング用の部屋で収録予定の曲の演奏を始めた。

最初は『はなまる アンダンテ』

丸山さんいわく応援ソングのような感じの楽曲だ。

「はい、オーケーです！」

最初の曲は問題なく収録を終えることができた。

続いて、2曲目に上がったのが『ゆら・ゆらRing—Dong—Dance』だった。

それもまた普通に収録を終えることができた。

「はい、オーケーです！ 以上で——「ちよつと待った！」——」

収録を終わりますというスタッフの言葉を遮るように、一人の人物が異論の声を上げたのだ。

「あんだ達、今のが全力の演奏なのか？」

レコーディングブースにいる彼女たちに声をかけたのが、僕だったのだ。

『えっ？』

『どういう意味かしら？ 美竹君』

困惑している丸山さんとは対称的に冷静だった白鷺さんが、僕に先を促す

「全然できてない。この状態でCDにされるのを僕には看過できないし、買う人にも失礼。だからこの曲をCDに収録するのは反対。以上」

『っ！』

この曲の本来待っているはずの魅力が、この演奏では出されていない。

そう思ったからこそその待っただった。

『ちよつと、何がだめだったのかを具体的に言ってもらわないと、改善のしようがないわ』

なおも食い下がってくる白鷺さんに、僕は

「あんたが一番ダメだった」

と、静かに告げた。

『ッ!?!』

「またいずれかのタイミングで、この曲の演奏を聞かせてもらう。そこで合格するまではこの曲の著作権は僕たち、Moonlight Gloryが保有する。演奏自体は自由にして構わないけど、CDへの収録は許可しないから」

その言葉に息をのむ彼女をしり目に、僕はそう言い捨てると、そのままレコーディングスタジオを後にしたのだ。

あれから、半年の時間を経っていた。

「このままじゃ、何年経っても不合格のまま……それでいいの?」

実際、これまで『ゆら・ゆらRing—Dong—Dance』を演奏しているステージはすべて見ていた。

でも、僕はすべてに不合格の結果を出し続けている。

どんなに観客の反応が良くても。

どんなにフルを聞きたいという声が上がっても。

「そんなの……みんなの貴重な時間を無駄にするなんて」

「無駄？　僕からすれば、今の練習方式そのものが無駄にも思えるんだけど」

普通のバンドならば個別に練習しても何の問題もない。

だが、彼女たちは別だ。

彼女たちがそれをやると、演奏を合わせた時に音がちぐはぐしているような感じになる可能性が高くなるのだ。

だからこそ、練習はできる限り全員で通してやるべきなのだが、スケジュールの関係で、それはあまり現実的ではない。

（白鷺さんが答えを正しく導き出せばすべては変わるはず）

そういう意味で、この曲は彼女たちにとって一つのターニングポイントのような存在なのだ。

これを聞いて合格を出した時こそ、彼女たちPastel*Palletesがまた一つレベルアップした証になるのだから。

「だったら、どうすればいいのよー！」

彼女からすれば、やることなすことすべてを否定されているために、八方ふさがりの状態だ。

「それは、自分で考えるべきだ」

そんな白鷺さんの心からの悲鳴のようなその言葉を、僕は冷たく切り捨てる

「……一つだけ、ヒントを上げる」

「え？」

ことができなかつた僕は、白鷺さんに背を向けたまま、言葉が続けた。

これを言えば、白鷺さんなら僕の望む答えを導いてしまう。

そのリスクを無視して、僕はその言葉を口にする。

「僕が『できてない』と言ったのは、白鷺さんのベースとボーカルの上手い下手を指してるんじゃない。指しているのは、この楽曲の特性の部分」

そこまで言って、僕は『それじゃ、当日を楽しみにしてる』と告げて、スタジオを後にした。

「ん？ メールだ……って、日菜さんからだ」

少し歩いたところで、メールの受信を告げるように震えだす携帯を、足を止めて取り出して差出人を確認すると、相手は日菜さんからだった。

日菜さんからのメールを開くと、そこには

『おにーちゃんって、鬼のようで優しいよね。ツンデレ？』
と書かれていた。

(誰がツンデレだ。いい加減、CDに収録なりなんだりしないと曲が浮かばれないと思っただけだ)

心の中でツツコみを入れながらも、僕は事務所を後にするのであった。

第21話 サポート

白鷺さんに、ヒントを出してから数日が経過したある日の夜。
練習も終わり、自宅で予習を行っている、携帯が鳴り響く。

(紗夜からかな)

この時間帯に電話をかけてくるのは大体が紗夜なので、今日も彼女だろうと思いつながら、携帯の画面を見ると、発信者は月島さんだった。

「はい、美竹です」

『あ、夜遅くにごめんね』

「いえ、気にしないでください。ところで用件というのは、あれですか？」

月島さんから電話がかかってくる理由に察しがついている僕は、申し訳なきように謝ってくる単刀直入に聞いた。

『うん、それだね』

「今度はどのライブですか？」

『ちよつと待っててね……』

このやり取りも随分となれたものだ。

それは僕が現在、サポートミュージシャンとして活動する際の窓口になっているのが、CiRCLEとなっているからだ。

本来は事務所側から連絡するはずだったが、月島さんからの連絡のほうが一応早いので、月島さんから連絡をしてもらうことで話している。

流れとしては、クライアントから依頼を受け付けるのがCiRCLEで、受け付けたCiRCLEから事務所のほうにその旨の連絡がいき、そして僕のところへ連絡が入る形になっている。

これが実に回りくどい上に、ややこしい。

だが、これをしないと窓口が事務所になってしまうことになる。

事務所が窓口になると、身元が特定される可能性が非常に高まってしまう危険性があるのだ。

色々な事情があり、身元の特定はできる限り避けたい。

そのために、全く無関係な場所を窓口にする必要があったのだが、

その時に白羽の矢が立ったのがC i R C L Eだった。

以前、サポートギターをやっていたという経緯で、そうなったのだがあそこは僕が一方的に辞めたという引け目もあり、正直良い顔はしないと思っていたのだが、結果は予想外にも二つ返事でOKだった。そんなこともあり、現在に至るのだ。

『で、このバンドのギターの人がけがをしたみたいだから、レコーディングの時と本番の時に代わりに入ってほしいんだって』

「レコーディングとライブですね。分かりました。それで日時のほうは？」

一通りの説明を受けた僕は、月島さんから日時と場所を確認して電話を切る。

「はあ……何でも屋だな、これ」

不満を口にしても何も変わらないのは分かっているが、不満が口から洩れてしまう。

サポートというのはそういうものなので、当然と言われればそうなのだが、それでも自分が便利屋のように思えてしまっただけではない。(僕って、いったい何?)

最近の僕は、自分を見失いかけているような……そんな気がしたのだ。

月島さんから伝えられたサポートの日、田中君からお茶でもどうだという誘いがあり、ちょうど時間にも余裕があったので僕も参加することにした。

とは言っても、集まったのはC i R C L Eのカフェテリアだけど。

「こうやってみんなで集まるのも久しぶりね」

「ああ、中々都合も合わねえしな」

集まって早々しみじみとした様子で口を開く森本さんに、田中君が相槌を打つ。

前に集まったのは週末の練習の時以来なので、本当に何日ぶりだろう。

「でも、これに意味はあつたぜ。俺は非常に大きな収穫を得ることができたしな」

「私も、かな」

「二人ともいいわね。私はぼちぼちよ」

みんなの報告を聞いて、僕は喜ぶべきなのか、それとも焦るべきなのか複雑な気持ちがまたぶり返してきた。

「一樹はどう？」

「……僕もあんまりかな。やっぱりこのメンバーでやりたいっていう気持ちが強くなるだけだよ」

サポートに入れば入るほど、その気持ちはどんどん高くなっていく。

「それは俺もだ。俺なんて、この間『狂犬2』なんて異名を付けられちまったぜ」

「あはは、聡志ってすぐにアドリブ入れるもんな」

「別にいいだろ。その方がカッコいいし、それにお前らだっていつもついてきてくれてんじゃねえか」

啓介の言葉に田中君は、口を尖らせながら言い返す。

「でも、最初は本当に大変だったよね」

「そうそう、ドラムは走るわ音は入れまくるわで、しょっちゅう一樹とけんかしてたじゃない」

「あー、そんなこともあつたね」

森本さんの言葉に触発されるように、僕は当時のことを思い出していた。

バンド……HPを組んだ最初のころは練習をするたびに毎回喧嘩していた。

田中君はガンガンドラムをたたきまくりたいタイプだったし、僕は僕で自分が完璧に作り上げた（気になつている）曲をいじくられるのが気に入らないタイプだったりで、まずはここでもめた。

それはしばらくの間続いていたような気がする。

「あの時は、こんなふうにはバンドを組んでいるなんて、思ってもいなかったもんね」

「それは俺のセリフだ」

当時のことを思い出すと、ついそんな言葉が出てきた。

「うんうん。一度一樹に殺されかけたし」

「う……そのことは本当に反省してるから、だからもう言わないで」
『あはは』

当時の罪悪感に駆られて懇願する僕の様子に、みんなで笑いあう。今はこうして笑っていられるが、本当にあの時は洒落にはならない状態だった。

だからこそ、無限地獄は封印した練習方法だったりもするわけだけど。

そんななんて事のない話をしていると、時間はあつという間に過ぎていく。

「あ、そういえば」

啓介のその言葉が出るまでは。

「この間、俺たちをスカウトしに来た人が来たんだよ」

「ああ。何でも俺たちのことをプロデュースしたいんだってさ」

「またか……」

啓介と田中君の話を聞いて、僕は深いため息をついた。

Moonlight Gloryが活動停止になってからというもの、僕たちのもとにたくさん事務所がスカウトをしに来た。

『私たちとなら、やれる』

『私のところに来れば、君の理想がかなう』

等々、耳障りの言いことを口にしてしたが、それらすべてに対して僕はお断りの返事を出している。

(胡散臭いんだよね、どこもかしこも)

“僕たちを囲い込めば、お金儲けができる”

そんな魂胆ではないかと勘繰ってしまい、信用することができないのだ。

それ以外にも、僕たちが作曲した曲の著作権的な手続きもかなり面倒になるためだったりもするけど。

僕が回りくどいことをしてまで素性を隠すのは、このことが一番関

係していたりする。

“ サポートをやっているから、スカウトできる”

そう思われるのが嫌なのだ。

「もちろん、断ったんだよね？」

「ああ。だがかなりしつこくて何度も何度も来やがってな」

田中君が苛立ちを隠さずに言う姿を見て、僕はなんとなくその光景を思い浮かべてしまった。

スカウトをする人の中には、断つても中々引き下がろうとしない面倒な人がいるが、今回もそのパターンだろう。

「あの子、たぶん留学生か帰国子女か何かだね。所々で英語を混ぜてたし」

(帰国子女?)

森本さんが口にした単語が、僕の頭の中で引つ掛かった。

(まさか……いやいやいや、さすがにそんな偶然はないでしょ)

一瞬、チュチュという少女のことが頭に浮かんだが、同じ人物がこちらにもスカウトをするなどという偶然は、そうそうないのだ。

きつと、別人だろう。

「それで、俺がカッコよく”結構です”って英語で言ったんだけどよ、相手の子がものすごく怒りだしたんだよ」

「いや、言えてないから」

「……ん? どういうこと」

啓介の言葉に、呆れた口調で指摘する田中君に、僕は詳しく話を聞いてみることにした。

「こいつな、その子に向かってであろうことか最悪レベルの侮辱語を口にしたんだよ。だから、相手は激怒しちまったんだ」

「うん。ものすごい剣幕だったよ」

中井さんが当時のことを思い出したのか、注文した飲み物が入ったコップを震わせながら言うのだから、かなりの剣幕だったのは伝わってきた。

そんな二人の言葉に、僕はある単語が出てきた。

(いやいや、流石の啓介でもそこまでの馬鹿じゃないはず)

そんなことを思いながら、僕は中井さんに確認をしてみることにした。

「もしかして、それって二単語で最初が“F”で始まって、最後の単語がyouで終わる奴？」

「……………うん」

答えはまさかの肯定だった。

思わず頭を抱え込みたくなってしまった。

「啓介、よく生きてられるよね」

「え？ どゆこと？」

「海外だったら良くて袋叩き、最悪の場合は殺されてるよ」

僕の言葉にきよとんとしている啓介に、真実を伝えると今度は啓介の顔が一気に青ざめた。

啓介が口にしたのは、海外ではタブーと言われているクラスの侮辱の言葉だったのだ。

「もしかして、啓介が言おうとしたのって『No, thank you』だったりする？」

「おー！ それだよそれそれ！」

（全然かすつてもないし、合ってるの最後の“you”だけじゃん）

何をどうすれば侮辱の言葉と間違えるのかは知らない……………という知りたくもないけど、おそらく本人に悪気があつて言ったのではなく、ただ単にカッコいいフレーズを格好つけて言った結果だろう。

「それで相手、何か言つてなかった？」

「あ、ああ。問題はなかったぜ」

「ふーん」

僕の疑問に、田中君が一瞬視線を泳がせる。

それが僕に、何かがあつたことを伝えているようなものだった。

とはいえ、追及したところで言う可能性は低いので、僕はそれ以上聞くのをあきらめると、別の方向からアプローチをかけることにした。

「ところで、その相手の——つと、ごめんそろそろ行かないと」

相手の名前を気候とした瞬間、ここを出ないといけない時間を告

げるアラームが鳴りだした。

「気を付けて行ってきな。会計は俺たちがやっておくから」

「ごめん。それじゃー!」

啓介の厚意に甘えて、僕は荷物を持つとそのままトモさんが待つ場所まで、駆けて行くのであった。

第22話 狂犬との出会い

C i R C L E のカフェテリア。

「聡志」

一樹が去って行くのを確認してから、明美が口を開いた。

「本当に、あの事を言わないでいいの?」

「ああ。言う必要はない」

真剣な様子の明美の言葉を、聡志は切り捨てる。

それは、スカウトしに来た人物に啓介が侮辱の言葉を言ってしまった時のこと。

『な、なんですって!!』

『す、すみません。こいつは俺がしばきますんで、では!!』

激昂する相手に、聡志は何が起こったのか理解していない様子の啓介の頭をつかんで何度も何度も無理やり下げさせながらマシンガンのごとく言うと、そのまま逃げるようにその場を後にしたのだ。

それは、最悪の場合命にかかわる危険な状況を回避するための行動だったのだが。その時に聞いた、『許さない』という相手の言葉が一番問題だったのだ。

「でもー」

「もしあいつに話せば、また何とかしようとする……自分のことなんて二の次にしてな」

「……………」

険しい表情で言う聡志の言葉も、最後のほうに行くにつれて弱々しくなっていく。

「これは、俺たちの問題だ。俺達で解決するべきだ。違うか?」

「そう……よね」

「うん……私も、あの時の紗夜さんの姿……もう見たくない」

当時のことを思い出した全員の表情は、影が差し込んでるように暗いものだった。

(まあ、一樹には勘付かれてるだろうけど)

そんな中、聡志だけはそう感じていた。

それは、幼馴染としての勘だった。

「にしても、何もんだ？」

そう言いながら、ポケットから財布を取り出すと、中から一枚の用紙を取り出す。

それは黒色の紙で、猫の形の名刺であり、

「この、チュチュってやつ」

名前の部分に『チュチュ』と記されていた。

★★★★★

「はい、オーケーです！ 本番もお願いします」

(よし、今日も無事に終了つと)

この日の仕事である、レコーディングは滞りなく終わることができた。

僕の場合は後日開かれるライブのヘルプにも出るわけだけど。

(にしても、バンド内にサポートが三人もいるなんて……こんな偶然もあるんだ)

今日のレコーディングでは、どういうわけかは知らないが、僕と同じサポートが三人もいるという状態だった。

サポートじゃないのはキーボードとボーカルくらいだし。

「じゃ、お先—」

素っ気なくスタジオを後にしていく人たち。

これもサポートで活動していて見慣れた光景だ。

(ほんと——)

「ツレねえよな」

(え!?)

僕が心の中で言おうとした言葉を口にされたことに驚いた僕は、その人物のほうに、顔を向ける。

その人物は、金髪のショートヘアーの女性だった。

「三度の飯より、これだろ」

そう言いながら、スティックを手にするその人の言葉は、とても

かつこよかった。

……お腹を鳴らしながら言っただけだ。

「お腹を鳴らしながら言われても」

そう言っただけ、控えめに言う黒髪の女性。

僕はこの人たちのことを知っている。

「まあいいや。せつかく残ってんだし、ちよつと一曲やろうぜ」

僕の思考を止めるように、金髪の女性はスティックを構え出した。

「いいですよ」

僕は気が付けば、金髪の女性にOKを出して演奏の準備を済ませていた。

この人が、僕の知る通りの人ならば……。

そんな期待が僕の胸の中にならなくなり、すぐに演奏を始めたくてうずうずしてくるのだ。

「そうこなくつちやな。あんたも付き合ってくれよ。ちよつとばかり、食い足らなくてな」

そう言い切った瞬間だった。

ドラムの打音が響き渡ったのは。

(すぐっ。この圧力っ)

それはもはや、力の暴力と言っても過言ではない。

息をつく間もなく押し寄せるその打音、その圧は彼女の背後にまるで虎がいるような錯覚を覚えるほどに強いものだった。

(すぐいすごい！　なんて暴力的な音なんだ！)

一瞬でも気を抜けば、飲み込まれかねないその打音に、僕は心を躍らせていた。

(だったら、こうだ！)

僕の手は自然に動いていた。

相手から投げられる暴力的な打音すべてを、僕は捌いて相手に返していく。

すると、また相手から倍になって返ってくる。

そこにベースの音も加わり、それぞれの音の応酬になっていた。

それは僕にはあつという間にも感じられた。

「「はあ……はあ……」」

終わった頃には、僕たちは息を切らしていた。

「合わせるだけで……精いっぱいなんて」

話ができるほどには息が整ったのか、ベースの人が信じられないと言わんばかりに途切れ途切れに口を開く。

「和奏さん……だっけか？ あんた、なかなか熱いもん持ってるじゃねえか。あのアドリブについてこれるんだから、腕だっけってすげえと思う」

（彼女が、あの“和奏レイ”か）

和奏^{わかま} レイ。

サポートでベースやボーカルを担当しているベーシストの女性だ。

歌唱力、ベースの腕ともに高いことで有名な人だ。

どちらかという仕事に徹しているという感じが少々気にはなるけども、それをどうでもよくするほどの実力者だ。

「求められる演奏をするのが、バックバンドの仕事のはずでしょ」

「……仕事のために音楽をやってるのか？」

「ッ!？」

ドラムの女性の言葉に、和奏さんが息をのむ。

でも、それは僕も同じ。

動揺はなんとか隠せたとは思いますが、それでも彼女の言葉は僕の心に深く突き刺さった。

「あんだだっけ、音楽が好きなんだろ？ あつたら、もつと自由にやったって罰は当たんねえはずだ！」

「……あなたが言うと、説得力があるわね」

立ち上がって和奏さんに語り掛ける彼女に対して、和奏さんはどこかはかなげな笑みを浮かべながら言うと、ベースを去っていった。

「やっちまった」

「そうでしようか？」

ばつが悪そうに後悔している彼女に対して、僕はそう問いかける。

「少なくとも、あなたの言葉は悪意を持つてのものではない……和奏さんもそのことは知っていますし、むしろ見つめ直すきっかけにもなったはずです」

（そう、僕みたいだね）

彼女の言葉は、話しかけられていない自分にも響いてきたのだから。

「だといいいけどな。お前たちとやるのめっちゃくちゃ楽しかったからな」

そういつて再び椅子に座る彼女は、こちらに顔を向ける。

「にしても、カメレオンさんだっけか？ あんたなかなかにすげえ演奏するじゃねえか。うわさで聞いてたのとは違ったからびっくりしたぞ」

「あはは、ありがとうございます。そういうあなたも噂通り熱いドラマでしたよ」

一体僕がどんなふうに噂されていたのかはなんとなくは分かっているのですが、それを鑑みてもあの演奏は確かに第三者が見れば偽物だといわれてもおかしくない感じだった。

それとは一転して、目の前にいる女性のドラムは噂通りだった。

名前を佐藤ますき。

和奏さんと同じくらいに有名なドラマーだ。

これでもかという程にアドリブを入れていくほど音数が多いことで有名で、つけられた二つ名が『狂犬』だ。

田中君と同じタイプであり、『狂犬2』とつけられているのはそういった事情がある。

「っと、すみません。電話いいですか？」

「おう、いーぜ」

そんな時、僕の携帯（いつも使ってるのは別のやつで、所謂ガラケーだ）が着信を告げるように鳴り響いたので、相手に了承をとって電話に出た。

『もう終了の時間は過ぎていますが、何かトラブルでも？』

（……あ）

つい時間を忘れてやっていたが、セッションをしたのだからかなりの時間が経過しているわけで、いつまでたっても出てこない僕を心配して、トモさんが電話をかけてきたようだ。

「すみません、ちよつとセッションをしまして。すぐに向かいます」
『そ、そうですか。では例の場所で』

やはりかなり心配していたようで、ほつとしたようなともさんの口調に、僕はあとで謝ろうと思いつつも電話を切ると、佐藤さんのほうに向きなおる。

「佐藤さん、申し訳ないのですが、この後急用ができましたので、これで失礼します」

「ああ、気を付けて帰れよ」

「ありがとうございます……では、佐藤さん、またどこかでお会いしましょう」

僕は佐藤さんに一礼すると、ブースを後にするのであった。

第23話 祭り

「心配しましたよ、兄貴」

「すみません」

来る前に打ち合わせていた合流ポイントでトモさんが待つ車に乗り込んだ僕は、運転をしながら心配そうに話しかけてくるトモさんに謝った。

「セツシヨンをやったらしいですけど、もしや無理矢理……」

「いえいえいえ！ そんなのではなく、お誘いいただいたのでやったんです」

ミラー越しに顔がすぐんでいくのを見た僕は慌てて否定して事情を説明した。

下手するとトモさんが、討ち入りみたいなことをしかねないような雰囲気が出たのだ。

「……そうですか。ならいいんですけど」

何とかいつものトモさんに戻ってくれたので、僕はほっと胸を撫で下ろす。

なんだかんだで忘れていたけど、トモさんも『花咲ヤンキース』のメンバーなのだ。

ちなみに、『花咲ヤンキース』だが、簡単に言えば花咲川を拠点にしている不良グループで、恐れられている人たちなのだ。

リーダー格の団長、情報屋のマツさんを筆頭に何十人のメンバーがいたらしい。

前に絡まれている花音さんを助けたところで目を付けられ、色々と言われたが、どういうわけかグループを解散してからは僕を“兄貴”と呼び、色々困っているときに助けてくれたりするようになった。

そう言った経緯で、今では心強い味方でもあるのだが、時々この人たちの恐ろしさを狭間見る時があるのが何とも言えない。

「にしても、今日はえらくご機嫌のようですけど何かあったんで？」

「ええ。久々にいいミュージシャンと出会いました」

どうやら、顔に出ていたようで、先ほどとは一転して柔らかい口調

で聞いてくるトモさんに、僕もまた静かに答えを返す。

(久しぶりに、あんなに濃い演奏ができた)

それは、佐藤さん達とのセッションだ。

少々乱暴で、せっかちなところが玉に瑕だが、彼女のドラムの一音一音はとても重く、そして僕には心地よくもあった。

普通に叩けるようになって三流、リズム隊としてぶれることのないドラムができるようになって二流、真の一流はどのような曲でも対応することができる、テクを身に着け音数を増やすことだと僕は思っている。

その点で言えば、彼女はもう少し腕を上げれば十分に一流になれる可能性があるのだ。

田中君の場合は、良い感じの音を奏でるので僕もそれに反応して音を返すのだが、今回のセッションはまさにそんな感じだった。

大量に押し寄せる音を、僕はすべて打ち返していく。

言葉にはうまく言えないけれど、僕にとってはそういう演奏が好きなのだ。

お互いの音と音をぶつかり合わせる。

それこそが、僕の求めていた音楽であり、そして啓介たちとの演奏の形なのだ。

(少しだけ、我がままになろう)

『仕事のために音楽をやってんのか?』

佐藤さんが和奏さんに対して言った言葉は、僕の中にあつた一つの迷いを断ち切らせてくれた。

もう僕は悩まない。

何せ、これからは僕は少しだけ我儘な演奏をするのだから。

(それに、あとちよつとでつかめそうだし)

僕の中で課題でもあつた”あること”も、もう少しでその正体をつかめる。

そうすれば、僕は次のステップに進むことができるのだ。

それこそが、このサポートギターを行った理由なのだから。

(もう一度、あの人たちとやりたいな)

流れゆく外の景色を見ながら、僕はそう心の中でつぶやく。
その願いが、叶うことになるということも知らずに。

「兄さん、良い?」

夜、自室でのんびりしているところに、控えめなノックと共に欄の
声が聞こえてきた。

「ん? 良いよ」

僕の返事に、蘭はドアを開けると中に入ってくる。

その表情は何かを決意したような感じがした。

「どうしたの?」

「兄さん、今週末に商店街で開かれるお祭り知ってるよね」

「ああ、あの『すこやかゴーゴー祭り』だよ」

最近、商店街に行くときよくお祭りの告知ポスターを目にするよう
なっていたので、すぐに名前が出てきた。

「あたしたち、そのお祭りでライブをすることになってるんだけど、兄
さんに見てほしい」

「……………」

蘭のまっすぐなその目は、どこか彼女の闘志に火がついているよう
な雰囲気を感じさせる。

「わかった。ただ、ヘルプがあるからいけるかどうかはわからないけ
ど、できる限り善処するよ」

「うん」

僕の返事で満足したのか、蘭はそのまま部屋を後にした。

(蘭のやつ、もしかして…………)

蘭のライブを見に来るように言ってきた今の言動の理由が、僕の中
で一つ導き出された。

だとすると、僕は彼女たちのライブを見に行く義務がある。

だが…………

(時間的にかなり難しいんだけど…………)

お祭り当日は、先週末にレコーディングを行ったバンドでのライブ

のサポートの日だ。

予定時間から、ギリギリ見れるかどうかの感じだが、蘭に言っ
てしまった手前、善処するしかない。

(なんだか、色々と抱え込んでるのは、気のせい?)

自業自得とはいえ、色々と予定が埋まってきているこの現状に、僕
は首を傾げるのであった。

そして、ついに迎えた日曜日。

「よし、行こうか」

時間はお昼ちよつと前。

トモさんと合流するまであと1時間ほど余裕がある。

Afterglowのライブまではあと十数分。

何もかもがちょうどいい感じだ。

(そういえば、今日は夕方から雨の予報もあったし、傘でも持っていこ
うかな)

ギターリストにとって雨の日は最悪と言っても過言ではない、

雨に濡れれば楽器自体へのダメージは避けられないからだ。

そうでなくとも、湿気などでも楽器へのダメージを受けるとい
うの
に。

そんなわけで、傘を持って雨への備えを済ませた僕は、ライブ会
場
でもある商店街に向かうのであった。

(うん、色々とお祭りだね)

まったくもって意味不明なことを考えているが、このお祭り独特の
空気はいくつになっても心が躍るといふものだ。

今日がサポートの仕事の日でなければ、紗夜と来ていただけに非常

に悔やまれるが、お祭りなんて一回だけじゃないのだから、またの機会に取っておくとしよう。

そんな風に思いながら、先ほど北沢さんの所で買ったコロツケを食べながらライブ会場となっている広場に向かう。

(コロツケタイムって一体……)

それはコロツケを渡す時に北沢さんが口にしていた言葉だけど、直訳すればコロツケの時間ということになるが、あの言葉に一体どのような意味があるのだろうか？

しかもその横でなぜか、弦巻さんが玉乗りをしていたりいつものハロハピのライブの雰囲気そのままだった。

(まあ、彼女たちのやることなんて、考えても理解するのは難しそうだし、やめとこ)

多分、日菜さんに聞けばわかる……訳はないな。

おそらくはごちゃ混ぜにされてさらに訳が分からなくなる感じだろう。

そうこうしているうちに、ついにライブ会場に到着した。

すでに席は満席で、立って見るしかなさそうだ。

もつとも、この後に予定がある身としては、それでも十分なのだが。

『Afterglowです!』

これまたタイミングよく蘭達がステージに上がった所で到着したようだ。

そんな時、一瞬蘭と目が合ったような気がした。

「ん?」

その時、蘭からなんとなく『ちゃんと聞いてて』というような言葉を言われたような気がした。

『まずは――』

蘭が曲名を告げようとした時、ふと顔に冷たい物が触れたような気がした。

それは横からというよりも、空からだった。

(まさかッ!)

その正体が雨であることにいち早く気づいた僕は、慌てて傘を広げ

る。

それとほぼ同時に、それは勢いを増していき、ついに本降りになった。

雨が降り出したことで、観客たちも次々とその場を走り去って行き、瞬く間に誰もいなくなつた。

(これは中止か、延期かな)

この雨の様子だと、前者になる可能性がかなり高い。

仮に延期になつても、こちらの予定の時間が変わることはない。

つまりは、A f t e r g l o wのライブを入れる可能性はなくなつたに等しいということだつた。

(蘭、すまない)

僕は心の中で蘭に謝罪の言葉を言うと、会場を後にして、トモさんとの待ち合わせ場所に向かうのであつた。

第24話 YOLO

「では、いつもの場所で」

「はい。お願いします」

目的地でもある『ライブハウスKIKUZU』までトモさんに送ってもらった僕は、降りしきる雨の中、傘を差して中に入っていく。

(ものすごく視線を感じるけど、もう慣れた)

雨の中黒装束に身を包んで傘をさす人間など、間違いなく異様に見えるはずだ。

下手すると青い制服を着た方々のご厄介になることだってあり得る。

……今まではないけど。

ライブハウス内に入り、集合場所のロビーに向かうと、先週知り合った二人の姿があった。

「少しくらい自由にやっても罰は当たらないでしょ」

ちょうどその場を後にするところだったらしく、去り際に佐藤さんに言った言葉は、どこか決意表明のようにも思えた。

「お、また一緒になったな」

「縁でもあるかもしれないですね。今日はよろしくお願いします」

そんな時、僕の姿を見つけたのか、佐藤さんが話しかけてきたので、相槌を打ちつつも挨拶をした。

「ああ、お互い頑張ろうぜ」

佐藤さんの不敵な笑みを見ていたら、僕もつられて口元を緩ませていた。

(今日は、いつも以上に良いライブができそうだ)

それは、予感でも何でもなく、僕にとっては確定した未来のようなものであった。

そして、ついにライブが始まった。

このバンドはカバーバンド。

つまり、カバー楽曲の演奏を主に行うバンドだ。

カバー曲のアレンジも中々上手く、そこそこの名が知れたグループでもあるのだ。

その中で、ライブを行う僕たちは、観客からの歓声や勢いを受けつつも演奏を続ける。

(このボーカル、全然音程が取れてない。こんなだったら、丸山さんのほうが数倍もうまくできるぞ)

相変わらず不満は際限なく出てくる。

今演奏しているのが、僕たち Moonlight Glory の楽曲だからなおさらだ。

いつもであれば、ストレスがたまるだけのライブになっているはずだ。

でも、今日のライブはいつもとは違う。

(お、佐藤さんからのパスだ。ならば、これで！)

凄腕のドラマーがいるのだから。

僕は佐藤さんが放った音に自分のギターの音をのせて彼女に返していく。

そうすると再び佐藤さんから音が返ってくるのだ。

(おー、今度はベースもだ！)

そこに和奏さんのベースが加わった。

それは本当の意味で先週のセッションの再現だった。

佐藤さんのドラムの打音に対抗するように、和奏さんのベースの音がりそれらを僕のギターの音が彩っていき、会場中に向けて放出する。

ものすごく大雑把だが、僕たちがやっている演奏はそんな感じだった。

僕のやっている演奏スタイルである『そのバンドの音に溶け込んでいく(擬態する)』とは思いつきりかけ離れた演奏スタイルではあるが、そんな設定は今の僕にとってはどうでもいいことだった、

(だって、こんなに楽しいんだもん！)

佐藤さんの演奏スタイルが、田中君と同じだからか、僕には今日の

ライブはとても楽しく感じられたのだ。

それに、観客の受けもいい。

ならば、このまま最後まで駆け抜けていくまでだ。

こうして、僕は最後まで演奏を楽しんでライブを終えるのであった。

「お前、マジですげえじゃん」

「本当です。和奏さんのベース、とても痺れました」

「あなた達こそ、すごかったよ」

ライブも終わり、ライブハウス前でお互いの演奏をたたえ合う。

いつの間にか降っていた雨はすっかりやんでおり、きれいな夕焼けがそこにはあった。

和奏さんも佐藤さんも笑顔だった。

もちろん、僕も。

「今日は楽しかったぜ！ またな」

「はい、ぜひ」

「ええ」

そして、僕たちはバラバラになってその場を去って行く。

(ずっと演奏をしていたと思ったのは、いつ以来だろう)

ムングロや Roselia 等に次いで、このような気持ちを抱いたのは、本当に久しぶりだった。

それでも、出会いもあれば別れもある。

また一緒に組めるかどうかはわからない。

でも、それがこのサポートギターの良さなのかもしれない。

「お疲れ様です。さあ、どうぞ」

「いつもすみません」

そんな感想を抱きながらも、僕はトモさんの運転する車に乗り込むと帰路につくのであった。

「本当に、ここにいいんですか？」

「はい。ちよつと寄りたいたいところがあるので」

僕が車から降りた場所は、商店街の入り口だった。

お祭りのライブは、おそらくは中止になったのだろうが、この目で確かめておこうと思い、急遽ここで降ろしてもらおうようお願いしたのだ。

(さて、行くか)

トモさんの車を見送った僕は、商店街へと足を踏み入れた時だった。

『ただいまから、ステージでラブを……ライブをやります。皆さん見に来てよねー』

(あ……)

まるで待つてましたと言わんばかりのタイミングで、アナウンスが聞こえてきた。

僕は足早にステージ会場へと向かっていった。

会場の席は先ほどとは違い空気が多かったが、僕は立って見ることにした。

「あれ、一樹君じゃん」

「ん？」

そんな時、よく知っている人物の声が聞こえてきたので、声のしたほうを見ると、隣にリサさんの姿があった。

「リサさん、このライブを見に？」

「まあ、そんなところかな。本当は、たまたま通りかかっただけなんだけどね」

そう言つて頬を掻きながら苦笑しているリサさんは、僕のほう……というよりは、少し先にいる誰かを見つけたようで手を振り出した。

「友希那——！ こつちこつち」

「……そんなに大きな声を出さなくてもわかってるわ、リサ」

大きな声で呼ばれた湊さんが、少しだけ恥ずかしそうにしながら注意する姿は、なんだか意外だった。

「あら、美竹君もいたのね」

「まあね」

そんなこんな話していると、なんだかよく見知った人物の後姿を見つけたような気がするが、とりあえずは演奏に集中しよう。

そう思つて、僕はステージに姿を現した蘭達Afterglowのライブ見ることにした。

始まったのは、少し前にPastel*Palette用に蘭達が作曲して提供した楽曲でもある『Y・O・L・O!!!』だった。

疾走感あふれるこの曲は、蘭達が丸山さん達からパスパレのこれまでの軌跡を聞いて、作り上げたものだ。

一般的にはPastel*Paletteの楽曲とされているが、Afterglowの楽曲として演奏ができるようにしてほしいという僕のお願いが聞き入れられ緋は知らないが、Pastel*Paletteの楽曲でもありAfterglowの楽曲でもあるという扱いにされ、蘭達が好きな時に演奏ができるようになったという背景がある。

そんなこの曲だが、パスパレが演奏するのとAfterglowが演奏するのでは全く異なり、パスパレの場合は、どこか芯のようなものがあるようにも感じさせる応援ソング的な意味合いを持ち、Afterglowの場合だと、応援ソングという一面に加えてすさまじい熱量も加わる特徴がある。

パスパレの『Y・O・L・O!!!』もいいが、彼女たちが演奏するこれも、十分に素晴らしいの一言に尽きる。

疾走感のある曲調に、蘭の力強い歌声は相性抜群であり、この曲の熱量をさらに増幅していく。

(流石だ。また腕を上げたな、蘭)

僕は心の中で、蘭に声をかけるのであった。

『最後に、Poppin, Partyから一つお知らせさせてください』

彼女たちの後にステージに上がった戸山さん達Poppin, P

artyの演奏も無事に終わり、盛大な盛り上がりを見せる中、戸山さんが口を開いた。

『Poppin, Partyの主催ライブは、この商店街にあるライブハウス『galaxy』でやります!』

それは、先月のgalaxyのリニューアルライブで告知していた主催ライブの情報だった。

(ついに、箱は見つけたか……)

色々課題があったはずだが、彼女たちなりに、答えを出してこの告知だろう。

ライブを行う場所を抑えれたとはいえ、道のりはまだまだ遠いが、それでも大きな一歩だ。

(頑張れ、Poppin, Party)

僕は心の中でエールを送るのであった。

第25話 出された答え

「兄さん、良い?」

「どうぞー」

その日の夜、蘭が僕の部屋を訪れてきた。

「今日の演奏、どうだった?」

「いつも通り、素晴らしい演奏だたよ。とても熱かった」

僕は思っていることをそのまま蘭に話す。

それは、一切お世辞などない僕の本心だ。

「それじゃ、この間の話はどう?」

「やっぱり、それか」

蘭の問いかけに、僕は深いため息交じりに返した。

それは、去年の12月に、蘭から言われた言葉から始まった。

『AfterglowとMoonlight Gloryで合同ライブ?』

『どう?』

あの時も、夜に部屋を訪ねてきていきなり提案してきたのが、それだった。

簡単に言えば、Roseliaとの合同ライブと同じ感じのライブをやりたいという申し出だった。

その時僕は

『却下』

と、問答無用で切り捨てた。

『ッ! どうして……』

『あなた達の演奏が、僕達のライブに出るレベルではないから』

遠まわしに言っても、伝わらないだろうと思いい、直球で理由を言った僕を、蘭は鋭い目で睨みつけてきた。

その目は、怒りに染まっていた。

『……じゃあ、演奏がうまくなれば良いって言うこと?』

『まあ、そうだね』

『わかった、絶対にうまくなって、兄さんと同じステージに立って見せる！』

あのときは、それで話は終わった。

(確かに、前よりうまくはなっているけど)

全員の演奏は、あの時よりも確実にうまくなっている。

それは確かだ。

でも、それだけではまだ十分ではない。

「二ついい？ どうしてそんなに僕のライブに出たいんだ？」

「そ、それは……」

僕の疑問に、蘭は視線を下に落とすと言葉を詰まらせる。

「……………まずはそこから、だね」

「……………」

僕の突き放した言い方に、蘭は何も答えずに部屋を出て行った。

(……………どうしたものか)

蘭が去って行ったドアを見ながら、僕は心の中でつぶやくと考えるんだ。

別にやりたくないというわけではない。

機会があればやりたいのが本音だ。

とはいえ、それができない事情があるのもまた事実。

それを説明すればいいのだが、気を付けないと、Afterglow内がおかしなことにもなりかねない。

(様子を見て、必要だったら説明するか)

この一件がきっかけで、悪影響を及ぼすのであれば説明するという方向で、僕は一応決着をつけた。

それからしばらく経った5月27日の夜、僕はこの日行われている大きなイベント『World Idol Festival vol. 1. 4』のライブ会場を訪れていた。

目的はもちろん、Pastel*Palettesの演奏を聴きた

めだ。

「ごめんね、わざわざ付き合ってもらあって」

「いえ。私もちようど気にしてたから」

ダメもとで紗夜を誘ってみたのだが、意外なことにあっさりとオーケーを出してくれた紗夜は、そう言っつてステージのほうに顔を向ける。

(紗夜も紗夜で、姉なんだな)

去年の今ぐらいの時から見れば、色々感慨深かった。

「な、何？」

「いや、別に何も」

じつと見ていたのがばれたようで、頬を赤くしながら聞く紗夜に僕は誤魔化しながらステージのほうを見る。

(お、出てきた……お手並み拝見というか)

観客たちの歓声を浴びながらステージに上がる彼女たちのライブに、僕は神経を集中させる。

そして始まった彼女たちのライブは、順調に進んでいき、MCで丸山さんが囁むのも含めればいつも通りのことだろう。

『次が最後の曲です。聞いてください。』 ゆら・ゆら Ring—Dancing—Dance 』

イントロの部分は問題なかった。

丸山さんのボーカルが入り、そこに白鷺さんの歌声も加わる。

(うん、良いな感じ)

出だしの部分だけで言えば、これまでとは違い一体感のようなものを感じ取れる。

この曲のポイントは、白鷺さんがどれだけ丸山さんと息を合わせられるのかだ。

ステージの上というのは、稀にメンバー同士が言葉を交わしていないにもかかわらず、まるで何を言っているのかが理解できるような、意思の疎通ができることがある不思議な場所なのだ。

それも、良くあるというわけではなく、何らかの条件を満たさなければ起こらないものなのだ。

そして、その発生条件は僕なりの解釈ではあるが導き出せている。それこそが、“お互いを信じあう気持ち”なのだ。

メンバー同士がお互いに信じ合った時こそ、その現象を起こすカギを手にすることができる。

僕は、この曲を通じてそれを手にしてほしかったのだ。

(問題はサビの部分か)

曲が一番盛り上がる箇所であるサビの部分でこそ、その真価が問われる。

もし、会得できていなければここでバラバラになる。

それがいつものパターンだった。

そして、ついにサビに突入した。

(おお……さらに一体感を増したぞ！)

サビに入った瞬間、彼女たちの演奏が一つになって僕たちのほうに届いてきた。

それは、観客たちのボルテージも一気に上がっているのを見れば明らかだ。

僕も柄にもなくノッていた。

(彼女達は、進化したんだ……)

気が付けば、僕は口元が緩んでいた。

きっと僕は笑みを浮かべているのかもしれない。

背中合わせになって歌う二人の姿は、おそらく今までのステージよりも輝いて見えた。

そして、演奏が終わり観客たちからあふれんばかりの歓声と拍手が起る。

『以上、Pastel*Palettesでした!!』

こうして、彼女たちのライブは無事に幕を閉じるのであった。

ライブが終わり、関係者しか立ち入りができないエリアに紗夜と一緒に入ってから、紗夜はどこか落ち着きがない。

「本当に、ここに入っているの?」

「うん。というよりこごじやないと変な騒動にも発展するから」

本来であれば、ぎりぎり部外者になつてしまふ紗夜だが、外のエリアで待つていてもらうと日菜さんと勘違いした人や、日菜さんの姉であることを知っている人たちなどで、その場がパニックになることも考えられる。

そんな危険がある場所に彼女を一人にさせておくわけにもいかなかったので、イベントの運営の人にそのことを説明して立ち入りを認めてもらったのだ。

そんな僕たちが向かうのは、パスペレの控室兼楽屋だった。

『はーいー!』

「うわ!?!」

「きやつ」

ノックをすると、中から日菜さんの声が返つてきたのとはほぼ同時に楽屋のドアが開かれたため、僕たちは慌てて後ろに飛びのいてこちらに向かって開いたドアを回避した。

「あれ? 一君に、おねーちゃんだ! 見に来てくれたんだ!」

僕と紗夜の姿を見つけた日菜さんは目をキラキラと輝かせて、はしゃいでいた。

そんな日菜さんの姿に、僕と紗夜は顔を見合わせると苦笑しあう。

日菜さんたちの姿はまだステージ衣装で、着替えている最中ではなさそうだった。

(強制的なラッキー何とかにならなくてよかった)

前に啓介が言っていた単語だったが、興味がないので記憶にもないが、とりあえず着替え中の彼女たちと鉢合わせにならなくてよかったと、胸をなでおろした。

「日菜、騒がしいわよ。それにドアを思いっきり開けるのはやめなさいと前に言つたはずよ」

「だってー」

「……一体何の用?」

苦笑したのちに表情を引き締めた紗夜に怒られて、頬を膨らませる日菜さんたちの姿に、白鷺さんは一瞬目を向けるが、すぐに何もな

かったようにこちらに向けると用件を尋ねてきた。

とりあえず、僕も現在進行形で怒られている日菜さんは放つておいて、用件を言うことにした。

「今日のライブ、見させて貰った」

「感想は？」

白鷺さんの問いかけに、楽屋内が静寂に包まれる。

日菜さん達ですら黙り込んで僕のほうを見ている。

「とても素晴らしいライブだった。文句のつけようもない……合格だ」

「いやったあー！ やったよ！ 千聖ちゃん！」

僕の勘そうに、最初に喜びの声を上げたのは丸山さんだった。

「あ、彩ちゃん嬉しいのは分かったから、抱きつかないで」

口では厳しく注意しているが、その表情は微笑んでいるように見えた。

「マヤさん！ やりましたー！」

「はい！ すごいです！ ふへへ」

大和さん達も喜びをあらわにしている。

「ぞ、そこまで喜ぶんだ……」

「だって、ずーっつと一君からOK出なかったんだもん」

あまりの喜びのように、若干引き気味に言う僕に返ってきたのは、日菜さんからの嫌味だった。

「これが、あの曲に関する著作権関連の書類だから、ちゃんとスタッフの人に渡しておいて」

「ええ。確かに、預かったわ」

それから逃げるように、僕は白鷺さんに楽曲の著作権をPastel*Palettesに移すことへの同意書などが入った封筒を手渡す。

これで、彼女たちはあの曲を発売させることができるようになるのだ。

尤も、もう一度収録をし直すことを条件にしているけど。

こうして、長い間にわたって続いた一つの問題は、無事に解決する

のであった。

第5章、完。

第6章 『合同文化祭く計画編く』 第26話 合同文化祭計画

『World Idol Festival』から一夜明けたこの日。
講堂に全校生徒が集められていた。

それは、月に一度行われる集会であり、校長先生からのありがたい^長話を聞いたりする場でもあるのだ。

そして、その集会はいつものように静かな感じで進んでいた。

『それでは、続いて生徒会からのお知らせです』

そう、この時までには。

『みんなー！ 花女と合同文化祭、やりたいかー!?!』

壇上上がった日菜さんのその言葉に、講堂中が歓声に包まれる。
それは、彼女の問いかけに対してYESと応えている物であった。

B a n g D r e a m ! く隣を歩む者く 第6章 『合同文化

祭』

いきなりだが、羽丘の集会は例年とは違うことがある。

それはズバリ、順番だ。

これまでは校長先生の話の前に生徒会からのお知らせがあった。

だが、今年はそれが一番最後に変更されている。

それは生徒会長のスピーチの後は、自分たちの話を全く聞いてもらえなくなるといふ問題点に対する対応策によるものだったが、生徒会長のために流れを変更するというのは羽丘学園始まって以来の事態だというのは、つい最近聞いた理事長のお言葉だった。

「さてと」

「あれ、一樹君どこに行くの？ お昼は？」

昼休みになったタイミングで席を立った僕に、いつの間に来ていたのかりサさんがきよとんとした様子で聞いてきた。

「ちよつと暴走生徒会長のところに」

「あ、あはは……気を付けてね」

僕の様子にただならぬものを感じたのか、引きつった表情を浮かべたりサさんはそう言っ僕を送り出した。

「失礼」

そして、僕が向かったのは生徒会室だ。

「あれ？　一樹先輩。どうかされたんですか？」

生徒会室に入ると、そこにいたのはつぐだけで、目的の人物の姿が見えなかった。

「うん、ちよつと生徒会長に用があつてきたんだけど……どこに行つた？」

「私もさつき来たばかりなので……すみません」

「あ、いや……こつちこそごめん」

申し訳なさそうに目を伏せて謝るつぐに、僕ははつとして慌てて謝った。

ちよつとばかり冷静さに欠けていたようだ……これは反省しなければ。

(にしても、一体どこに行つたんだ?)

日菜さんは、昼休みになるとよくここに来ているだけに、ここにいないとなると彼女の居場所で心当たりがある場所はないに等しい。

一応部室も行ってみたが、彼女の姿はなかった。

「……なんだか、嫌な予感が」

朝の集会のこともある。

気が付けば、僕はある人物に電話をかけていた。

出来れば、この予感が外れてほしいという願いの元、なり続けるコール音を聞いていた。

『どうしたんですか？　一樹君』

コール音が途切れ、電話の相手……紗夜は、不思議そうな声色で僕に用件を聞いてきた。

「紗夜……日菜さん来てる？」

『……ええ。今、生徒会室にいるわ』

どうやら、僕の予感は的中してしまつたらしい。

僕はすぐに向かうことを紗夜に告げると、電話を切ってその場を後にするのであった。

「すみません、ありがとうございます」

できる限り急いで向かった場所は、紗夜たちが通う花咲川女子学園……通称、花女だ。

その受付で、校内に入る許可をもらった僕は、生徒会室へと向かっていく。

もちろん、歩いてだけだ。

(ここに来たのも一年くらい前なのに、昨日のことのように感じるな) 去年の交換留学で、ここに通った僕が紗夜の力を借りて難事件を解決したのはいい思い出だ。

今思えば、あれが僕と紗夜が付き合うきっかけだったのかもしれない。

「失礼します」

そんなことを考えながらも、生徒会室前までたどり着いた僕は、ドアを数回ノックして、一言断ってからドアを開けて中に入った。

生徒会室内は、風紀委員長の紗夜に生徒会長の白金さんをはじめとして、書記の市ヶ谷さんに羽丘の生徒会長の日菜さんの姿もあった。

「あ、一君！ どうしたの？」

「どうしたの？ じゃないよ。日菜さん滅茶苦茶すぎ」

白金さんと紗夜さんの向かい側に腰かけているお気楽な日菜さんを見ていたら、そんな言葉が出てきた。

「朝の集会で話をして、昼休みに直接交渉しようとする行動力はすごいと思うけど、まだこっちのほうで話がまとまってないのに、いきなり相手のほうに打診をするのは違うから。日菜さんのことだから、どうせアポも取ってないでしょ」

そして出てくるのはお小言のみだった。

しかも、アポを取ってないという僕の言葉に、紗夜も頷いてるし。

「本当に生徒会長が申し訳ない」

「い、いえ……私は、大丈夫です」

「わ、私もです！」

とりあえず、白金さんと市ヶ谷さん達に謝罪をしつつ、日菜さんの横に腰かける。

「あの、合同文化祭っていったい何を？」

「えーっと、同じ日に文化祭をやって……合同で出し物をしたらお客さんもどっちにも行けてビュンっ、るるるんっ♪でしょ？」

「びゅん？ るるるん？」

内容を聞いた市ヶ谷さんに答える日菜さんの、擬音に僕たちは困惑するしかなかった。

なんとなくではあるが、何を言いたいのかはわかるけど。

「市ヶ谷さん美竹君、耳を貸さなくてもいいわよ」

「ううー……ねえ、燐子ちゃんはどう!？」

呆れた様子の紗夜の言葉に、恨めしそうな声で唸っていた日菜さんは、聞く相手を白金さんに変えた。

「え!?! わ、私?!」

「……生徒会長である白金さんが決めてください」

白金さんの意見を求める視線にも、紗夜は両腕を組んだままの紗夜の心境は、おそらくあきらめにも近いものだと思う。

結局、白金さんがこの場では結論を出すことはできなかつたため、また後日連絡を入れることで話はまとまった。

気が付けば昼休みも終わりかけている時間帯だったため、急いで羽丘に戻ることにした僕は、電車にのって一息ついたところで、日菜さんに今後の予定を話すことにした、

「先方からの返事が来るまで、こっちはこっちでやるべきことをやるよ。まずは先生方との打ち合わせから」

「……それってあたしじゃないとだめ？」

面倒そうだといわんばかりの日菜さんの様子に、僕は無言で頷いた。

日菜さんの気持ちもわかる。

入学式でのスピーチの一件などで、日菜さんは教師たちからあまり

いい目で見られてはいない。

今回の一件もまた然り。

なので、話し合いなどはかなり難航するのが予想される。

それでも生徒からの受けが、かなりいいのが幸いというべきか皮肉
というべきか。

「二君——「今日は家の用事があるから無理」——うう〜」

日菜さんが何を言おうとするのかが手に取るようにわかった僕は、
日菜さんのお願いを聞くこともなく切り捨てた。

今日は華道の集まりがあるのだ。

今日行ってしまうば、文化祭が終わるまでは集まりもないので、文
化祭のほうに専念することができる。

「じゃあつぐちゃんにお願いしよう」

「……あまり、つぐに負担かけないでね」

今度、つぐの負担を減らすにはどうすればいいかを A f t e r g l
o w の人たちと一緒に考えたほうがいいかなと思った瞬間だった。

「それじゃ、また明日」

「ええ」

放課後、僕は湊さんに別れの言葉を告げると、そのまま教室を後に
して自宅に帰った。

「ただいま」

「おかえり。集まりがあるのは覚えているようだね」

「うん。これから着替えるところ」

家に入って出迎えてきた義父さんにそう言っつて、僕は自室に戻ると
制服を脱いでハンガーにかけておく。

そして、この日の朝に用意していた着物に身を包む。

(着物を着るのも、手慣れてきたな)

最初のころは、中々着れなくて義父さんにサポートしてもらっつてい
たのが懐かしく感じる。

あれからはや三年。

時間など過ぎてしまえばあつという間だった。

「よしっ！ これで準備はできた」

着物を着ることができた僕は、集まりに必要なものをひとしきりバックに入れると、自室を後にする。

「行ってきます」

「ああ、気をつけてな」

こうして、僕は義父さんに見送られるようにして、家を後にした。

「あれ？ 電話だ」

家を出て少し歩いたところで、僕のもとに一本の電話がかかってきた。

携帯をバックから取り出して相手を確認すると、相手はライブハウスのCiRCLEだった。

(サポートの連絡かな?)

とりあえず、出ないのもあれなので、僕は電話に出ると受話口を耳にあてる。

「はい、美竹です」

『いきなりごめんね。今、時間大丈夫?』

「ええ、まあ……何かあったんですか?」

よく聞くと、電話先のほうから女性の物と思われる声が聞こえてくる。

何を言っているのかはわからないが、まりなさんの口調も相まってただならぬ事態が発生しているのは十分伝わってくる。

『カメレオンを呼んで欲しいと言っている子が来てるんだけど……』

まりなさんから事の経緯を聞いた僕は、すぐに向かうと告げると電話を切って、行き先をCiRCLEに変えるのであった。

第27話 スカウト

(とりあえず、サングラスくらいしかないと、いつか)

C i R C L E付近まで来た僕は、変装に使えそうなものとして、紛れ込んでしまったのかサングラスをバックから取り出すとそれを装着した。

(にしても、僕に用がある人って何者なんだろう?)

月島さんいわく、いきなりC i R C L Eを訪ねてきたその人物は、『カメレオンを呼んで欲しい』と言ってきたそうだ。

当然、いきなりの訪問ということと、そういった類のものには応じないように打ち合わせをしており、“できない”旨を相手に伝えたのだが、相手は呼んでほしいの一点張りでなかなか帰ろうとしなかったらしい。

普通の人からすれば、知ったこっちゃない話ではあるが、C i R C L Eには普段から色々とお世話になっているし、今回のサポートの件も月島さん含めC i R C L Eの人たちには 色々と協力してもらっている。

僕からすれば、関係ないでは済まないのだ。

(行くか)

意を決して中に入ると、受付で困り果てたような表情をしている月島さんの姿が目にとまった。

そんな彼女は、僕の姿を見つけると、ぱあっと表情を明るくさせた。

「あ、カメレオンさんっ」

「ご無沙汰してます」

とりあえず、月島さんに挨拶をしてこの場に居座っているであろう人物のほうに視線を向ける。

(この子……まさか)

後ろ姿だったが、茶髪の髪といいその首にかけられている独特な形のヘッドホンといい、見覚えがありまくりだった。

そう、R o s e l i aをぶつ潰すと公言していた、チュチュという名の少女だった。

「あなたが、“カメレオン”ね？」

「ええ。私がカメレオンです……えっと」

(名前を言ってもいいのだろうか?)

僕は彼女とは初対面。

それなのに名前を知っているというのはいささか不自然だ。

なぜここに彼女が来たのかの理由が不明なこの時点では、そのような言動は慎むべきだろう。

そう言う結論に至った僕は、一瞬名前を言おうとしたのをやめて口を閉ざした。

「失礼、申し遅れました。私、プロデューサーのチュチュと申します」

「これは……丁寧にどうも」

僕の無言を、良いように解釈してくれた彼女は、名前を名乗ると名刺を手渡してくる。

その名刺は、前に湊さんに見せてもらったのと同じものだ。

「カメレオン。あなたのギター力を見込んで、あなたをスカウトしに来たわ」

「……スカウト？」

一体何の用かと思った僕は、予想外のそれに一瞬固まってしまった。

「……立ち話もあれだ……向こうに移動でもしないか？」

「オーケー」

カメレオンとしてのキャラを作って彼女をロビーに置かれたソファアールへと誘導する。

これで月島さんには迷惑は掛からないだろう。

「さて、スカウトといったが、本気かい？」

「オフコース！ この間、あなたが出演したライブを拝見しました。その時に私はあなたのギター力に心が震えたのです。あなたの奏でる音一つ一つが、ヴィジョンとなって私の頭の中に入ってきました」

「それは、光栄だ」

(さて、どうするか)

このタイミングでのスカウト。

相手はRoseliaに対して危害を加える可能性のある人物だ。そんな彼女の懐に入る大チャンスでもある。バンド内に入れば、彼女の動向も把握できるので、先回りして対策を講じることだって可能だ。

おまけに、チュチュに対してカウンター攻撃をするための準備や細工もし放題になるのだ。

だが、少々都合が良すぎるのもある。

これ自体が罠で、ひよいひよい乗っつてしまえば窮地に陥る可能性だって捨てきれない。

(それに、ここで二つ返事で領いたら不自然だしな……)

となれば、僕がとるアクションは一つしかない。

「失礼だが、私は君の名前を聞いた覚えもない。実績のない人のスカウトを受けるわけにはいかないな」

一度否定的な意見を口にするという物しかない。

そんな僕の言葉に、少女は起こるわけでもなく、すつと音楽プレイヤーを差し出す。

「聴けばわかる」

「失礼」

彼女から音楽プレイヤーを受け取った僕は、集まりに向かう道中、電車の中などで音楽を聞くためにと持ち歩いていたイヤホンのプラグを差し込んで、耳に装着すると再生した。

(ツ!?)

その瞬間、僕はまるで雷に打たれたような衝撃を受ける。

流れてきた曲は荒々しい乱暴な曲調であり、それと同時に力強い何かを感じさせるものだった。

それは、僕の好きな曲調でもあった。

(すごい……文句のつけようもない曲だ……)

見た目で判断するのは失礼ではあるが、それでも目の前の少女がこの曲を作り上げたというのはにわかには信じられない。

(いや、これは紛れもなく彼女の曲だ)

目の前の少女の目を見ていればわかる。

この曲が醸し出す雰囲気と少女が同じオーラをまとっているということに。

「素晴らしい……陳腐な言葉だが、これ以上の言葉を私は知らない。久々に痺れる曲を聴いた」

「サンクス。あなたのギターで、この曲をさらに最強の曲にしてみる気はないかしら」

そう言っただけ少女は僕に手を差し伸べる。

「……もちろんだ」

もはや目論見とは関係なく、僕はその手を取った。

それは、彼女のバンドに入ることを意味するものだった。

僕は、純粹にこの曲をやりたいと思ったのだ。

何より、僕のことをあそこまで高く評価してくれている彼女のそれを蹴るとするのは、僕にはできなかつた。

「それじゃ、あなたのギター力を一度見せてもらおうわ。この後時間はあるかしら？」

「申し訳ないが、今日は立て込んでいてね……明後日のこの時間なら時間が取れるんだが」

明日はおそらく、生徒会活動のほうで忙しくなるはずだ。

そう考えると、明後日の放課後のほうがこちらにとっては都合がいい。

「オーケー。それじゃ、その場所に来て頂戴。あなたが私の見込み通りであることを祈ってるわ」

話は終わりと云わんばかりに、すつと席を立ったチュチュは、そのまますたすたとC i R C L Eを後にしていった。

「ありがとう、助かったよ」

「いえ、こちらこそ面倒かけました」

彼女が出ていくのを見計らって、月島さんがほっとした表情を浮かべながら話しかけてきたので、僕は迷惑をかけたことを謝る。

「ううん、気にしないでいいよ。おかげでここのお客さんも増えてきたし」

そうは言うものの、月島さんの表情はどこか疲れているような感じ

だった。

(やっぱり負担は相当かけてるみたい……でも)

じゃあ、どうするのかと聞かれれば皆無にも等しい。

それこそ、僕がサポートを引退するくらいしかない。

「それじゃ、私はこれで」

申し訳なさを感じつつも、僕は集まりに出るべくCIRCLEを後にするのであった。

(これ、ちよつと急がないとやばいかな)

チュチュとの話し込んでいたこともあり、走らないと間に合わないような感じになっていたため、僕は走って向かうのであった。

白金さんから合同文化祭を行いたいという連絡がきたのは、その日の夜の事だった。

……日菜さん経由だったので、日菜さんの嬉しい気持ちはちゃんと伝わってきた。

(とはいえ、擬音だらけなのは、考え物だけどね)

三年ほど日菜さんとメッセージのやり取りをしていれば、さすがに慣れてくる。

最初のころは何を伝えたいのかわからずに困惑していたが、今では日菜さんが何を伝えたいのかがなんとなくわかるようになってきたので、そんなに困惑しない。

尤も、的中率は五割ほどだけど。

こうして、明日から文化祭に向けての準備が忙しくなることを確信しながら僕は眠りに就くのであった。

第28話 男のロマン

合同文化祭の案件を花女側が承諾したことにより、今年文化祭は二校での同時開催となった。

「では、説明いたします」

確定してから二日目の教室で、僕はクラスの人たちの視線がこちらに向けられる中、黒板の前に立って今年文化祭の件を説明することになった。

本来であれば、先生がするはずなのだが先生がめんどうくさ——僕のほうが適任だと判断したため、生徒会に所属している僕が説明を行うことになったのだ。

(間違はなく面倒に思っただけだろうけど、考えないでおこう) 知らぬが仏というやつだ。

「今年文化祭では両校が同日程で文化祭を始めます。共同の出し物として一日目を花咲川女子学園で。二日目をここ、羽丘学園にて実施します。出し物に関しては——」

僕が説明するのは、例年開催されている文化祭との違う点についてだ。

二校合同の出し物は一日目と二日目で開催する場所は異なる。

参加資格を有するのは部活動もしくは、生徒会が承認する集まりであるかの二つだ。

無論、花女及び羽丘の生徒であるという前提条件はあるけど。

現時点では、日程については協議中だが、申請の様子を見て文科系だったり運動系等のジャンルとかで一括りにするのが無難だろうというのが、先日開かれた花女と羽丘による文化祭会議の結論だ。

「以上が今年文化祭についての説明です」

「美竹君ありがとう。では、このクラスの出し物を決めようか」

僕の説明が終わると同時に先生が黒板の前に立ち、話を進めていく。

とは言っても、文化祭実行委員の人を呼ぶだけだけど。

こうして、いつも通りクラスの出し物を決める話し合いが開かれる

のであった。

「では、出し物について意見がある人はいますか？」

「……………」

(うわ、めっちゃ見られてるんだけど)

この出し物を決める方法は、オーソドックスなもので、クラス内から出た出し物を書きだしていき、それを多数決で決めるというものだ。

そんな出し物決めの前に、隣の席の湊さんからある頼みごとをされていた。

(何で僕が、『猫カフェ』の案を出さないといけないんだ……)

『美竹君。あなたに、折り入って頼みがあるわ』

真剣な面持ちで話しかけてきた湊さんが、口にしたのがクラスの出し物で猫カフェの案を出してほしいというものだった。

恥ずかしそうに顔を赤らめてのその頼みごとに、頷いてしまったのだが、よくよく考えてみればそれが誤りであるのは間違いない。

(こんなところに動物を入れられるわけないし)

湊さん的には一般的な猫と触れ合える『猫カフェ』のつもりだろうが、ああいうところは飲食店である以上かなり規制などが厳しかったはずだ。

飲食系の出し物をする場合、保健所に届けを出す必要がある。

その際に保健所から指導を受け、食中毒などのリスクを下げるように対策を講じていくことになる。

もちろん、法律で定められていることではないので、必ずやらなければいけないというものではないが、飲食系の出し物をやるにあたって注意する点を教えてもらえる点からすれば、出しておいて損はない。

それはともかく。

いくら何でも動物を教室内に入れるというのは非現実的だし、生徒会のほうでストップがかかる。

というか、僕がかかる。

(いつそのこと、皆に猫耳をつけさせるか)

そうすれば、一般的な喫茶店のレベルになるので、問題はなくなる。とはいえ、それを湊さんが認める可能性は低い。

しかも、猫耳をつけて……なんてことを言おうものなら女子から反対続出間違いない。

下手すると風紀委員活動にも支障をきたす可能性だつて考えられる。

（誰かがやばめな喫茶店の案でも出してくれれば、なんとか行けるんだけど）

「はいっ！」

そんなことを考えていると、一人の男子が自信満々に手を上げた。

「俺は、コスプレ喫茶を提案しますっ!!!」

大きな声で言い切った啓介のそれは、まさに僕が望んでいた展開をさせるものだった。

「何よそれっ」

「この変態!」

「つケ! これだから男子は」

「待て待て。コスプレと聞くからそう思うんだ」

たちまち起こる女子たちからの抗議に、啓介は席を立つとみんなを落ち着かせるようにジェスチャーを交えながら口を開いた。

（というより、男子全員が啓介みたいな思考だと思わないでほしい）

口にするのと巻き込まれるので、僕は心の中でそう呟いた。

「いいか? コスプレというのはいわば男のロマンだ! それに今の自分から別の自分に変わるといふ物なんだ! それは新しい自分の発見でもあり! 将来の役に立つこと間違いなし! しかも、来た人は皆がハッピーになるといふ両者にとってメリットしかない物じゃないか!! さあ、コスプレしてもう一人の自分をさらけ出そうではないか!! 具体的には 着るのはエプロンのみの、は———」

『ふざけんな、この変態!!』

啓介が具体的なコスプレ姿を口にしようとした瞬間、ついに女子たちの我慢の限界を迎えたようで、罵詈雑言の嵐が沸き上がった。

「うわー、滅茶苦茶だね」

「……自業自得」

そんな状況の中、席を立って僕たちのところまで来たりサさんに、僕はそう切り捨てた。

「一樹君は、フオローしなくていいの？」

「いや、どう見ても無理でしょ」

首を傾げて聞いてくるリサさんに、僕は教室内を見渡しながら答える。

いつもなら、啓介の意見に同調しそうなやつも、今回限りはやばいと察したのか口を閉ざしており、完全に啓介は孤立無援状態に陥っていた。

一番の被害者は、その様子を困惑した様子で見ている、実行委員の人だろう。

「でも、幼馴染だし助けてあげたほうがいいと思うなー」

「……はぁ」

望んでいた展開ではあるけど、ものすごく気が滅入る僕は思わずため息が漏れた。

「ちよつといい？」

そして僕は、自ら混沌の場に身を投じたのだ。

「おおー！ 一樹も仲間になってくれるのか!! さすがは同士！」

「……啓介の出した案を『コスプレ喫茶』ではなく『猫カフェ』に変更を希望します」

なんだか目を輝かせている啓介をしり目に、僕は啓介の案を変更させた。

「こつちのほうが、コスプレ喫茶よりはましだと思いますけど、どうですか？」

「……まあ、それならいいかな」

「そうだね。それに風紀委員長の美竹君だから安心だし」

最初は戸惑っていたクラスの女子たちも、徐々に納得していったように賛成に回って行った。

「ちよつと待て！ 猫カフェじゃ、華やかさが——」啓介、想像してみな。女子たちが猫耳をつけて接客をしている姿を——………何でも

ないですう」

異論を唱えようとする啓介のもとに、すかさず移動した僕が耳打ちすると、頭の中で想像を巡らせたようで、顔を緩ませながら黙っていた。

その後、お化け屋敷などのポピュラーな案が出そろったところで、多数決が行われたが、猫カフェがぎりぎりではあるものの一番多く票が入ったため、僕たちのクラスの出し物は『猫カフェに決まるのであった』

ちなみに、実行委員から『猫カフェ』の案が出されたその場で却下となったことによつて、昼休みに動物の猫ではなく、自分たちが猫耳をつけたりねこの置物などを教室内に置くという方向に変更することで許可が出た。

このことで湊さんは不満そうな表情を浮かべていたことを、ここに付け加えておきたい。

こうして、クラスの出し物は無事に決まり、文化祭に向けての準備が始まるのであった。

ちなみに、この混とんとした状況を引き起こした啓介は、生活指導部の先生からありがたい話を聞かされることになるのだが、それはまた別の話である。

啓介いわく、『男のロマンというのは分かり合えるものではないようだ』とのことだが、おそらくは分かり合えたとしても少数だと思つたのはここだけの話だ。

第29話 テスト

放課後。

「……か」

僕はチュチュからもらった名刺に書かれている住所にあるタワーマンションを訪れていた。

(にしても、こうして実際に見て見ると、本当に高いな)

下手すれば富士山の山頂をも超えるのではないかと思えるほどの高いマンションに、僕は圧倒されていた。

僕は、意を決して出入り口から中に入る。

そこはまるでホテルロビーのような感じの場所だった。

というより、噴水のようなものであるし。

(えっと、確かチュチュがいる場所への行き方は……)

名刺の裏にチュチュ本人だろうか、彼女のいる場所への行き方が簡潔に記されていた。

(ロビー内奥のドアの横のインターホンで呼び出す……わかりやすい)

とりあえず、ロビーの奥にあるドアの前まで近づくと、その横にあるインターホンのような装置を操作する。

(この上部分がカメラなのかな?)

こういうところに来たことがないため(当然だけど)、勝手がわからずに画面をのぞき込んだ体制のまま固まっていると、それまでとつぎさされていたドアが開いた。

「……行くか」

とりあえずドアを通過して中に入った僕は、ドアの奥にあるエレベーターを呼び出すボタンを押して待つ。

ほどなくして到着したエレベーターに乗り込んだ僕は、階層ボタンのほうに目を向ける。

普通はどこでの階層を押せばいいのだろうかと悩むところだがその必要はない。

なぜなら、『R』と『1』しかボタンがないからだ。

(屋上に直通かい)

思わず心の中でツツコみを入れるほどに、圧倒されていた。

(弦巻さんのですごいのは慣れていたはずなんだけど……)

身近なお嬢様でもある弦巻さんの家のスケールの大きさは、ある意味僕も何度も味わっており、もう何が来ても驚かないといえるだけの自信があった。

そう言っておいて毎回驚いている辺り、僕の自信が軟弱なのか、弦巻さんのスケールがすごいのか。

それは置いとくとして、僕はチュチュの待つ最上階に到着するのを待っていた。

「うわあ……」

ほんの数秒程で目的の階である屋上に到着し、エレベーターのドアが開いたので外に出た僕はその光景に感嘆の声を上げる。

ガラス張りの通路の外には芝生があったりプールのようなものがあったりと、セレブという言葉で想像できるであろう光景が目の前に広がっていた。

そんな通路を歩いていき、最初の建物に足を踏み入れる。

(……も……で広いな……)

その建物内はもはや部屋というよりは一軒家クラスの場所だった。

ソファーや置物が、さらにこの場所の高級感を醸し出している。

(早くチュチュの待つ場所に行こう)

ただただ広いその場所だが、誰の姿もないため静寂に包まれているのが、少しだけ不安な気持ちを抱かせたため、僕は逃げるようにさらに足を進めていく。

屋上に着いたら奥の建物まで来るというのもチュチュから知らされていたりするので、通路の終着点であるドーム状の建物の前までたどり着いた僕は、ドアを開けてさらに奥のドアを開けて中に入った。

「いらっしやいませ☆」

明るい声と共に出迎えたのは一人の少女だった。

スカートの端をつまんで軽く頭を下げる、カーテシーという行為を行うその姿はどこかメイドのような印象を抱かせる。

(ん？ この人どこかで……)

「今日オーディションを受けられる方ですか？」

「え、ええ」

考え事をしていたため、若干返事がどもってしまっただが、どこで会ったのかと考えを巡らせていた僕は、彼女の独特なカラフルな髪の毛で思い出すことになった。

(もしかして、パスパレのファンの子じゃ……)

前にリライブでも会ったがメンバーによって髪の色を変えてくる人。

その人にそっくりなのだ。

(名前は今度、誰かに聞いておくにしても、これは気を付けないと)

名前を聞いておけばよかったと思いつつも、さらに僕は警戒を強める。

何せ、彼女はパスパレのガチ勢だ。

パスパレの楽曲のほとんどが、僕たちムングロから提供されていることなど、当然彼女は知っているはずだ。

可能性は低いが、それつながりで僕たちのライブに来ていたとすれば、演奏の仕方僕らの正体ばれる可能性も捨てきれない。

流石に、そのようなところでほころびが出るのは、僕としても勘弁願いたい。

「来たわね」

そう結論付けたところで、少し奥にある色々な機材が置かれたテーブルの前のいかにも“このボス”と言わんばかりの黒椅子をこちらに回転させて、不敵の笑みを浮かべたチュチュが姿を現した。

本人は威厳を示しているつもりだろうが、僕からすれば小さな子供が大人の真似をしているような微笑ましい光景にしか見えなかった。

「改めてワタシがプロデューサーのチュチュよ。そっちがパレオ」
(パレオって、水着ってという意味だっけ?)

いくらなんでも、それが本名なはずもないのでおそらくは芸名のようなものだろう。

それだけに、そういう意味でパレオという名前をつけたのが気に

なるが、とりあえずそれは置いておこう。

「後二人メンバーがいるけど、今はまだ来てないわ。早速だけど、あなたの演奏を聞かせてもらおうわ」

（二人……どの楽器か気になるけど、今はテストに集中しよう）

「ワタシの聞きたい音じゃなかったら帰ってもらおうわ。レディ？」

（これって、用意はいいかっていう意味だよな）

下からこちらを伺うような仕草で聞いてくるチュチュの言葉に、普通はここで“イエス”と返すべきだろうが、それだとはまらないなと感じた僕は一瞬ボケてみようかと思つたが

「オーケー。それで演奏はどこで？」

真面目に答えることにした。

下手にボケて滑つたら目も当てられないことになるのは、啓介を見ていてよく知っている。

たとえばまらないとしても、これが無難だ。

「そのブースの中でやって頂戴」

チュチュが手で示した先にはガラス張りになっている一室があった。

中にはドラムやらキーボードなどが置かれており、そこが演奏スペースなのだろう。

「それじゃ、失礼するよ」

とりあえず、チュチュに言われた通り、ブースに入った僕は手早く演奏の準備に取り掛かる。

（あの曲なら、大体こんなものか）

軽くギターを鳴らして音を確認した僕は、この曲に最適なチューニングができたことを確かめることができた。

（そう言えば、この音って向こうに聞こえてるのかな？）

普通であれば聞えてるかもしれないが、ここは高級タワーマンションの最上階。

防音設備が完備されていてもおかしくはない。

そうとなると、この音は聞こえないのではと思うが、おそらくはどこかにマイクか何かあってそれを通して向こう側に聞こえてい

るのだろうか、僕はあたりをつけた。

「失礼します☆」

「……よろしく」

人当たりのよさそうな笑みを浮かべながら入ってきたパレオさんに、僕は彼女も一緒に演奏するのだと理解し、返事をする。

どうやらパレオさんの担当はキーボードのようで、シンセサイザーの前に立つと準備を始めた。

『それじゃ、かけるわよ』

それから間もなくしてパレオさんも準備を済ませたようで、外でこちらを見ているチュチュの声が聞こえてきた。

その直後、出だしであるパレオさんが演奏を始めたことで、『R・I・O・T』の演奏が幕を開けた。

(とりあえず、周りに合わせるか)

今流れている音源とキーボードの音に合わせて演奏するいつものスタイルで僕は挑むことにした。

最初の歌いだしの部分は我ながら良い感じだったと思う。

初めてあった人と一緒に演奏をしているとは思えないほど合わせていたと思う。

だが、イントロの演奏を終えたところで、チュチュのほうを見て見ると、あまりいい顔はしていなかった。

その顔からは不満の色がにじみ出ている。

それは、僕の演奏に問題があるということでもある。

(なんだか違うんだよね)

同時に僕も、違和感を感じていた。

僕の今の演奏が、この曲の理想形……チュチュが聴きたい“音”から、大きくそれているような気がしてならないのだ。

この解決策は簡単だ。

僕がムングロでやっている時と同じ演奏をすればいいだけのこと。

(とはいえ、“僕”のやり方で行くわけにもいかないし)

素性がばれるという理由以外にも、パレオさんの存在もある。

彼女の力量が不明な分、下手にパワーを上げるのはかなり危険な賭

けだろう。

だとすると、僕をするべきことは一つしかなかった。

(僕のやりたいような演奏をしつつも、彼女のパワーに合わせて)
言葉では簡単だが、実際は難しいことこの上ない。

この曲の理想とする形で演奏するのは簡単だ。

だが、それをしつつも一緒に演奏をする人のパワーに合わせるのはかなり難易度が上がる。

尤も、これはサポートという領域をはるかに超えて“バンドメンバー”としてのやり方になるのだが。

そうとなれば、即座に行動に移した。

ちやうどAメロに入るという区切りの良い個所だったのも幸いした。

おかげで演奏のタッチをスムーズに変更することができた。

後は自分の金お向くままに音を奏でるだけだ。

(しかし、こうして演奏してみるとより一層この曲のすばらしさが伝わってくる)

このような曲を作り上げた目の前の少女には、驚かされる。

そして、曲の演奏は何とか終わらせることができた。

(キーボードのみが生演奏で、あとが音源なのにこのクオリティ……
全員がそろって演奏したら一体どんな風になるんだろう)

それを考えるだけでも自然と口元が緩んでくる。

認めよう。

僕は今、打算なしでこのバンドで演奏をしたいと思っている。

『PERFECT! 素晴らしい演奏だったわ! 今日からあなたは、ワタシの最強のバンドのギターリストよ!』

そんな僕にかけられた少女の判定は、文句なしの合格だった。

第30話 条件

「ちよつといいかしら」

一緒に演奏をしていたパレオさんから祝福の言葉をかけられていた僕に、真剣な面持ちで声をかけてきた少女に、僕は無言で続きを促す。

「あなたの演奏は、最初は他人の顔をうかがうような演奏だったわ……なのに途中でそれが一気に変わったのはわざと？」

「答えを言うのであれば、No。最初は他の音に合わせようとしていた。でも途中から、それを変えた」

「Why？」

おそらく、彼女が聞きたいのは、その理由のほうだ。

目の前の少女のまっすぐな視線から（サングラス越しだけど）目をそらさないよう、僕はその理由を話す。

「それが、君の作り上げた曲が求めていたから。あの曲が求めているその形は、後に続いていくのとかじゃなく、自分自身で切り開いていく……そんな感じに思えた。だから、そんな風に演奏をした」

「……曲の雰囲気を理解して、修正をかけたっていうわけね。Excellent！　ますます気に行っちゃわ！　あなたのメンバー入りで、ようやく最強のバンドが爆誕するわ!!」

（あはは……なんかミイラ取りがミイラになってない？）

気づけば自分でも恐ろしいほどにこのバンドにのめりこんでいる自分に、苦笑するしかなかった。

「ちよつといいか。立場的におかしな話だが、加入にあたって一つだけ、条件を付けさせてほしい」

「構わないわ！　何でも言ってみなさい」

彼女の機嫌がいうちに、重要なことを言っておこうと思った僕は、その条件を口にする。

「ギターのメンバーの募集を続けること」

「……どういふことよ」

僕のその言葉にやはりというべきか、それまで上機嫌だったチユ

チユの表情が一気に変わり、不機嫌なものになった。

「そのままの意味だ。君はまだ私というギターリストを知らない。さっきのはいわば表面上にしか過ぎない。途中で、“こんなはずじゃなかった”ということにならないためにも、メンバーは募集し続けるべきだ」

「あなた、馬鹿じゃないの？ それに、あなたはさっきの演奏でSWEETでExcellentな演奏をして見せた。あなた以上のギターリストなんているはずがない」

「私のさっきの演奏は、この曲の理想とする形という題名に対して私が出した一つの回答にしか過ぎない。私以上の解を出せるギターリストが出てくる可能性だってあると申し上げている」

お互いに一步も譲らないとは、まさにこのことだろう。

とはいえ、この条件は呑んでもらう必要がある。

それは打算とかではなく、純粋に彼女たちのためだ。

「ならば、試用期間を設けよう。いわば一種のお試し。期間は……10月末まで。その間、もし見つからなければ私はこのバンドのメンバーとして持てるすべての技術を使おう。それでどうだ？」

「……OK。いないと思うけど、それで決まりでいいわ」

チユチユが折れたことで、僕の条件を呑ませることができた。

（後は、待つだけか）

僕以上にふさわしいギターリストが現れるのを、僕は待つことにしたのであった。

合同文化祭の準備も本格的に始まりだしたこの頃、僕たち生徒会メンバーは文化祭の成功に向けて慌ただしく活動を続けていた。

「それでは、失礼します」

今日は花女の教師たちと、文化祭当日の出し物などの打ち合わせだ。

僕は会長でもある日菜さんの付き添いでここに来ているが、本来は副会長であるつぐの役割なので僕が行く必要はないのだが、当の本人

は日菜さんのお願いによって慌ただしく走り回っているため、僕が代理という形で来ることになったのだ。

とはいえ、そのおかげで当日の見回りのスケジュールの打ち合わせもできたのだから、無駄ではなかったりする。

何せ、別の日にするはずの打ち合わせをまとめてすることができたのだから当然だ。

「会長、羽丘に戻るよ」

「その前に、おねーちゃんの教室に行きたい」

日菜さんの頼みに、僕は一瞬耳を疑った。

「日菜さん。今がどういう時期かわかる？ 僕たちに寄り道をする余裕なんてないはずだよ？ 現につぐだって今慌ただしく走り回っているのに」

「ええ〜、いいじゃん〜」

体をねじらせながら食い下がるその様子は、まさに駄々っ子そのものだった。

「駄目」

「うう……じゃあ、下見！ 文化祭当日の見回りのルートを決めるための下見！ それならいいでしょ？」

何やらひらめいたのか、目を輝かせながら聞いてくるが、既に見回りのルートは紗夜と打ち合わせ済みだ。

「ルート決めだったら、もう紗夜と大体決めて……あー、わかったわかった。下見ね、下見」

そのことを言おうとした僕に、日菜さんから無言での上目遣いという攻撃を受けた僕は、結局日菜さんの提案を呑んでしまうのであった。

「やったあー！ おにーちゃんありがとうっ。大好きっ」

「はいはい……はあ」

色々とツツコミどころ満載だが、今の僕にそんな気力など残っているはずもなく、スルーすることにした。

こうして、紗夜の教室を探す旅……ではなく、見回りルートを決めるための下見をするのであった。

日菜さんの後続く形で校内を歩く僕は、文化祭に向けて準備を進めている生徒たちの活気に満ちた声を複雑な気持ちで聞いていた。

(本当は、僕も協力するべきなんだけどね……)

クラスの出し物の準備に参加できないというのは、意外にも辛い。クラスの人は僕が生徒会のメンバーであることをわかってか、「生徒会だから仕方ない」やら、「文化祭が成功するように頑張つて」やら「これは猫カフェじゃない」等々の激励を受けた。

……最後のに関しては、多分文句だと思うけど。

とはいえ、今年で文化祭は最後。

出来れば、クラスのみなどと一緒に準備をしたかったのが本音だが、生徒会の一員としてこの合同文化祭を成功という結果で幕を閉じさせるのも重要なことだというのは分かっている。

(まあ、僕にできることをやろう)

そう結論付けながら、前のほうで両手を後ろに組んで辺りを見回しながら歩く日菜さんのほうに視線を戻した。

「おねーちゃんの教室はどこかなー♪」

(本音が出るよ、本音が)

確かに、下見は建前だけだからと言って本心を思いつきり口にするのは違う気がする。

紗夜に見つかれば間違いなくお説教コースのことを僕たちはしているわけで、紗夜の姿がないかを探すために自然とあたりをきよろきよろと見まわしてしまう。

「んー?」

階段の前まで移動したとき、日菜さんは足を止めると階段のほうを見て首を傾げる。

「どうかした?」

「今、彩ちゃんの声があったような気がする」

足を止めた日菜への疑問に、日菜さんはそう答えるとすたすたと階段を下りていくので、僕もそれに続いていく。

(つて本当にいたよ)

階段を下りた先には階段に腰かけているピンク色の髪の子学生の姿があった。

後ろ姿ではあるものの、丸山さんで間違いはなかった。

当の丸山さんは、何かに夢中なのか斜め後ろの腰かけた日菜さんとその後ろに立つ僕に気づく様子がない。

「———たいな、ハート」

「うわ、日菜ちゃんに美竹君!? 事務所チェック前だからっ」

どうやら、ブログに掲載する文章を書いていたようで、慌ててスマホの画面を隠す丸山さんだったが

「もう覚えちゃった」

「僕は見えてないけどね」

日菜さんはばつちりと文章を読んで覚えたようだ。

僕はそんなに見てなかったので、覚えてすらいけないけど。

丸山さん達や僕たちは、公式サイトという形でブログも行っている。

ただ、自分たちが考えた文章をそのままネットに掲載するというのは、リスクが高い。

主に不適切な表現や、まだ出してはいけない情報を出したり等々、生じうるトラブルを未然に防ぐべくブログに掲載する前に必ず事務所のように文面をチェックしてもらおう必要があるのだ。

(そのくらいの危機管理を、他のことにも活かせばいいのに)

主にパスペレ関連のごたごたはスタッフ側のミスが原因だったりするので、非常に悔やまれる。

『『特別な思い出』って何?』

それはともかくとして、腰かけていた日菜さんが丸山さんが打ち込んでいた文面に書かれていた単語のことを尋ねる。

僕も地味に気になったので、丸山さんの答えを待った。

「花女でやる文化祭は今年で最後だから、思い出に残るようなことをしたいなって。……本当はパスペレのみんなでライブをしたかったんだけど事務所NGだった」

「そっかー」

残念そうな表情を浮かべている丸山さんに、日菜さんは静かに相槌を打つ。

今の僕には時間的な余裕はないけれど、もしそれがあつたとしたら丸山さんと同じことを考えていたかもしれない。

とはいえ、事務所側からNGが出た以上、Pastel*Palettesとしてステージに立つことは不可能。

それでもステージに立ちたいのであれば、取るべき手段は一つしかない。

「だったら、パスパレじゃなくてただの彩ちゃんだったらいいんじゃない？」

「いつそのこと違うバンドメンバーの人を集めて特別バンドを組んでみるのもいいかもね」

日菜さんのアイデアに、僕も乗った。

それは、僕たちが前に取っていた手法だ。

ムングロとしてライブに出る許可を得る時間がない場合、編成を入れ替えてバンド名も別の物にしてステージに出たことがある。

自分の担当する楽器とは別の楽器ができる僕たちだからこそできた荒業で、相原さんからも「前代未聞」とまで言われたのは記憶に新しい。

とはいえ、彼女たちにそのようなスキルがないのは百も承知なので、メンバーを一から集めるほうが現実的だ。

「うーん……難しそうだけど、面白そうだね」

少しの間考えこんだ丸山さんも、意外と乗り気だった。

そのタイミングで階段から立ち上がって下に降りた日菜さんはこちらに振り返ると

「るんっ♪ ってきた！」

とウインク交じりに僕たちに言うのであつた。

(あ、これやばいやつだ)

僕はこの時、日菜さんの様子から何度目かの嫌な予感を感じるのであつた。

第31話 日菜の暴走

「おっじやましまーす！」

「日菜ちゃん？ それに彩ちゃんに美竹君まで」

丸山さんに案内してもらおう形で、向かったのは『3年A組』の教室だった。

そこには出し物の準備をしている白鷺さんと花音さんの姿があった。

「いきなりどうしたのよ」

「実はね——」

ここではかなり不自然な部類に入る顔ぶれなだけに、怪訝そうな表情を浮かべた白鷺さんに、丸山さんがことの経緯を説明した。

「なるほどね。話は分かったわ」

話を聞き終えた白鷺さんは『花咲川の歴史』という本を机に置き、脇腹に手を当てるとこちらのほうに振り向いた。

「それでどうして私たちに？」

「……友達だから」

白鷺さんの様子から見て、明らかに賛成ではなさそうなのが伝わったのか、丸山さんの声も尻すぼみになっていく。

「私もパスパレのメンバーでしょ。日菜ちゃんも」

「ねーねー、おねーちゃんの机はどこー？」

自分の名前が出てきたというのに、当の本人は気にも留めずに紗夜の机の場所を聞いて、花音さんに教えてもらおうとぱあつと目を輝かせて紗夜の席と思わしき場所に駆けて行った。

「おにーちゃんもこっちにおいでよ！ 大好きなおねーちゃんの席だ

よー！」

「……」

こういう時ほど無視が一番だというのは、もうすでに学んでいた。なんだか白鷺さんたちの視線が痛いけど。

「ひ、日菜ちゃんはプロデューサーなんだ」

そんな痛い空気を変えるべく丸山さんが話しを変えてくれた。

「プロデューサー?」

「バンドの方針を決めたりする人のことよ。メンバーを集めたりバンドを支えたりとビジネスパートナーとして重要な役割を担う人よ」

(本人は、その自覚はないけどね)

とはいえ、メンバーを集めている筆頭は日菜さんなので、プロデューサーとしてはふさわしいのかもしれない。

「花音ちゃんもどう? 彩ちゃんと同じバイトしてるし」

「ふえ!?!」

満足したのか、紗夜の席からこちらのほうに移動してきた日菜さんは花音さんにスカウトの声をかけた。

「か、花音? 嫌なら断ってもいいのよ」

「……何で断る前提?」

慌てた様子で助言する白鷺さんに、小さくはあるけど、思わず口を継いでツツコミの言葉が漏れてしまった。

「うんっ。やろう!」

「本当!?!」

だが、当の花音さんは二つ返事で頷いたことで、新バンドのメンバーとなった。

花音さんの目には強い意志のようなものが感じられる。

(本当に変わったんだね、花音さん)

数年前の彼女の姿からは想像がつかないような目をしている花音さんに、僕はどこかうれしさを感じずにはいられなかった。

とはいえ、もう一人の友人はそうでもないように

「本当にいいの?! 花音、あなた日菜ちゃんか美竹君に何か弱みを握られているんじゃないの!?! ねえ、答えて!」 花音

「ふえ〜、そんなことないよ〜」

(白鷺さん、僕たちを一体何だと……)

花音さんの両手を握って、必死になって問いただしている白鷺さんに、僕は心の中で疑問を投げかける。

口にしなかったのは、答えを聞くのが怖かったからだけど。

「どんどん行こう! ほら、花音ちゃんも一緒に」

「う、うん。そ、それじゃ行ってくるね千聖ちゃん」

そんな彼女たちのことなど興味が無いといわんばかりに、花音さんに声をかけるとぱたぱたと教室の外に出て行った。

「待って！・花音ッ」

まるで姉妹が引き離されるように、片手を伸ばして止めようとする白鷺さんを見ないようにしつつ僕たちも教室を後にするのであった。

「それで、次はどこに行くつもり？」

「ふっふっふ。それはね……ここだ！」

花女を後にして、電車に乗ったり迷子になりかけた花音さんを救出したりと向かった先は、コンビニだった。

「って、まさか」

そのコンビニにいる人物に見当がついた僕の予想を肯定するように、日菜さんは非的な笑みを浮かべてコンビニの中に入っていく。

「いらっしやいませー」

「リサちー」

ちょうど売り場にある商品を並べる作業（名前は分からないけど）をしていたリサさんはこちらのほうに視線を向けると、その手を止めた。

「何何？　ものすごく珍しい組み合わせじゃん」

「実はね、彩ちゃんか——」

僕たちの組み合わせがよほど珍しいようで（実際そうなんだけど）興味津々な様子のリサさんに、日菜さんが本日二度目の事情を説明する。

「へえ、面白そうじゃん。アタシもやってみたいかな」

「ありがとー、リサちー！」

こうして、ベーシストも二つ返事で了承したことで、メンバーを集めることに成功した。

「それじゃ、さっそく新バンド会議しよう！」

「はいはい。みんなの予定を考えてからそれを言おうね」

凄まじい勢いで、新しいバンドの方向性を決める会議を開こうとする日菜さんを、僕が止めた。

なぜなら

「ごめんね。アタシ今、バイト中だから……」

「私も千聖ちゃんと出し物の準備が……」

このように用事があつて会議に出られない人がいるのだから。

「それじゃ、明日は？」

「明日だったら大丈夫かな」

「私も、今日で区切りが付けば大丈夫だよ」

「それじゃ、明日の放課後に……羽丘の生徒会室集合ということだ」

日菜さんの問いかけに、全員大丈夫そうだったので、僕は最後にそう締めくくった。

花女に話し合いができるスペースがあるかどうかもわからないため、手っ取り早く話し合いの場を設けられそうな場所ということで羽丘の生徒会室にしたのだが、果たしてこれがどういう結果をもたらすのかはまだわからない。

「オーケー。一樹君案内よろしくー」

「あ、あの私も」

とりあえず、異論はないようなので問題はなさそうだ。

とはいえ、羽丘に案内するという仕事が増えてしまったけど。

「おにーちゃん、あたしもー」

「日菜さんは羽丘の生徒で、場所がわからないわけじゃないでしょうがっ！ あと、おにーちゃん禁止！」

そんな中、便乗するように手を上げて案内してもらおうとする日菜さんに、僕はまくしたてるようにツツコミを入れた。

「美竹君、なんだかツツコミの切れが良くなってるよ」

「……全然嬉しくないんだけど、喜ぶべき？」

僕の聞き返しに、丸山さんは苦笑いを浮かべるだけだった。

「それじゃ、よろしくー」

そんなわけで、リサさんをお願いしつつ、僕たちはリサさんの邪魔にならないようにと外に出た。

「あ、日菜先輩っ！ 美竹先輩！」

外に出た僕たちにかげられたのは、間違いなくつぐの声だった。

「やっ与会えました……」

つぐの様子を見るに、僕たちが戻ってこないために色々探し回っていたらしい。

(なんだかもものすごく罪悪感が……)

「ちようどよかった。つぐちゃんも一緒にやろう！」

「はい！」

当日の日菜さんは、新バンドのメンバーにつぐを誘い、それにつぐは条件反射のように頷いていた。

「……って何をですか？」

「それじゃ、彩ちゃん花音ちゃんまた明日ねー！」

「あ、うん。またね」

「う、うん」

つぐの疑問に答えることなく、日菜さんは(おそらくは)学園に向かって歩き始めた。

「あっ!? ま、待ってください、日菜先輩！」

『……………』

そんな日菜さんの後を慌てたように走ってついていくつぐに、僕たちは無言で顔を見合わせるしかなかった。

この一連の出来事をまとめるのであれば、まさに“嵐”のような感じだった。

「……とりあえず、僕も行くね」

「うん。明日はよろしくね」

そんなわけで、僕は丸山さん達とその場で別れて、二人の後を追いかけるように学園に向かって駆けだすのであった。

ちなみに、生徒会室に僕が到着した頃には既に日菜さんとつぐは戻ってきており、文化祭に向けての準備を始めていた。

「二君、おそーい」

「……悪かったね」

日菜さんの言葉に相槌を打ちつつ、僕も準備のほうに加わってい

く。
結局、この日生徒会活動が終わったのは最終下校時刻になった時
だった。

第32話 被害拡大

「はあ、疲れた」

家に帰って、夕飯を食べ終えてお風呂を済ませると、一気にそれまでの疲れが噴き出してきた。

僕はたまたまベッドの上に飛び込むように寝転がった。

軽く体がバウンドしながらも、寝転がると先ほど感じた疲れが体から解き放たれていくような感じがした。

(あー、このまま寝ちやいそう)

疲れが抜ける気持ちよさにつけ入るようにして、ベッドの誘惑が僕を襲ってくるがまだ明日の準備をしていないので寝るわけにはいかないのだ。

(でも、1分だけなら)

「って、駄目だ駄目だっ」

誘惑に負けて目を閉じかけた僕は、慌てて目を開けるとベッドの誘惑を振り切るように起き上がると、ベッドから降りた。

「危ない……本当に寝るところだった」

「兄さん、ちよつといい」

ベッドの誘惑という強敵に勝利を収めた余韻に浸る僕のもとに、ノックと共に欄が部屋に入ってきた。

「聞く前に入ってるけど……どうしたの？ そんな怖い顔して」

いつもなら僕の返事を待つはずが、機嫌が悪いのかそれともかなり重大な話なのか、返事を待たずにドアを開けて入ってきた蘭の表情はいつにもまして怖かった。

「……つぐに負担かけすぎじゃない？」

「あー……」

蘭の単刀直入に切り出した話に、僕は気の抜けた声を上げる。

「文化祭の準備にいろいろ連れまわしてるけど、去年のようになったらどう責任を取るわけ？」

「……蘭の言いたいことは分かった」

蘭の怒りは尤もだ。

確かに、僕達は（主に日菜さんだけけど）つぐに文化祭の打ち合わせを色々と押し付けてしまっている一面もある。

去年……様々な要因が重なり、つぐが過労で倒れ救急車を呼ぶ事態に発展した時の繰り返しにもなりかねない。

蘭のその怒りの言葉に、僕は答えを告げる。

「命令権を握っているのは、生徒会長の日菜さんだ。僕からも注意はするけどそれで何とかなるようだった

ら苦労はしない。それとも一つ、これはそもそも学園行事の準備でもあつて、生徒会役員がしなければいけないことだよ。それをどうにかしろというのは、少々無理があるんじゃないのかな？」

「そ、それは……」

僕の言葉に、蘭はそれ以上何も言うことはできなかった。

生徒会の仕事の指示を出すのは日菜さんであり、僕たちは与えられた役割を全うしているのだ。

しかも、それは私用ではなく学園行事でもある文化祭を成功させるための物。

それ故に、一概に何とかするというのは無理な話だった。

「とりあえず、僕からも日菜さんには注意はしておくし、つぐがそうならないようにこつちでフォローもす

る……今日のところはこれくらいで勘弁してもらってもいい？」

「……分かった」

渋々ではあったものの、頷いた蘭はそのまま部屋を立ち去る。

（これは明日にでも直談判しに来るかな）

それは予感というよりも確信に近いものだった。

果たして、直談判して何とかなるのかどうかは疑問だが。

「つと、紗夜からだ」

電話の着信音で紗夜からの電話であることが分かった僕は、疲れたどこどこ吹く風と言わんばかりの速さで携帯を手にとると電話に出た。

「もしもし」

『一樹君。今、大丈夫かしら？』

「うん、全然」

3年になってから、紗夜は毎回電話口でこう聞いてくる。生徒会に入ったということもあるけれど、それとは別に人生の一つの局面ともいえる時期を迎えているがための配慮だと思う。

「最近中々会えないね」

『仕方がないわよ。初めての合同での文化祭で、お互いに慌ただしいし』

紗夜と顔を会わせて話したのはいつだろうか。

「声は毎日聞いているのに、会えないだけで寂しく感じるなんて不思議だね」

『は、恥ずかしいことを言わないでっ』

きつと電話先では、顔を赤くしているであろう紗夜の顔が脳裏に浮かびあがり自然とほおが緩んでいく。

『可笑しなことを考えてないでしょうね？』

「……もちろんだよ」

どうやら、僕のこととまた紗夜にはすべてお見通しなのかもしれない。

そんな僕にため息を一つ漏らした紗夜は、話題を変える。

『ところで、日菜が一樹君たちに迷惑をかけてない？』

「あー……うん。まあ、ね」

つい先ほど蘭から苦情が入った事や、今日一日のことを考えるとどう答えればいいのかに悩む。

嘘を吐くわけにもいかないし、されとて正直に全部話すのもどうかなと思うし。

まさに四面楚歌のような状況だった。

『……日菜が迷惑をかけてごめんなさい』

そんな僕の返事で十分だったようで、紗夜が申し訳なさそうに謝ってきた。

ここは紗夜が謝ることではないというべきだが、あえて僕が紗夜に声をかけるのであれば、

「別に僕は迷惑だなんて思っていないよ」

この一つしかなかった。

「確かに、日菜さんはいつも嵐のように周りをひっかきまわしていくけど、結果からすれば間違っている」

となんてそんなくないよ。それに、日菜さんがそういう性格なのは僕は分かったうえで生徒会に入ってる。もちろん羽沢さんも。だから、紗夜さんが謝る必要はないと思うよ」

『一樹君。……ふふ、ありがとう』

僕の気持ちが伝わったのか、紗夜は優しい声でお礼の言葉を口にする。

「でも、ちょっとだけうらやましいわね。一樹君日菜のことは何もかもわかってるんだもん」

『まあ、義理の兄だしね』

「それでも、ちょっと複雑よ」

紗夜のその口ぶりから、僕はある可能性を見出した。

「紗夜。もしかして……」

『はい?』

「嫉妬してる?」

なんとなくではあるけど、そういう風に感じられたのだ。

『なっ!? ベ、別に嫉妬なんて………するに決まってるじゃない』

最初は慌てた口調で否定していたが、否定しても意味がないことは、既に紗夜もわかっているのか、小さな声ではあるが認めた。

「僕が心の底から好きなのは、紗夜だけだよ。僕の言葉、信じられない?」

『そう言うつもりじゃないわよ……私だって、その……あなたのこと
が誰よりも好きよ』

結局は、告白しあうことになる辺り、いつもの僕たちらしかった。

その後何気ない出来事を話しつつ、気が付けばもう寝る時間になっていた。

『それじゃ、また明日』

「うん。また明日」

きつと直接会うことはできないだろうけど、それでも電話でなら毎日話ができる。

だからこそ、お別れの言葉だった。

(ふう……………早く準備してねよ)

紗夜との電話を終えると、一瞬で強烈な眠気に襲われた僕は、それに抗いながら明日の学校の準備を進めていき、部屋の明かりを消してベッドに横になったところで僕の意識は途切れるのであった。

「それじゃ、適当な席に腰かけて」

「う、うん」

「りょーかい☆」

翌日の放課後、僕は丸山さんと花音さんを花女から羽丘の生徒会室まで案内すると、各々に席に着くように促していく。

こうして窓側にはリサさんと花音さんが。

そして向かい側には丸山さんが腰かけた。

「ということで！ ベースはリサちゃん。ボーカルは彩ちゃん。ドラムが花音ちゃん、キーボードがつぐちゃん」

全員がそろったところで、両手をわき腹にあてながら担当楽器と名前を言っていく

「そして、アドバイザーの一君とギター&プロデューサーの生徒会長！」

「僕、アドバイザーだったんだ」

一体何をアドバイザーすればいいのかが不明だけど。

「も、もうメンバー集めちゃった」

「……………もしかして、バンドですか？」

そして、やはりというべきか日菜さんから事情を聴いていなかったつぐは、あまりぱっとしない様子だった。

「彩ちゃんがどうしてもバンドやりたいって言うから、パパッと集めました」

「みんな、付き合ってくれてありがとう。短い間だけどよろしくお願
いします」

日菜さんの言葉を受けて立ち上がった丸山さんは、僕たちにそう
言って頭を下げる。

「うん」

「オーケー」

「こちらこそ」

そんなわけで、日菜さんを筆頭とした新バンドが結成されたのだ
が、突然激しいノックと共に勢いよく扉が開かれた。

「失礼します」

「Afterglowです」

（あー、やっぱり来たか）

現れたのは、怒り心頭な様子の蘭といつも通りの感じのモカさんた
ちAfterglowのメンバー全員だった。

「蘭ちゃんにひまりちゃん？ どうしたの？」

「えつと……」

蘭達の登場に困惑した様子のつぐに、巴さんがバツが悪そうに頭に
手を置いていると、蘭が一步前に出て日菜さんの前に立った。

「日菜さんに話があつてきました。これ以上つぐに負担をかけるのを
止めてもらえませんか？」

どうやら、僕に行つただけでは意味がないと思い、おおもとの日菜
さんに直談判するということになったのかもしれない。

「ち、ちよつと蘭ちゃん」

「文化祭の準備でもあちこちに連れまわして……私たちが黙つてると
思つたら大間違い——」

そんな蘭の直談判を、つぐは必死に止めようとするが、それで止ま
るはずもなく、蘭が抗議の言葉を口にする。

対する日菜さんは、蘭の抗議に呆然と立っているだけだった。

（もしかして抗議の効果があつた？）

蘭のいつになく起こっている表情や強い口調に、日菜さんも思うと
ころがあつたのかもしれない。

そんな僕の推測は

「それってあたしのことを手伝ってくれるってこと!? やったー！
ありがとう、るんるんっ♪」

蘭の両手をとって前のめりに聞きながら喜びのあまりにその場で
ステップを踏む日菜さんの様子で、外れだということを知った。

(そうだよね。あのくらいでどうにかなる人じゃなかったよね)

僕の読みもまだまだだなと思いつながら、日菜さんの中で協力者と
なってしまった蘭は、日菜さんの勢いに押されるように後ずさる。

「日菜先輩半端ないっす〜」

そんな日菜さんの勢いに感想を口にするモカさんの前に移動した
日菜さんは

「それじゃ、モカちゃんはあたしと交代ね」

「およう？」

と言って、状況を理解できていない様子のモカさんの手を取って丸
山さんの横に移動させると

「この五人で、文化祭の記念バンドをやってもらいまーす！」
と、声高々に宣言するのであった。

第6章、完

第7章 『合同文化祭く予兆編く』 第33話 目指すもの

合同文化祭の準備もいよいよ佳境だ。

両校の生徒会を含めた色々な人たちの頑張りによって何とか形になりつつあった。

二校での合同文化祭という初の行事による懸念事項は、尽きることなく出続けていた。

例えば、これまた日菜さん発案で立ち上げられたバンド。

ちなみに、名前は『合同文化祭記念バンド』となった。

日菜さんいわく『合同文化祭の記念になってるんってするから』とのことだ。

このバンドが文化祭ライブで演奏する楽曲はおろか、方向性すらも決まっていないという絶望的な状況だ。

結成当日は、あまり腰を据えての話し合いができなかったため、各自で考えてくることとなったのだが、それで出てくれば苦労はしない。

(とはいえ、あまり僕が出しゃばるのもな……)

なんだかんだ言っただけは丸山さんの気持ちから生まれたバンドのようなものだ。

できる限り僕たち第三者が口を突っ込んでいくのは避け、丸山さんの考えを優先して構築していけるようにしたい。

と言っても、それで間に合わなくなっても本末転倒なので、最悪の場合は僕のほうでも意見を出したりするけど。

そんなバンドと同じくらいの懸念事項が存在する。

「失礼します」

「おはようございます。カメレオンさんっ」

場所は『HEPHAESTUS TOWER』の最上階のスタジオ。
中に入った僕をまばゆいほどの笑みで迎え入れるパレオさん。

そして、

「来たわね」

その横で威厳を示すべく仁王立ちしているチュチュの姿があった。

——チュチュ。

それは、目の前にいる背の低い少女が名乗っている名前だ。

無論、偽名だろう。

彼女の何が問題なのか、それは

『あんなバンド、ぶっ潰してやるッ!!』

少し前に彼女が口にしたその言葉に尽きる。

彼女がつぶそうとしているバンドは *R o s e l i a*。

理由はプロデュースを断られた逆恨み。

それを防ぐべく、警戒を強めていたところに、本人からのスカウト

が来たことで僕はこれ幸いにと彼女のバンド内に潜り込んだのだ。

もちろん、それだけが理由なわけでもなく、彼女の作った曲を演奏

してみたいという気持ちがあったのも事実。

そんなわけで、文化祭の準備をしながら彼女たちの動向を監視して

いるのだが、この日は一人多かった。

「早速だけど、ニューメンバーを紹介するわ!」

「やっぱりお前か。こいつから話を聞いた時はもしかしてと思ったが

……これからよろしくなっ」

「ええ。よろしくお願ひします。佐藤さん」

チュチュの言葉に続いて、先ほどまでソファアに腰かけていた佐藤

さんは立ち上がると、気さくな感じでそれに応えた。

(ドラム、キーボード、ギター。もうかなりそろってるな)

残すのはベースのみだ。

彼女の真意がわからない時点で、脅威以外の何物でもないがとはい

えここで下手に動けばせつかくのチャンスが水の泡だ。

結局のところ、僕は手をこまねいているのだ。

「おはようございます」

「来たわね。紹介するわ、彼女はレイヤ。ワタシの最強のバンドの

ベ이스ストよ!」

そんな時、訪れてきたレイヤと紹介された少女は、僕のほうを見る

と

「また会いましたね。これからもよろしくお願いします」

「いえいえ。こちらこそ」

少しだけ緊張した面持ちであいさつをしてきたので、僕もそれに倣って挨拶をした。

「これで、メンバーは全員集まったわ!」

「おめでとうございます! チュチュ様っ」

「ところで、このバンドの名前は?」

メンバーがそろったことに喜びを隠せないチュチュに、僕はその横でお祝いの言葉を口に出しているパレオさんをしり目に疑問を投げかける。

「……Sorry。もう少しだけ時間を頂戴。最強のバンドにふさわしい最強の名前を考えるわ!」

どうやら、バンド名のことは二の次だったようで、少しだけ考えこむ仕事をしたチュチュは、強い決意を込めるようにそう言うと、話を打ち切った。

「早速だけど、ブースに入って頂戴。今のあなた達の演奏力を見たいわ」

「はい!」

「ああ」

「分かりました」

チュチュの指示に従い、僕たちはブース内に入る。

そこは、前に僕がオーディションを受けた場所だった。

だが、今回はメンバーが全員そろっている。

『それじゃ、初めて』

ブースの外でこちらを見ていたチュチュの言葉により、演奏が始まった。

(これは、中々……)

生演奏だからというのもあるが、前よりもこの曲が生き生きしているように感じられる。

中でもベースとドラムが群を抜いてすごいのだ。

ベースのレイヤさんの力強くも正確なベースと、大人びたクールな歌声は湊さんには及ばないものの、非常に熱いものを感じられる。

ドラムの佐藤さんも同じだ。

狂犬というあだ名。

それはいい意味か悪い意味なのかを問われれば、後者のほうになるであろうその呼び名足る彼女のそれも、この曲にとっては熱量をさらに高めるスパイスのようなものとなっていた。

この場にいる全員の良し悪しがすべていい方向になるようにコントロールされているとしても過言ではない。

(これは、上手くすれば三柱の一つになるかも)

今、大ガールズバンド時代と言われているからか、数多のガールズバンドが誕生しつつある。

その中でもトップクラスを言っているのがRoseliaということになるが、それだけだと少々味気ないと感じていたりする。

そこで僕が考えたのが、大ガールズバンド時代を引っ張っていくシンボリック（いわば神のようなものだろうか）存在を作りあげることだった。

その要素は主に、“絶対的な王者”、“完全無敵”、“最強”の三つだ。

前二つはすでにどのバンドが当てはまるかは決まっている。

最初のはもちろんRoseliaだ。

次がPoppin' Party。

演奏技術は高くないが、それでも見ている人たちを楽しませることが出来るライブをしているのが主たる理由だが、それとは別にもう一つの理由もある。

だが、その理由をうまく説明することができない。

感覚ではわかってはいるのだが、いざ言葉にしようとするとい言葉が浮かばないのだ。

後は最後の一つのバンドを決めることだったのだが、チュチュ率いるこのバンドはその最後のピースになりうる可能性を秘めている。

だが、それにはこのバンドの見極めが不可欠だ。

そんなことを考えながらも、僕は演奏を続けるのであった。

B a n G D r e a m! ～隣を歩む者～
第7章『合同文化祭
～予兆編～』

「……つけられてはいないみたいだね」

駅の男子トイレ内に入った僕は、ほっと一息つきながら個室に入る。

そこで今までつけていたサングラスを外せば、謎のサポートギター“カメレオン”から男子学生、美竹一樹に早変わりだ。

（なんだかんだ言っつて、やっぱりのめりこんでるよね。これ）

美竹一樹に戻った瞬間に感じるこれは、ある種の罪悪感だろうか？

R o s e l i a に仇なす者たちに、結果的には力を与えてしまっている。

（僕の自由に……と言われても）

思い出すのは、彼女のバンドのメンバーになることを伝えた時の湊さんや紗夜、啓介たちの反応だ。

皆、誤差はあれど行っている内容は同じで『あなたの自由にすればいい』だった。

本当にいい友人や彼女に恵まれたと思うが、それでも罪悪感を感じずにはいられない。

（とにかく、今しばらくは様子見……それしかないか）

結局、現状維持になってしまいが、本当にそれしか僕の取れる方法はなかった。

（とりあえず、潰すプランだけでも立てておこう）

バンド内に同じステージで演奏をしたものが二人もいるのは、こちらにとつても都合がいい。

もし行動を起こすとすれば、あの二人を基軸にするのが効率がいいだろう。

だが、この後チュチュのバンドがきつかけで、僕の知り合いのバン

ドに不穏な空気を漂わせることになるということをこの時の僕には、想像すらできていなかった。

第34話 予兆

ある日の休日。

(今日はさすがに休もう)

連日の文化祭準備で疲労がたまっていた僕は、この日を休養にあてることにした。

本当は紗夜と一緒にカフェに行くのもよかったのだが、紗夜も紗夜で用事が立て込んでいるというのは日菜さん情報だ。

そんなわけで、滅多にしないベッドの上でうつぶせになりながら雑誌を読むというある種の時間の浪費をしていると、いきなり携帯電話が着信を告げるべく鳴り出した。

(これって、予備の携帯かな)

着信音が初期設定なので、おそらくはマツさんが渡してくれた予備のプリペイド式の携帯だと思う。

「誰だろう……」

体を起こして机の上に置かれている携帯を手にとると、相手の名前を確認する。

(チュチュだ)

相手はまさかのチュチュ。

だが、よくよく考えれば予備の携帯の番号はチュチュや佐藤さん……マスクングたちにしか教えていないので、それ以外の人からかかってきたら逆に驚くレベルだと思う。

「はい。カメレオンです」

電話に出て最初に言うのが動物の名前というのは、なんだか複雑だ。

『今すぐスタジオに来なさい！ 今すぐよ！』

「切れた……何事？」

一方的に用件だけ伝えて一方的に切るという行動は、日菜さんで何度も体験しているので、今更どうとも思わないがそれでも呼び出しの理由が気になって仕方がなかった僕あ、ジーパンに黒い半そでのシャツという服装に着替えると、サングラスとギターをもって自室を後に

した。

「二樹、出かけるのか?」

「うん。ちよつとバンドのほうで……夕方までには帰るよ」

まさか日が暮れるまでかかる用事ではないはずだ。

何せ、メンバーのレイヤさんの仕事の契約の関係で、今日までサポートの仕事があるため、練習を行うのが実質不可能に近いからだ。

(早く行こう)

僕は自然と早足になりながらも、チュチュのいるマンションに向かうのであった。

チュチュの住むマンションの顔認証システムも、最初は色々手間取ったが、何回も足を運んでいればさすがに慣れてしまった。

今では手早くパネルを操作してドアを開けることができるので、人間やはり慣れるものなんだなと感じたりしたのは記憶に新しい。

そうして、最上階に到着した僕は、いつものように奥へ奥へと進んでいきスタジオに入った。

「失礼します」

「来たわね」

スタジオに足を踏み入れた僕を、待ちわびていた様子のチュチュが出迎える。

他にもパレオさんやマスキング(この間チュチュにつけてもらったらしい)の二人の姿もあった。

だが、そこにいたのは彼女たちだけではなかった。

「紹介するわ、彼女はタエ・ハナヅノよ」

(どうして、花園さんがここに!?)

そこにいたのは、紛れもなく花園さんだった。

彼女はPoppin Partyのメンバーだったはず。

それがどうして、このような場所にいるのだ?

「レイヤの紹介できたギターリストよ。サポートだけど今からテストをするから、あなたも一緒に演奏して」

「……了解」

チュチュの簡潔な説明で、おおよそのことは理解できた。どういった関係かは知らないが、レイヤさんと知り合いのようだ。そんな彼女が、サポートとしてこのバンドに加わるとは、想像すらしていなかった。

とはいえ、すぐに頭を切り替えてブースに入ると、セッティングを始める。

パレオさんやマスクキングを始め、チュチュ以外全員ブースに入って準備を始める。

『準備はいい？』

「はい。」

セッティングを済ませた頃を見計らってのチュチュの問いかけにした僕たちの返事に遅れるようにして花園さんも返事をした。

曲は僕の時と同じ『R・I・O・T』だった。

今回は花園さんに対するテストなので、僕は少しだけ抑えめに行くことにした。

(イントロは上々)

Poppin' Partyの中で、ギターの技術が高いだけあり、花園さんの演奏には乱れはない。

何より堂々としているところがポイントが高い。

例え間違えたとしても、冷静でいられるというのは、ライブを進める上で求められるものの一つだ。

冷静ささえ保てれば、例えミスをしたとしてもリカバリーをすることができ、精神的な余裕が生まれるのだから。

Aメロに入っても彼女の演奏に乱れは見られない。

(少しだけジャブでも入れてみるか)

なので僕はいつもはしない“ジャブ”を入れてみることにした。特別なことはしていない。

ただ、抑えていたパワーを解放しただけだ。

「っ!？」

隣で息をのむ声が聞こえてくると同時に、音が若干ぶれた。

だが、それもまた一瞬のこと。
すぐにリカバリーして見せた。

(Roseliaの主催ライブの時よりも、演奏のレベルが上がってる?)

確信はないが、彼女の演奏技術が高いという事実は変わらない。

このテストでまた僕は花園多恵というギターリストの実力を知ることになるのであった。

「タエ・ハナゾノ。合格よ」

「っ！ あ、ありがとうございます！」

演奏を終えたチュチュの判定は文句なしの合格だった。

「おめでとうございませーす！ おめでとうございませーす！」

元気に飛び跳ねながら祝福の声を上げるパレオさんに続いて、僕も小さく拍手をして彼女の合格をお祝いする。

「クレア、今日からあなたがタエ・ハナゾノにギターを教えなさい。PERFECTなギターリストに仕上げるのよ！」

「……………え、自分ですか？」

一瞬誰に言ってるのかがわからなかったが、数秒間にもわたる無言による重苦しい雰囲気僕を差していると理解することができた。

「当たり前でしょ。あなたは今日から『クレア』よ！ あなたの演奏を聞いていたらゼロから作り出すっていうテーマが浮かんだの」

「……………わかった」

おそらくは英語ではなく、ギリシャ語かラテン語の感じだろうか？ (まさか虫からちゃんとした名前になるなんて……………思ってもいなかったな)

そのバンドの音に合わせることでできることと、カメレオンという動物の特性が同じことから名乗るようになった『カメレオン』。

別に不満があるというわけではなかったが、それでもちゃんとした名前を与えられるというのは、色々とくるものがある。

「チュチュ。教える……………といったけど、方法は？」

「それはあなたの自由でいいわ」

その言葉は、一見丸投げのようにも聞こえるが、それは信頼の裏返し。

断定はできないが、どうやらチュチュの信頼を少しだけではあるが得ることができたようだ。

「ということ、よろしくお願いします。タエさん」

「……………はい、お願いします。クレア先輩」

（ん？ 今、花園さん先輩って言わなかった？）

普通は、さん付けで呼ぶようなものだが、どうしていきなり先輩と呼んだのだろうか？

その理由として、ある仮説が浮上した。

（まさか、花園さん僕の正体に気づいた？）

そうだとすれば先輩付けの理由も説明がつく。

花園さんが、僕に対して話しかける時は、『美竹先輩』と呼ぶことから間違いない。

だとすると、一体どうして気づいたのかが問題になるが、こればかりは本人に直接聞くしかない。

（でも、下手に聞いて墓穴を掘るのも……………ちよつとね）

これが、彼女の天然のなせるものだとすると、聞いた瞬間にクレアは美竹一樹であるということカミングアウトしているのに等しいことになる。

それはそれで間抜けに思われるので嫌だ。

こうして僕は、モヤモヤとした不安を抱きながらもチュチュの命の下に、花園さんにギターを教えることになるのであった。

この花園さんのサポート入りが、一つの波乱を招くことになるかも知らずに。

第35話 作曲

花園さんにギターを教えることになったとはいえ、文化祭の準備も佳境となるこの時期につきっきりで教えることなど不可能に近く、放課後の時間は文化祭の準備に費やされることとなっていた。

チュチュには“どうしても抜けられない仕事がある”と言っておいたが、それもどこまで持つのか疑問だ。

そんな放課後、僕と日菜さんに丸山さんとリサさんに花音さんにつぐ、そしてモカさんから構成される合同バンドメンバーは、生徒会室に集まっていた。

その理由は言う稀もなく合同バンドの打ち合わせだ。

「それでは、新曲を作ります！」

『おー！』

席を立って、声を上げる丸山さんに、モカさんたちも声を上げたり手を上げたりして応える。

つまり、そう言うことだ。

現段階で、まだ演奏する曲の案が出てきてないのだ。

「それで、どうすればいいのかな？ 美竹君」

「まずは楽曲のテーマから決めたほうがいいと思う。ジャンルとかだとあまりぱつとしないと思うから」

丸山さんに意見を求められた僕の言葉に、みんなはなるほど感心したような声を漏らす。

この中で、作曲を担当しているのが僕だけなので、僕が口をはさむことになってしまおうわけだ。

「うーん……そう言えば、Afterglowってどうやって作曲してるの？」

「えー、いつも通りに蘭が何時も以上にムムって考えてますね〜」

少しでもヒントを得ようと丸山さんはAfterglowやRoseliaの作曲方法を聞いて回るが、どれも個性的なものばかりだ。

祈っていたり、落とし込んでみたりとこれって参考になるのだろう

かと思えるようなものがいくつも出てきたけど。

(ん？ 戸山さん？)

そんな彼女たちを見てみると、静かに生徒会室に入ってくる戸山さんの姿を捉えた。

おそらくこつちに運んできた段ボールをそつと置くと、空いている席に腰かけてメモ帳とペンを取り出して何やら書き始めた。

(もしかしたら、戸山さんも何かを学ぼうとしてるのかな)

Poppin, Partyの作曲はりみさんと花園さんが担当していた記憶があるが、これもまた成長ということだろうか。

「戸山さん、中に入る時はノックをしてからにするように」

とはいえ、こつそりと生徒会室に入るとはあまりよろしくないの
で、軽く注意の言葉を彼女にかける。

『え!?!』

「香澄ちゃん!?!」

「す、すみません。ちよつと作曲の勉強をしたくて」

「それは構わないけどね」

その場にいた全員の驚きのこもつた視線に、ペンで頭をつつきながら謝る彼女にそう告げたからか、それとも戸山さんがここにいる理由を知ることができたからか、みんなは戸山さんから視線を外した。

「ムングロはどうやってるの?」

「僕たちはシンプルに浮かび上がったメロディーを記録しているだけだよ……こんなふうに」

そう言つて僕はスマホを操作して一枚の写真を表示させると、それをみんなに見えるようにデスクの上に置いた。

「これって、生け花だよね?」

「おお、これはなかなかの代物ですな」

「へえ、アタシこういうの初めて見たからちよつと新鮮かも♪」

(あ、これ生け花の作品として見られてる)

全員の反応から見て、間違いない。

これまで、僕の作曲方法を離れたときの反応は、大体がこんなふう
になつて

「これが、楽譜なんだけど」

『え!?! これが?!』

そして、これが楽譜であることを教えると今のように驚かれるのが定番の流れになっていた。

「いやいや。これはどう見ても普通の生け花にしか見えないうて」

「だよ。みんなからも言われるよ。でも、これが僕にとっては楽譜代わりなんだ。思いついた曲をこういう風に形にして写真にとって保存する。後は、作詞を担当している啓介がこの曲に合う詩を書きあげるのを待つか、詩を書いてもらうかしてできた歌詞を併せて曲の完成」

その前はこうやっていたのかは、もう思い出せそうになかった。

多分、自分なりのやり方を当時はしていたと思うのだが、それも今となつては思い出せるわけでもなく、また思い出そうとすらしていなかったりする。

そのくらい、今のやり方がすんなりといい感じに収まっているのかもしれない。

「でも、これを見てムングロのみんなはメロディーを思い浮かべられるんだね」

「無理」

「ば、バツサリ言うんだ」

切り捨てるように答える僕に、花音さんは苦笑を浮かべる。

実際、試してみたことがあるが誰一人、この写真から僕の思い浮かんだメロディーを理解できた者はいなかった。

啓介いわく、『なんとなくわかるんだけど、無理』とのこと。

「じゃあ、どうやって音にしているの?」

「普通にパソコンに打ち込みで。これはメモ帳のようなものだから。ちなみにこの作品はパスペレの曲だけ」

「ええ!?!」

最後のほうに付け加えるようにして告げた事実を驚きを隠せない丸山さんは、写真をじつと穴が開くくらいの勢いで見つめだした。

「どれどれ……」

そんな丸山さんの横から、その写真を覗き見た日菜さんは、しばらくの間真剣な表情で写真を見続けていると

「わかった！ これネギだ!!」

「え？ そんな曲の名前あったっけ？」

「……いや、僕もそんな名前の曲は作ってない」

某有名な、メロディーと歌詞を入力することによってできる音声合成技術のソフトウェアで代表されるキャラクターじゃあるまい。

生徒会室内が何とも複雑な雰囲気に含まれていく中、僕と丸山さんは必死に日菜さんの口にした“ネギ”の曲を思い出す。

(駄目だ。全然思い浮かばない)

日菜さんの言うことはなんとなくは分かるようになってきたと思っていたが、どうやらまだまだのようだ。

(そもそも、これって『SURVIVOR ねばーぎぶあっぷ』って言う曲だし……ん？ まさか)

正解を考えたところで、僕はある可能性を日菜さんに確かめてみることにした。

「日菜さんもしかして、『SURVIVOR ねばーぎぶあっぷ』のことを言ってる？」

「うん、それぞれ！ 長いからネギって呼んでるんだよね」

(当たっちゃったよ)

出来ればあてたくなかったが、僕が言いたい言葉は一つしかない。「そんな略し方はしないよ(するかっ!)」

丸山さんと声が重なるが、そんなことなど今はどうでもよかった。何をどう省略すればネギになるのかが全然わからない。

「そもそも、勝手におかしな略し方をしないで……」
流石に、この曲がファンの人たちにネギと言われるのは複雑すぎる。

「うーん……日菜ちゃん、何かアイデアはない？」

そんなこんなで、脱線した話を丸山さんが戻しつつ、日菜さんにアイデアを聞く。

「テーマはバイトでいいじゃない？」

『あ、それだ』

日菜さんが軽い口調で出したアイデアが、どうやら丸山さん達にはしっくりと来たようで、バイトがテーマとなった。

「だったら、バイトの応援ソング的なものはどう？」

「それすごくいいー！」

後はすさまじい勢いだった。

次々に意見が出てきてアツという間に『バイトの応援ソング』というテーマが出来上がった。

「一樹君、こんな感じで作曲できそう？」

「それならいい感じのメロディーがあるよ」

僕は今井さんに答えつつ、その曲のことを思い出した。

それは、少し前に作ったメロディーだったが、曲調的にムングロには合わず、パスペレにも合わないために完全にお蔵入りとなってしまうものだったが、応援ソングという立ち位置であれば、多少の手直しは必要だが十分にびったりと適合するはずだ。

「それじゃ、一樹先輩が曲を完成させるまで、あたしたちは練習行っときますかー」

「一樹君、曲はどのくらいできそう？」

「明日には出来上がるよ」

曲のイメージは出来上がってるので、あとはそれをパソコンに打ち込むだけだ。

「あ、あはは……やっぱり一樹君ってすごいね」

そんな僕の返答に、花音さんは複雑そうな表情で声を漏らす。

その時の花音さんの表用に、若干寂しさを感じた僕だったが、何も言うことはできなかった。

「それじゃ、また明日ここに集合ってことで、今日は解散〜！」

そんな僕のことなどお構いなしとばかりに、日菜さんはそうまとめるのであった。

第36話 目処とスカウトと

「当日の見回りはどのような？」

「はい、そちらは——」

数日後、今日も今日とて文化祭の準備のために花女のほうで教師たちとの話のすり合わせを行っていた。

今日の話をもって、見回りのタイムテーブルを組むこともあり、責任重大だ。

「では、この内容で決まりということ、羽丘の生徒会長に伝えるように」

「はい。ありがとうございました」

内容もまとまり、先生に一礼をして職員室を後にすると、羽丘に戻るべく昇降口に向かって歩き出した

「一樹君」

「あ、紗夜」

そんな時、僕は紗夜に呼び止められた。

「今日も、話し合いだったのね」

「まあね。今日は最終確認といったところかな」

ここ数日ほど先生方との話のすり合わせに来ているので、いざ過ぎたしまえば感慨深いところがある。

「それよりも、練習見に行けなくてごめんね」

文化祭の準備が本格化してからという物の、Roseliaの練習を見に行くことができないでいた。

準備のほうもそうだけど、チュチュのバンドのほうの都合も影響しているのだが。

「大丈夫よ。湊さんも、一樹君が文化祭の準備で忙しいことは分かっているから」

紗夜は柔らかい笑みを浮かべてそう言うが、最後に“でも”と言葉を区切る。

「あなたに会えなくて、寂しい」

「……ッ」

頬を赤らめながら上目遣いで付け加えた紗夜に、僕は一瞬鼓動が早くなるのを感じた。

(そう言えば、ここ最近ご無沙汰だったもんね)

文化祭前までは、一緒に学園に行ったりキスをしたりとしていたが、ここ最近は何となく遠慮してそれができないでいた。

(今なら、大丈夫かな)

人気のないこの場所なら、軽く唇を触れ合わせる程度なら問題ない。

「紗夜」

そう自分に言い聞かせるようにして僕は、彼女の名前を口にする。

「一樹君」

対する紗夜も、僕の意図が伝わったのか、恥ずかしそうに目を閉じて受け入れようとしていた。

そんな彼女の唇に、僕は顔を近づけ――

「ツ!!」

ようとしたところで、僕の持っている携帯が嫡子の告げるように鳴り響いたため、慌てて僕たちは距離をとった。

「ご、ごめん。マナーモードにし忘れてた」

「い、いえ。電話出たほうがいいのでは」

顔を赤くして慌てながらも、僕は紗夜の提案に乗る形で、電話に出た。

「も、もしもし」

『木漏れ日工房の者だが、今の時間大丈夫かね?』

(ツ!!)

電話の相手が名乗った名前に、僕は思わず息をのんだ。

『木漏れ日工房』

そこは、僕のギターが壊滅的なダメージを折った際に修理を依頼したお店の名前だった。

(そう言えば、そろそろ半年が経つけど)

思い返すと、時間の流れはあっという間なんだなと、僕はあらためて実感していた。

「だ、大丈夫です」

『そうかい。お宅が頼んだギターの修理だが、終わるめどが立った』

電話先の店主の言葉に、僕はドキツとした。

「ほ、本当ですか!？」

『おうともさ。修理が終わる日になったら受け取りに来な。予定日は

一週間後の6月9日だ』

店主から教えてもらったその日は文化祭の二日目だった。

「朝伺っても平気ですか？」

『こちらは構わないがね。それじゃ、当日ギターを用意して待ってるので』

「ありがとうございます」

お礼を言って、僕は電話を切った。

「誰から？」

「修理屋から。ギターの修理が完了しそうだって」

電話を聞いていた紗夜が、電話を切るタイミングで聞いてきたので、僕は紗夜に先ほどの電話の要件を話した。

「良かったわね。ギターが直って」

「ああ。本当に良かったよ」

紗夜とのキスはお預けになったけれども、それでもギターが直るという一報は非常にうれしいものだ。

「文化祭が終わったら、みんなでセッションさせてほしいな。試運転もかねて」

「湊さん次第だけど、たぶん大丈夫よ。楽しみにしてるわね」

そして僕たちはその場で分かれると、僕は花女を後にするのであった。

(ギターのほうも修理が完了した。後はバンドのほうか)

羽丘に戻る電車の中で、僕は考えを巡らせる。

現在、僕たち Moonlight Glory は活動停止中だ。

それは、僕たちを守るためという理由もあるわけだが、最近になっ

てようやく色々鎮静化してきたと言いきり、活動開始も間近であると僕は踏んでいる。

日程が決まり次第連絡をよこしてくるって言ってたけど、そろそろ来る頃かな。

その時、再びスマホが震えだした。

先ほどマナーモードにしたので、今度は音が鳴ることはない。

僕はスマホを確認すると、どうやらメールが届いたらしく未読メールを知らせるメッセージが表示されていた。

(相原さんから)

僕たちのバンドのスタッフでもある相原さんからのメールだった。

(……思った通り)

そのメールを確認した僕は、一人ほくそ笑む。

そのメールはメールでの連絡を謝罪する文面からは始まっていた。

『当事務所では、ムングロの皆さんの安全面を考慮し、活動を停止としておりましたが、安全面が確保されつつあるという状況を考慮し、活動再開を決定いたしました。』

つきましては、今月末から月上旬のいずれかでライブを予定しております。詳しい日程に関しては、決まり次第ご連絡いたします』
そこでメールは終わっていた。

ついに活動再開も目前となつてきて、再び僕たちの歩みは始まるうとしていた。

(今度、みんなとライブのことで相談しないかね)

僕はそう考えながら外車窓を眺めるのであった。

「着いた……つと、あれ？」

学園の最寄り駅に着いた僕が駅を出ると、反対側の路線のホームで電車が来るのを待っている湊さんの姿が見えた。

(話しかけておくか)

無視するのなんだかあれなので、声をかけることにした僕は、ホームに向かって足を進める。

「今帰り？」

「美竹君。ええ、そういうあなたは今戻ってきたところ？」

「まあ、そんなところかな」

相変わらず湊さんの言葉はそっけない感じだが、さすがになれてきたものだ。

(もつと表情を柔らかくすればいいのに)

そんなことを口にしようものなら二人からの地獄の鉄槌は覚悟しなければいけないので、言いはしないけど。

「そう言えば、この間お願いした件だけど、どうかしら？」

湊さんや、啓介達には僕がチュチュのバンドにスカウトされ、お試し期間付きではあるが加入したことは話してある。

そうでないと、いずれ分かった時に色々と面倒ごとにもなりかねないからだ。

「ああ。あれについては今、潜入して監視してるよ」

「あまり、無茶はしないで。紗夜が悲しむから」

「言われなくても、そのつもりだよ」

湊さんの紗夜を気遣った言葉に、僕は当然だと思いながら頷いた。

(もう、あんな目に合わせるなんて御免だ)

だからこそその潜入なのだ。

「友希那先輩！ 美竹先輩！」

「ん？ 戸山さん」

僕たちを呼ぶ声がしたと思い、声のほうに顔を向けるところちらに向かつて駆けてくる戸山さんの姿があった。

その手には段ボールが三つほど積まれている。

おそらくは文化祭で使う道具だろう。

「文化祭の準備？」

「はい！ 私たち、文化祭ライブに出ます」

「……主催ライブは？」

段ボールを一度地面に置きながら答える戸山さんの言葉に、自然と湊さんの声も真剣そうな声色になる。

「主催ライブもやります。皆で一つずつ頑張って準備を進めているん

です」

「……なるほど」

戸山さんのいつになく真剣な目がそれが本気であることを告げていた。

二つのライブの準備を並行して行うことの大変さは、彼女達も想像はつくはずだ。

それでも、あえてやろうとするその熱意に、僕は舌を巻いていた。

「友希那先輩」

「何かしら？」

だが、彼女の話しには続きがあったようで、僕は二人の邪魔にならないようにと一歩後ろに下がり戸山さんと湊さんのやり取りを見ることにした。

「友希那先輩と美竹先輩たちにも私たちのライブと一緒に出てほしいです」

「……考えておくわ」

戸山さんのまっすぐなその目を見た湊さんは前向きな意味合いの保留という形で返事を出した。

きつと、湊さんだったらオファーを受けるだろう。

(それはいいんだけど、問題は)

「戸山さん。僕の幻聴だと思うんだけど僕の名前を出さなかった？」

「はい！ 美竹先輩にも私たちの主催ライブに出てほしいんですっ」

今度ははつきりと言われたので、僕の聞き間違いでも幻聴でもない。

湊さんですら驚いているのだ。

僕が驚くのも当然なのだ。

「ノリとか冗談で言ってるわけじゃないんだよね？」

「もちろんですっ。あ、でもムングロは活動が……」

僕たちがステージに立つとというのがどういう意味なのか、戸山さんは理解している……と、捉えることにした。

「……もうじき、活動再開だから、そこは問題ない。ただし、二つほど条件を付けさせてほしい」

今更僕達の置かれている状況に気づいたのか、はっとした表情を浮かべる戸山さんに僕はフォローしつつ、二つの条件を出すことにした。

「一つ。僕たちムングロが参加することは誰にも言わないこと。ポスター類にも名前は一切明記せず、シークレットゲストのような形にすること」

それは、戸山さんたちPoppin' Partyと彼女のライブに出演するバンドへの配慮だ。

Poppin' Partyの主催ライブは、おそらく時期的にも、活動再開直後のライブになる可能性は非常に高い。

そんな状況で、僕たちの出演が知られればどうなるかなど、想像するに難くない。

本当に見に行きたい人が見れなくなるのは、僕としても心苦しい。だからこそその配慮だ。

「二つ目。主催ライブまでの間、ミュージシャンとしてやってはならないことをしないこと。この二つの条件をのんで貰えるのであれば、前向きに検討させてもらいたいんだけど……どう?」

二つ目は一種の試験のようなものだ。

僕たちがライブに出るにあたって、彼女たちがミュージシャンとしての信頼に値するかどうかを見極めるための。

「……はい。たぶん大丈夫です」

「わかった。それじゃ、今後の連絡は中井さんを通じて行おうという方向でいくとしようか。よろしく頼むよ、戸山さん」

そして僕と戸山さんは握手を交わす。

「それじゃ、失礼しますっ」

話しが終わったのか、戸山さんは段ボールを再び持ち上げると、駆けて行った。

「大丈夫なの? あんな安請け合いして」

「まあ……ちよつとばかりもめるだろうけど、納得させるから大丈夫」
主にリーダーが反発するのは必至なだけに、気が滅入るが何とかなるだろう。

「それじゃ、僕も失礼するよ」
そして僕もまた湊さんの前から駆け足で立ち去るのであった。

第37話 リハーサル

「おーい！ 香澄……って、美竹先輩!？」

羽丘の校門前までたどり着くと、戸山さんを待っていた市ヶ谷さんに山吹さんにりみさんたちの姿が見えるが、僕の姿を見た瞬間三人の顔が引きつった。

「な、なんで美竹先輩が荷物持ってたんだよ」

「えーつと、なんだか持つてくれるっていうから、つい」

頭を掻きながら苦笑いを浮かべる戸山さんだが、こればかりは誰も悪くはない。

「すみません、段ボール持つてもらっちゃって」

「いやいや。同じ場所に向かっているのに、知らん顔はできなかった僕が勝手にやったことだから気にしないで」

戸山さんの目的地も羽丘で、僕の目的地も羽丘ならば、同じ方向に向かっているということになり、途中で彼女に追いついた僕は戸山さんから段ボールを二つほど分けてもらったのだ。

「ん?」

そんな時、全校放送を告げるチャイムが鳴り響いた。

『皆ーッ！ 合同文化祭記念バンドの公開リハをやるよー!』

僕たち全員の視線が校舎のほうに向けられる中間えてきたのは、我らが生徒会長、日菜さんの声だった。

『会場まではお・か・し、だよ！ 押さない！ 駆けない！ 知らない人にはついていけないっ』

「……は?」

なんだかいろいろとツツコミどころが満載だが、一つだけ聞き捨てならない単語を聞いたような気がした。

「市ヶ谷さん」

「は、はい!」

僕の声色に何かを感じたのか、市ヶ谷さんの声が何時になく裏返っていた。

「今の放送、最初のほうなんて言ってた?」

「えっと、合同文化祭記念バンドの公開リハをやるよ」と

市ヶ谷さんに確認したので、これも僕の聞き間違えではない。

「あの野郎、また勝手に……ごめん、ちよつと急用ができたからこれで失礼するよ。あ、段ボールここに置いておくね」

僕は校門の端に段ボールを置くと、彼女たちの返事を待たずに校内に向かって駆けていく。

生徒会長に小言を言うために。

「リハをやるとは聞いていたけど、公開リハをやる予定はなかったはずなんですけどね、生徒会長さんや」

「えー、どうせリハをやるんだったら公開でやったほうがるんつてしない?」

ちようど生徒会室前にいた日菜さんを捕まえた僕の追及に、日菜さんはしれつと答えてきた。

今日は、合同文化祭記念バンドのリハをやる日だったのだ。

楽曲のほうも完成し、各々が忙しい合間で自主練を行ってくれたおかげで、良い仕上がりになっていると思う。

後は、本番のように通しでやって大丈夫そうならこれで文化祭当日を迎えることができる。

そんな重要な役割があるこの日のリハを、後悔にするとはさすがの僕も想像できなかった。

「そう言う問題じゃないの。そもそもその予定の内容を勝手に書き換えるなつて言つてんの……まあ、どうせリハをやるんだったら観客とかがいたほうがいいのは確かだけどね」

そう言う意味では、日菜さんの行動は良いのかもしれないが……。

「とりあえず、僕たちも会場に移動するよ。もう丸山さん達はスタンバイしてるはずだから」

「うん、わかった」

予定を話したときには、リハをやる時間になったら講堂に向かってステージのチェックを行いつつリハを始めるようにと打ち合わせは

済んでいる。

結局僕も同罪だなど思いながら、僕達は講堂に向かって歩き出すのであった。

日菜さんの全校放送の影響で、講堂の出入り口前は生徒たちでごった返していた。

そんな中、裏口から入った僕達は

『勝手に予定を変更しないように』

という、先生たちからのありがたいお言葉を頂いて、講堂内に足を踏み入れた。

「怒られちゃったね」

「まあ、お小言だけで済んでラッキーだと思うよ」

突然のリハの公開という変更は、先生方のほうにも影響を与え、急遽講堂前の誘導を行う必要が出たのだから、お小言だけで済んでよかったというのが正直な感想だ。

『あー、あー。ゴホン。今日は、高校生活最後の思い出を——』

そんなやり取りを行動に入ったところではしていると、リハが始まったのか丸山さんのMCが始まった。

(囁むなよー)

MCも出だしは順調。

あと少しで完ぺきな場所だが、丸山さんはそういうところで囁むところがあるので、気が抜けない。

「頑張れーっ！」

「ちゅくりまちた！ あう~~~~っ」

日菜さんが片手を大きく振って応援するもむなしく、盛大に丸山さんは囁んだ。

「あちゃーっ」

「あーあ」

やっちゃったと言わんばかりに額に手をやる日菜さんの横で、僕は案の定と思いなが見ていた。

『それじゃー、いくよー!』

丸山さんにフオローなどをかけつつ、今井さんが流れを変えるように口を開いた。

『聞いてください。バイトをしている人たちへの応援ソングですっ』
生徒たちの歓声とともに、彼女たちの演奏は始まった。

明るいポップな曲調のそれは、バイトをして頑張る人たちに向けた応援ソングというだけあって、元気が湧いて来るような感じに仕上がっていた。

(うん。まあ、演奏とかも問題はなさそうだね)

丸山さんも音程をずらさずに歌えているので、このままいけば問題なく本番を迎えられるはずだ。

何より、見ている生徒たちのほうも楽しんでいる様子なので、それだけでも上々だろう。

最後の丸山さんのジャンプのタイミングもうまく決まって、演奏は無事に終わった。

そして、講堂内にあふれかえる歓声が、このリハが成功していることを証明していた。

「うーん! やっぱり、るんっ♪て、する! ね、一君」

「そうだね」

(この調子で、うまくいってくれればいいんだけど)

横ではしゃいでいる日菜さんに相槌を打ちながら、僕は心の中でこの文化祭が無事に終わってくれることを祈った。

だが、その時の僕は、知らなかったのだ。

この日のリハーサルの裏で、事が進んでいるということに。

何より、それが彼女たちのバンドを揺さぶる大事件に発展するということ。

★★★★★

同時刻、木漏れ日工房で一人の大男、増田権蔵ますだごんぞうがカウンターの受付の席に腰かけて電話をしていた。

「おう、久しぶりだな健太」

『ああ、いつ以来だ?』

「お前さんが、楽隠居するとか言いやがった時以来だから、十数年前だろうな」

増田と電話先の“健太”と呼ばれた男は懐かしむようで、それでいて挑発を仕合うような口調でやり取りをしていく。

「で、何のようだ?」

『彼、お前のもとに来たぞ?』

「おう、来たぞ! ものすごく懐かしいギターを持ってなつ」

増田は健太の威勢よく答えながら、カウンターを離れると、工房の作業台の上に置かれていた一台のギターの前に立つ。

『どんな感じだ?』

「ギターの状態で言うのであれば、上々だな。俺が最後に見た時と何一つ変わってねえ。大事に扱ってるのは手に取るようにわかる。さすがは、あいつの息子だ」

そのギターを見る増田の表情は、まるで懐かしい思い出に触れているような、儚さがあった。

『素質はどうだ?』

「わからねえな」

そんな増田の感慨を吹き飛ばすように問いかける健太に、増田は投げやりな感じで答えた。

『おいおい。楽器を見れば、そいつがどこまで行けるか、その才を見ることが出来るお前の言葉とは思えないぞ』

「言ってる。そもそも、俺は、超能力者じゃねえ。俺はあくまでも楽器から発せられるオーラを見て行ってるまでだ」

『オーラ、か?』

吐き捨てるように言う増田の言葉に、興味を抱いたのか健太が単語を口にする。

「才があり、できるやつにはオーラが出る。そのオーラの濃淡で、そいつはまだ上に行けるかがわかる。こいつの元の持ち主はかなり濃かったが、彼の濃さはあいつの都比べられねえくらいに濃かった。あ

のギターのリミットが無くなれば、あれは世界一の腕前にまでなるだろうな」

『そうか……ただものではないとは感じてはいたが、やはり、遺伝というのは恐ろしいものだな』

健太の言葉に、増田は“全くだ”と相槌を打つ。

『それで、解除したりリミットに関して、彼には説明はするのか?』
「しないに決まってるんだろ」

健太の問いかけに、男は鼻で笑いながら否定する。

「こういうのは口で言うよりも、感覚でつかんだほうが手っ取り早い。きつと驚くだろうな。このギターの音を鳴らしたら」

そう口にする増田の口元は微かに笑みを浮かべていた。

『ほんと、お前は楽器馬鹿だな』

「るせえ」

『そうだ。俺もそろそろ社長の座に復帰することになった』

そんなやり取りをしていた時、思い出したように健太が増田に告げた。

「おー、これでお前も隠居じゃねえってか」

『岡田が俺に泣きついてきてな。十分休んだし、ここらが潮時だと思っただのさ』

「ははっ。また面白くなりそうだな。お前のとこの事務所、チエリーレベルは……っと、今は何て名前だった?」

事務所の名称を言いかけた増田は、自身が間違えていることに気づき、言葉を止めると健太に問いかける。

『いい加減覚えろ。俺の事務所の名は』

健太はそこで言葉を区切ると

『“Purely Promotion”だ』

と告げるのであった。

第7章、完

第8章 『合同文化祭』 第38話 ライブの知らせ

「あれ、チュチュからだ」

公開リハを終え、上々の結果でいい日を終えた僕が自室に戻ると、サポートミュージシャン用の携帯電話が着信があったことを光で知らせて来たので、確認して見ると相手はチュチュからだった。

僕は電話をリダイヤルでかけ直した。

『Hello、クレア。ようやく電話してきたわねっ』

「申し訳ない。ちよつとばかり取り込み中だったもんでね」

電話に出たチュチュはどこか不機嫌そうな厭味を込めた挨拶をしてきた。

『まあいいわ。用件は二つよ。まず一つ。バンドの名前が決まったわ』

「おー、それはそれは」

これでもうやく彼女たちをバンド名で呼称することができる。

『We are RAISE A SILEN! 略してRASよ』

！ 私の最強の音楽でガールズバンド時代を終わらせるっ!』

チュチュの宣言はともかくとして、バンド名は中々にセンスがある。

直訳すれば『スイレンを持ち上げる』という意味になる。

チュチュの言葉から察するに、『幕を上げて表舞台に出ろ!』的な意味合いなのかもしれない。

『明日から毎日スタジオに入りなさい! ファーストワンマンライブまでに、最高の状態に仕上げてあげるっ』

(明日からか……まあ、幸い文化祭の運営側もクラスの出し物も良い感じに終わってるから、可能っちゃ可能か)

「了解。で、そのライブの日程は?」

『それは——』

(あちやー)

チュチュから日程を聞かされた僕は、思わず頭を抱えた。

(見事に文化祭の日程と被ってるな)

二日にわたって開かれるライブは来週末。

要するに、文化祭の開催日だ。

流石に生徒会役員が、二日とも休むわけにはいかない。

「チュチュ、申し訳ないがその日程は無理だ」

『はあ？ あなた何言ってるの？』

なので、素直に告げたところ、呆れたような声で返ってきた。

「その二日間、どうしても外せない仕事があつてね……出るのは難しいんだが」

『クレア！ これは私たち最強のバンドの伝説の一步となる大事なライブなのっ！ それを——』

「だったら、せめてどっちか一日だけでも休ませてほしいんだけど」

僕の淡々とした口調に怒りが頂点に達したチュチュが声を荒げるのを遮って、僕は一つの折衷案を出す。

『どういうことよ？』

「つまり、どちらかの日程のライには出て、もう一日は休みにするということ。こちらにも仕事がある以上、二日間も休むことはできない。でも、一日だけなら何とか休みは取れそうだ」

『……………』

僕の言葉に、チュチュは押し黙る。

0か100か。

その選択肢なのだ。

『OK。それでいいわ』

「ありがとうございます」

僕の狙い通り、チュチュは僕の提案を呑んだ。

『その代わり、ライブではSweetでExcellentな演奏をしなさいっ』

「もちろん、出るからには全力を出させてもらおうよ」

そう言って、僕は電話を切った。

(これで、どっちを休みにするか……)

僕は携帯のスケジュール管理用のアプリを起動させて考え込む。どちらを休んでも差しさわりのないが、出来れば初日ぐらいは、文化祭のほうの見回りなどで立ち合いたい。

(それじゃ、初日を休ませてもらう……)

そこまで考えたところで、僕は唐突にあることを思い出す。

(そう言えば、ポピパの文化祭ライブって、二日目にあつたよな)

夕方の戸山さんの言葉を聞き間違えてなければ、間違いない。

花園さんは、RASのサポートとしてメンバー入りをしている。

つまり、ライブにも出演するということであり、思いつきりダブルブッキングの状態だ。

「どうするんだろう、花園さん」

思わず口を継いで出てきた言葉だが、それでも不安は募る。

(僕が動くわけにもいかないしな……)

クレア＝美竹一樹だと知られるわけにはいかない。

もし、花園さんに下手なアプローチをすれば、バレル可能性は高い。

既にバレているかもしれないが、“可能性”があるというだけでまだバレているとは限らない以上、下手に動くべきではない。

(とりあえず、様子見……それしかないか)

ちようど明日チュチュに直接休む日程を伝えようと思っていたので、その時にでも根回しを試みるのもいいかもしれない。

そんなことを考えながら、僕は閉じていたカーテンを少しだけ開けて、夜空を仰ぎ見るのであった。

空は、曇っていて星の一つも見えなかった。

B a n g D r e a m ! ~ 隣を歩む者 ~ 第8章 『合同文化

祭』

翌日の朝。

ちよつと早めに家を出た僕が訪れたのは、チュチュの住むマンション兼、練習スタジオだった。

「おはようございます！ クレアさん」

「おはようチュチュ、パレオさん」

スタジオに入る僕を出迎えるパレオさんとチュチュの二人に挨拶を返した。

（パレオさんって、ここに住み込み？）

「クレア。ちようどいいところに来たわ」

朝からいるので、住み込み過去の近辺に暮らしているのかと考えていると、チュチュが口を開く。

その口調からは、怒った様子はなかったもので、機嫌はいいようだ。

「ちよつとそこに立ちなさい。パレオ」

「はい、チュチュ様っ！」

チュチュの指示に困惑する僕をよそに、名前を呼ばれたパレオさんは、とてもいい笑みでダブルレット端末つを取り出した。

「クレアさんのステージ衣装の採寸をしますね。両手を開いて、前を向いてください」

「は、はい」

とりあえず、パレオさんに言われた通りに立っていくと、パシヤリというシャッター音が聞こえた。

「横向いてください」

そして、続くようにパレオさんからの指示が飛ぶ。

（今は衣装の採寸もデジタルでやるもんなんだね）

「はい、オツケーです☆」

便利になったもんだなーと年寄り臭いことを考えていると、採寸が終わったようにパレオさんはチュチュの横に戻っていく。

「それで、クレアの用事は何？」

「昨晚の電話の一件のことで」

僕のその言葉にチュチュの表情が不機嫌なものに変わった。

ある意味わかりやすい人だなと思いつつ僕は用件を口にする。

「まずは、無茶な願いを聞いてもらってありがとうございます」

最初に僕はあたあを下げて無茶を聞いてくれたことのお礼の言葉を口にする。

何事も、礼儀は大切なのだ。

「……お礼なんて必要ない。昨日も言ったはずよ。SweetでExcellentなライブにして。それが条件よ」

「もちろん、そのつもりだよ。それで、日程だけど二日目のほうを休みにしてもらいたいんだけど」

「……………」

僕の提示した日程に、チュチュは顎に手を当てて考え込むような仕事をする。

「まあ、いいわ。クレア、あなたの休みを許可するわ」

「ありがとうございます」

考えた末に、チュチュから休むことの許可が出た。

なんだかおかしいような気もするが、バンドに所属している以上、リーダーたるチュチュが領かないことにはどうしようもないのだ。

「初日だったら、無理だけど、まあ二日目だったらNo, problem」

(あ、やっぱりそっちなんだ)

さすがに門出の……しかもしよばなで休みというのは無理だったようで、ある意味僕の読み通りの展開になった。

「そう言えば、花園さんは何か言ってた?」

「ハナゾノ? そういえば、日程を言ったら少しだけ考えこんでいたような感じだったけど……何も聞いてないわね」

(もしかして、言い出せなかった?)

僕はチュチュからの“それがどうかしたの?”という問いに適当にはぐらかしながら、僕は彼女のことについて考えを巡らせる。

もし、ダブルブッキングのことに気づいていないのであれば論外だが、気づいていたうえで何も言わないというのであれば、言い出し辛かったかもしくは何らかの算段があるか……。

いずれにせよ、僕にできることが様子を見ることしかない時点で、これ以上踏み込むのは危険だ。

なので、僕はそれ以上踏み込むのを止め、スタジオを後にするのであった。

第39話 我儘

羽丘に登校して、いつも通りに授業を受け、文化祭の準備を進めていた僕だったが

「で、話してもらおうか」

屋上で田中君や啓介と言ったMoonlight Gloryのメンバーに囲まれて詰問されていた。

「えっと……」

「もちろん、知らないとは言わせないぜ。これはどういう意味だっ」

どのように返せばいいのかを考えている僕にしびれを切らした田中君が、僕にスマホの画面を突き付けながら地球してくる。

それは、僕が送ったメールだった。

『ポピパの主催ライブに参加する』って、何かの冗談かと思ったぞ
「冗談で言ったりはしないよ」

「知つとるわ！ だから聞いてんだよ」

どうやら、今日は田中君の虫の居所が相当悪いようだ。

「はいはい。聡志落ち着きなって。そんなに閣下してたら一樹が答えられないでしょ」

「……つち」

そんな田中君を諷めるように森本さんが割って入ると、バツが悪そうに舌打ちをして後ろに下がる。

「僕たちのバンドの活動再開日が、ポピパの主催ライブの予定日とほぼ同じだって言うのは分かるよね？」

「ええ。スタッフからそう聞かされてるわ」

「でも、それがどうしてポピパの主催ライブに参加するということになるんだよ？」

バンドの活動再開とポピパの主査ライブへの参加が結びつかないようで、啓介は首を傾げていた。

「僕たちは、目的を達成するため、活動を再開したらまた前に進んでいく。立ち止まったり後退するなんて選択肢は一切ない。ここまではわかるよね？」

だから、僕は皆にもわかりやすく説明をすることにしたのだ。

「でも、同年代の人たちのバンドのライブに出たいって、僕は前から思っただけなんだ。ただ、その機会もなければ、余裕もなかったからできないで今まで来ていた。そんな中、僕に出演のオファーを出してきたのが」

「ポピパって、言うわけか」

僕の言葉を引き継ぐように声を上げる田中君に、僕は頷いて答える。

それは僕の一つのわがままだった。

同じ年代の人たちのバンドが出演するライブで思いつき楽しみたいと思っていた。

ただ、その機会もなくズルズルといった結果バンドは活動休止となってしまうていたのだが、ちょうどいいタイミングで戸山さんが僕たちにオファーを出してきたのだ。

それに運命を感じたからこそ、僕は快諾したのだ。

「とはいえ、俺は反対だ。リスクが高すぎる」

「俺も反対」

「私も、反対かな。なんだかPoppin, Partyのほうで何か不穏な出来事が起こっているみたいだし」

「どういふこと?」

僕の予想通り、猛反対を受けたわけだが、そんな中、中井さんの言葉に引っかかりを覚えた僕は、詳しく聞いてみることにした、

「さつき、市ヶ谷さんが白金さんに、文化祭ライブのスケジュールの変更について話しているのを聞いたの。なんでも、花園さんがダブルブッキングしているらしいからって」

「……」

「どうやら、彼女たちの結論は何とかして間に合わせるといったものだったようだ。」

「とはいえ、本当に可能なのだろうか?」

「たしかに、ライブの予定終了時刻は、急いで行けば一番最後の開始時刻に間に合う。」

だが、ライブというのは何が起こるか分からないのだ。

予定通りに行くこともあれば、アクシデントが起こることだってある。

「これは僕のがままだ。嫌だとは思うけど、聞いてほしい」

それでも、僕の意味は変わらなかった。

「……私は、別にいいと思うわよ。一度くらい、楽しいライブをしたっていいじゃない」

その僕の言葉に折れるように、最初に賛同したのは森本さんだった。

「はあ……まあ、一樹が言い出した時点でこうなるのは目に見えてたけどな」

「あはは……私も賛成、かな」

「じゃ、俺も賛成するしかないじゃないか」

嫌々だったり、呆れたりなどなど、反応は様々だったがそれでもみんなは僕のがままを聞いてくれた。

「んじゃ、俺は事務所のほうに確認を取ってくる。ま、行けるだろうけどな」

「俺は、文化祭の準備でもしようかな」

そんなこんなで、僕は何とかポピパの主催ライブにゲスト出演することができるようになった。

(とはいえ、それもこの文化祭で流れは決まるだろうけど)

中井さんが指摘した P o p p i n , P a r t y の不穏な空気。

それが、何事もなく終われば、参加は可能だ。

だが、もし万が一のことがあれば、賛成という空気は一転して反対という風が変わっていくことになる。

(何も起こらなければいい……なんて、願いはきつとかなわないだろうなあ)

なんとなく、僕も感じているのだ。

不穏な空気、というものを。

「あ、美竹君。ちょうどいいところに」

「先生？ 何か御用で？」

屋上を後にして教室に戻ろうとした僕を呼び止めたのは、文化祭の実行委員の担当の先生だった。

「実は生徒会に、資材置き場の資材の確認をしてもらいたいので。」

「資材の確認……ですか？」

先生の頼みごとに、僕は首を傾げる。

（資材の確認って、文化祭の人の役割だったはずだけど）

「実行委員の役割なんだけど、ちよつと手が空いてなくて」

僕の疑問は、先生の言葉で解決した。

手が空いていない理由は、間違いなく、合同文化祭だろう。

例年よりも作業量が倍になっているという嘆きがりサさん経由で僕のほうに伝わってきたので間違いない。

（これもまた課題だよな）

どのようにして作業を効率化させるのかは、要検討だろう。

もつとも、来年もやるとは限らないけど。

「わかりました。チェックはどのように？」

「助かるわッ。このリストのほうに残っている資材を書いてもらえばいいわ。終わったら私のところに、その容姿を届けるように。それじゃ」

先生は、ぱあと嬉しそうな表情で言うと、僕にリストを渡して、足早に去って行った。

リストにはベニヤなどの資材名が記されており、その横に個数を書く場所が作られていた。

（さてと、早くやっちゃうか）

なんだか面倒ごとを押し付けられた感がすさまじくするけど、それを頭の片隅に追いやると、僕は資材チェックを行うべく、資材置き場に向かうのであった。

（えっと、資材のほうはこれで良しっと）

資材チェックはものの十分程で終わった。

「それじゃ、このリストを先生に渡して——」「美竹君、ちよつといいかしら」——あ、はい。何でしょうか？」

チェックした資材が記されている用紙を担当の先生に渡しに行こうとした時、女性教師が声をかけてきた。

（あの人って、確か体育講師の人だったっけ）

このチェックを頼んだ先生とは別の人なだけに、嫌な予感がした。「申し訳ないんだけど、体育館倉庫の備品の確認をお願いしてもいいかしら？ この時期になると無断で備品を持ち出す生徒がいたりするから」

「あー……わかりました」

やはり、応援要請だった。

しかも、今度は備品チェックと来た。

「ありがとう。このリストに備品の数を書きだして終わったら私のところに提出してもらえるかしら？」

「はい」

先生から備品のチェックリストを受け取り、返事をした僕は資材チェックのリストを提出するべく、職員室に向かうことにした。

「失礼しました」

「一樹君」

職員室を後にして、今度は体育館倉庫の備品チェックを行うべく、体育館のほうに移動しようとした時、僕を呼び止める者がいた。

「ん？」

その声のほうに視線を向けると、そこには花女の制服を身に纏った紗夜が立っていた。

「紗夜、どうしたの？」

「いえ。ちよつと用があつてこつちに来たので。もしよければ、手伝うわよ」

柔らかい笑みを浮かべていくる紗夜に、僕は

「それじゃ、お言葉に甘えようかな」

そう言つて手伝いをお願いするのであった。

「一樹君、バスケットボールは38球よ」

「ありがとう。38つと」

体育館倉庫に移動した僕と紗夜は、二人で備品チェックを進めていた。

「これで、一通り見れましたね」

「うん。ありがとう。紗夜のおかげだよ」

「いえ。私はただ一樹君の手伝いをしただけよ」

紗夜はそう言って謙遜するが、実際のところ紗夜の活躍によるところが大きい。

紗夜の動きは、全く持って無駄がないのだ。

「それにしても……」

僕は一度言葉を区切ると、紗夜じつと観察してみた。

「な、なによ？」

「いや、なんだかここで花女の制服を着ている紗夜の姿が新鮮でね」

そもそも、紗夜は花女の生徒なのだから、ここに來ることなんてそうそうないのだが、それ故に新鮮さが増しているのだ。

「ツ！ も、もう、そんなこと言っていないで、早く出るわよ——きやつ!?!」

そんな僕の言葉に顔を赤くして足早に体育館倉庫を立ち去ろうと足を踏み出した時だった。

紗夜が床の段差に足を取られて前のめりに倒れかけていたのだ。

「危ないっ」

僕は慌てて、紗夜のほうに飛び込むように地面を蹴った。

「いつツ！」

背中に鋭い痛みが走る。

「か、一樹君!?! 大丈夫?!」

「大丈夫。紗夜はどう？」

でもその代わりに最愛の人を守ることができたのだから、こんな痛みなんて、へっちゃらだ。

「私は平気だけど……ごめんなさい。私がつともしっかりしていれば」

「気にしないでいいよ。紗夜が無事だったら、それだけで僕はうれしいんだから」

自分を責める言葉を口にする紗夜に僕は頭を撫でながらそう語りかける。

「一樹君……あ」

そんな時、紗夜は何か気づいたのかいきなり固まると顔を赤くし始める。

(あ……)

そこで初めて僕も、自分たちの体制に気づいた。

床で抱きしめ合う僕と紗夜。

目の前には紗夜の顔があり、紗夜の柔らかい場所が僕の体に押し付けられているという状況に。

そのことに意識が向いてしまった僕の鼓動が、少しだけ速まっただけ。

「紗夜」

「だ、だめよ。誰かが来ちゃう」

「この時期にここに来るような人は滅多にいないよ」

恥ずかしそうに体育館倉庫の出入り口のほうを見る紗夜に、僕はそう答える。

「だ、だけど、こんなところでなんて……」

「キスだけでも……ダメかな？」

なおも恥ずかしがる紗夜に、僕はそう提案をした。

「……それだけだったら」

視線を右往左往させながら悩んだ末に、紗夜はOKを出すと、静かに目を閉じた。

「んっ」

そんな彼女の唇に僕は自分の唇を合わせる。

「チュ……」

最初は軽く合わせるだけのキスだった。

僕たちはそれを何度も何度も繰り返していく。

「ふはあ……」

長い時間、そうしていたかのような錯覚を覚えるほど、僕たちはキスをし続けていたが、どちらからともなく唇を離れた。

「どう？　紗夜」

「わ、わからないわ。なんだか、頭がぼーっとしてて」

そう答える紗夜の表情は頬がほのかに赤みを帯びており、自分の口元に指をそつとあてていた。

「きやつ」

その姿がとても魅力的で、気が付けば僕は体を反転させて、今度は僕が紗夜の上に覆いかぶさるような姿勢にしていた。

「紗夜、いい？」

地面に横たわった紗夜は顔を赤くして口元に指をあてたまま、静かに目を閉じる。

僕はそれを承諾と受け取るのであった。

第40話　そしてライブは始まる

「あれ、おねーちゃんと一君どーしたの?」

「べ、別に何も無いわよ」

「ちよつと備品チェックを手伝ってもらったんだ」

(あ、危なかった)

服装の乱れを整えたのと同じタイミングでやってきた日菜さんに、僕は冷や汗をかきながら心の中でつぶやいた。

「ふーん。あ、そうだ! さっきね、向こうのほうでつぐちゃんがいたから手伝いにいこーよ!」

何とか日菜さんには怪しまれずに済んだようだ。

「わ、私も行くわ。ちよつど手が空いていたところだから」

「ほんとっ!?! わーいつ! おねーちゃんと一君が一緒だともう、るるんっ♪ な気分だよっ!」

取り繕うように紗夜も手伝いを買って出ると、たちまち日菜さんは嬉しそうに飛び跳ねだした。

「はあ……早く行くわよ。羽沢さんを手伝うんでしょ」

「あ、そうだった。それじゃ、しゅっぱーっ!」

そんなわけで、僕たちはつぐの手伝いをするべく体育館倉庫を後にするのであった。

ちなみに、これは余談だが。

「あたし、もしかして邪魔しちやっただ?」

「……気づいてたんだ」

移動の途中、紗夜に聞こえないようにするためか小さい声で聞いてきた日菜さんに、僕はまるで刑を執行される寸前のような気持で相槌を打った。

「なんか、一君とおねーちゃんがもやっとしてたから、邪魔しちやっただのかなって思ったんだけど」

「ううん。日菜さんは邪魔なんてしてないよ」

不安そうに聞いてくる日菜さんに、僕はそう答えた。

(それ以前の問題だしね)

あの時、紗夜さんの怯えた様子に、僕はその手を止めてしまったのだ。

日菜さんが来たのはちょうどそのタイミングだったのだ。

「んー、ならいいんだけど」

それ以上、日菜さんは追及してくることはなかった。

それから数日後の夜。

僕はチュチュのマンション件、スタジオで花園さんと共に練習に励んでいた。

「OKー、とてもPERFECTな演奏だったわ!」

一通り曲の演奏を終えると、外で聞いていたチュチュから合格の言葉が出た。

「ふう……」

合格の声をもらった瞬間、張り詰めていた緊張の糸がとほぐれたのか、横にいた花園さんが静かに息を吐きだす。

「今日の練習は終わりよ。話があるからこつちに来て頂戴」

「畏まりました。チュチュ様っ」

チュチュの言葉に、真っ先にブースを出たのはパレオさんだった。

その後、マスキングとレイヤさんに花園さんが続く。

「明日はいよいよRASの伝説の一步となりうるライブよ! 全員Bestを——」

そう、チュチュの言うとおり、ついにRASの初陣となるワンマンライブが、明日に控えているのだ。

(状況としては上々だけど……)

花園さんも元々のスキルが高いだけに、教えるのにそれほど苦労もなかった。

というか、いつの間にか十分なレベルになっていたので、僕の出番はなかったも同然だけど。

他のメンバーも悪くない仕上がりがりだ。

これなら、初日のライブは盛況のうちに幕を閉じるだろう。

だが、一株の不安はある。

「それじゃ、今日は解散。体調をPERFECTな状態にしておくように」

チュチュのその言葉で、この日は解散となった。

「花園さん」

「はい。何ですか？ クレア先輩」

皆が帰る中、僕は花園さんに声をかけることにした。

「二日目のライブを、あなた一人に押し付けるような形になって申し訳ない」

「気にしないでください。クレア先輩にとって大事な用事ですから」

つくづくいい子だなと思ってしまいが、彼女は僕の正体に気づいているのかがものすごく気になる。

「でも、花園さんも用事とかはないのかい？」

「私、ですか？」

僕が聴き返すと、花園さんは呆けたように返してきたので、僕はさらに深く切り込んでみることにした。

「もし、用事があるのであれば、今からでもチュチュに頼んで君と休みを交代させてもらえるようにするけど……」

「……ッ！」

僕の言葉に、花園さんははつとした表情で目を見開かせると息をのんだ。

正直、これはかなり危ない橋だ。

「だけど、それをしてでも言っておかないと、僕には耐えられそうにないのだ。」

何かがあった時の罪悪感に。

もちろん、もしお願いしてきたら責任を持ってチュチュと話し合うつもりだ。

かなり難しいとは思うけど。

「……大丈夫です。お気遣い、ありがとうございます」

だが、花園さんから返ってきたのはそんな言葉だった。

「そうか。可笑しなことを言ってしまったってすまないね」

僕は取り繕うようにそう返すと、花園さんに挨拶をしてそのままその場を後にした。

(……………)

僕の不安をよそに、ついにライブの日を迎えるのであった。

そして、迎えたライブ当日。

僕たちが訪れたステージ会場となるライブハウスは『dub』。

Roseliaの主催ライブの会場にもなった場所だ。

キャパは約千人ほどという中々の規模の場所で、音響などにもこだわっておりそういう意味では有名なライブハウスだというのが大和さんの話だ。

チュチュいわく、伝説の一步となる初陣にはもってこいの場所でもあった。

コンディションとしては、ばっちりでいい演奏ができる自信はあった。

だが、一つだけ問題が発生した。

「クレアさんもここで着替えましょうよ〜」

「いや、それは……………」

そう、着替えだ。

「クレアー、そんなに強情になんなくてもいいんだぞー」

パレオさんが一緒に着替えるように言ってくるたびに、断る僕にマスキングが呆れた様子で言ってくるが、強情になったほうがいいのだ。

なぜなら、僕が男だからだ。

男が女性のいる場所で着替えるというのは、ものすごくやばい。

何せ上下ともに服を着替えるのだから。

こんなところで着替えれば、僕が男であることがバレるのは必至。

いや、まだ男であるとバレたほうがましだ。

一番やばいのは、女性陣の着替えを見た場合だ。

(うん。間違いなく、死ぬる)

僕の明るい明日を守るためにも、ここは何としてでも乗り越えねばならない。

「私は、人前で着替えるのが嫌いなので、お手洗いで着替えてきますっ」

「あ、クレアさ——」

パレオさんの言葉を聞くことなく、僕は衣装一式を手に楽屋を出ると、足早にトイレに向かうと、素早くステージ衣装に着替えた。

(スカートじゃなくてよかった)

ステージ衣装はズボンタイプだったのも僕にとっては幸いだ。

これがスカートだった日には、めでたく黒歴史の誕生だ。

(はあ……性別ぐらい公表しておけばよかった)

そうすればこんな苦労はせずに済んだはず。

とはいえ、そうなると今度はチュチュにスカウトされることもなくなるので、それはそれで複雑だ。

とりあえず、サングラスをかけてトイレを後にした僕は、さっきまで着ていた服から取り出しておいた携帯である人物に電話をかける。

『はい、どうしました？ 兄貴』

「あ、特に何でもないんですが、状況はどうでしょう？」

相手はマツさんだ。

僕はマツさんに、早々に問いかけた。

『へい。特に異常はありません。不届きな輩は一人も来てないので安心して下さい』

「すみません。本当はこういうことをすることは無いのに」

僕がお願いしたのは、この日だけの用心棒だ。

僕は一日だけ文化祭に参加できなくなる。

その間に何が起こるかわかった物でもないのですが、そういう不測の事態が起こった時に対処してもらえよう、マツさんに護衛をお願いしておいたのだ。

とはいえ、対象は学生とかではなく紗夜と日菜さんだけ。というよりも二人のことが心配だからお願いしたのだ。

何せ、阿久津ややらかしどもの一件が尾を引いていないとは言いきれないのだ。

念には念を入れておいても損ではない。

『謝らないでくださいな。好きでやっていることですから』

「ありがとうございます。引き続きお願いします」

マツさんの言葉に感動しながらも、僕は電話を切ると楽屋のほうに足を向けるのであった。

「会場、観客がすげえ来てるんだって？」

「はい！ チュチュ様がメディア関係者の方も招待されたそうで、色々な場所に同時配信も行っているそうですっ」

「凄まじいくらいの力の入れようだ……」

楽屋で、ソファアに腰かけながら本番を待つマスキングの問いかけに、先ほどから立ちっぱなしのパレオさんが答えた。

一体、どのようにチュチュが自分のバンドを売り込んだのか……それが気になるところだが、期待値的にはかなりのレベルに行っているのは間違いない。

「まだ、始まらないの？」

そんな中、楽器をいじっていた花園さんがじれったそうに口を開く。

現時点で、本来であれば開場してライブの準備に取り掛かっているころなのだが、まだ開場はされていない。

さつき楽屋の外に出た時に小耳にはさんだのは、チュチュアステージの最終チェックを行っているという情報だった。

「チュチュが、ステージの最終チェックをしてるらしいよ」

「15分押しですね」

パレオさんに言われて壁に駆けられている時計を見ると、確かに会場時刻を15分オーバーしていた。

「それだけ本気ってことだよ」

「Yes。当然よ」

レイヤさんの言葉を肯定するように、楽屋のドアを開けて中に入ってきたのは、話しに上がっていたチュチュだった。

「レイヤ、マスキング、クレア、パレオ」

「はいー！」

僕たちの顔をしっかりと見ながら呼ばれた名前に、パレオさんだけが反応した。

「今日のライブが私のバンドの最強伝説の始まりになるわ！」

“最強伝説”。

あえてそう言ったということは、チュチュにはそれだけの確信めいた何かがあるのか、それともただの士気を高めるための言葉なのか。

どちらなのかはわからないが、それでも目の前の少女、チュチュの本気度は嫌というほど伝わってくる。

「ハナゾノー！」

「ッー！」

突然名前を呼ばれた花園さんが肩を震わせた。

「あなたはサポートとはいえ、今この時はRASのギタリストよ。一緒に表舞台に立ちましょ」

「つ……震えさせえ見せる」

チュチュがかけた言葉で、花園さんもいい感じに燃え上がっていた。

「さあ、そろそろ出番だから、移動するわよっ」

「はいッ、チュチュ様」

「よし、行くかクレアパレオ」

「ええ」

「行こう、ハナちゃん」

「うん」

チュチュが続いてパレオさん、マスキングに続いて僕が、そしてレイヤさんに続いて花園さんという順番でステージのほうに移動していく。

(さて、どんなステージになるのか……楽しみだな)

ステージに移動するまでの間、僕には緊張などなかった。

当然と言えばそうかもしれないが、仮とは言えよそのバンドのメンバーとしてステージに立つというのは、また違った意味で緊張するものだ。

でも、僕には不安はない。

このライブが成功することを信じて疑っていないからなのかもしれない。

そして、僕……RASのライブが今始まるのであった。

第41話 嵐の文化祭

「Sweet, Excellent, Unstoppable! 最高のステージだったわ」

1日目のライブは僕の予想通り盛況のうちに幕を閉じた。

チュチュの興奮するのも無理はない。

「ハナゾノっ！ クレア！ 二人とも最高だったわよ」

「ッ！ ありがとうございます」

「どうも」

名指しで評価されたことがうれしかったのか、花園さんは顔を綻ばせながらお礼を言い、僕は緩む表情をこらえながらできるだけぶつきらぼうに返した。

でも、たぶん緩んでは思うけど。

(にしてもまさかの2回も、アンコールが来るとは思ってもいなかったな)

このバンドのレベルなら、たとえ初陣だとしてもアンコールが来るのは不思議ではない。

だが、アンコールの回数が予想よりも多かったのが気にかかる。

(明日は合同文化祭でのPoppin' Partyがライブをする。タイムテーブルは一番最後……通常通りに終われば間に合う時刻だが……)

僕の頭の中でいろいろなシミュレーションをしていく。

二日目も、今日と同じ時刻で終わったと仮定して、ここから羽丘に向かった場合の所要時間を計算していく。

(大丈夫。ギリギリではあるけど、MCで時間を稼げば間に合う……か)

僕の記憶が間違いでなければ、Poppin' Partyの前は合同文化祭記念バンドのはずだ。

(……後で、丸山さんに連絡をしておこう)

当日言うとは確実にとちる。

ただでさえとちりやすいのだから、事前に言っておいたほうが無難

だろう。

「明日はクレアは休みなんだろう？」

そんな考え事をしている僕に、マスキングから声がかけられる。
「ええ。どうしても外せない用事があつて……申し訳ない」

「別にいいわ。約束通り、SweetでExcellentなライブをしたんだから、こちらも約束通りクレアの休みを許可する」

「ありがとう、チュチュ」

とりあえず、僕の問題は何とかなりそうだ。

「でも、残念です。パレオ、クレアさんと明日も一緒にライブをしたかったです」

そんな中、パレオさんは残念そうに声を上げだした。

「まあ、クレアと一緒にライブなんて、これからいくらでもできるんだし。だろ？ クレア」

「え？ え、ええ……まあ」

パレオさんへのフォローの言葉で、こちらに振ってきたマスキングのその言葉に、僕はまるで魔法が解かれたようにはつとした。

(僕、完全にのめりこんでた)

これまでは、監視のためという理由をつけていたが、気づけば僕は純粹にこのバンドの一員として演奏することが普通になっていた。

このバンドから離れるということを考える余地が一切ないほどに。

(いけない、いけない。目的を忘れたらだめだ)

僕の目的は、あくまでもRoseliaに……大事な人に危害を加える可能性のあるチュチュを監視すること。

僕は、自分自身にそう言い聞かせる。

そして、僕たちはそのまま次の日のライブの打ち合わせに入るのであつた。

翌日、僕はいつもより早めに家を出ようと玄関で靴を履いていた。「つぐから聞いた時間よりもかなり早いけど、義兄さん時間間違えてるんじゃない？」

そんな僕に、蘭が不思議そうに声をかけてくる。

「ちよつと寄るところがあるから、早めに行くだけだよ」

「それならいいけど。てつきり義兄さん、時間でも間違えたのかと思っただ」

蘭は特に深く聞いてくることもなく、どこか含みのある言い方で返してくる。

「さすがに僕はそんなに抜けてないよ。それじゃ、行ってきます」

そして僕は、家を出るのであった。

足取りはいつにもまして軽やかで、早歩きにも近い速さになっていた。た。

(早く、手にしたいな)

その気持ちだが、僕を前へ前へと進めているのだ。

そこまでして僕が手にしようとしている物は、修理に出していたギターだ。

木漏れ日工房から言われた受け渡しの日が今日なのだ。

(今日は触れそうにないから、明日の放課後辺りにでも……)

久々に触る僕のギター。

かなりのひねくれもののギターだが、やはりもう一度弾けるとなると感慨深いものがある。

そして、僕は電車を乗り継いでいき、木漏れ日工房の前までたどり着いた。

「失礼します。ギターの修理をお願いした美竹ですっ」

「おお、やっぱり早く来たな。やはり根っからのミュージシャンだな」

店内に入った僕は、カウンターにいた男性に声をかけると、予想していたのか軽快に笑いながら立ち上がった。

「これが、お目当てのギターだ」

僕は男性からギターが入っているケースを受け取ると、それを軽く開けて中を確認する。

そこにはすっかり元通りになっていた僕のギターが入っていた。
「くっ！　ありがとうございますッ」

そのことがうれしくて、声にならない喜びの声を上げながら、僕は男性に深々とお辞儀をしてお礼の言葉を口にした。

「いやいや、こちらは商売でしたことだ。ということ、お代だが……」

「あ、はい……お願いします」

僕は男性に修理費用を支払う。

ギリギリ5桁にならずに済んだのは、僕にとっては幸運だった。
それでも、かなりの金額だけど。

「まいど。また何かあったら木漏れ日工房をごひいきに」

その男性の言葉を背中に受けながら、僕は木漏れ日工房を後にすると、羽丘学園に向かうのであった。

「うーん。勢いで持ってきたけど、どこに置こう……」

久しぶりにギターが戻ってきた喜びで、ついつい自然に楽器を羽丘に持ってきたが、今日は文化祭。

楽器を置くスペースなんて限られている。

僕たちのクラスい置くのも手だが、おそらくスペースがないはずだ。

(部室……はやめとくか)

天文部に所属しているので、部室に荷物を置くというのもありだが、なんとなくあのカオスな場所に置くのが気が引けてしまった。

(あ、そう言えば……)

そこで、ふと思いついたのが今日の合同文化祭でライブをする人たち用の控室が用意されていたはず。

そこに置いてもらえばいいのだという風に結論付けた僕は、控室に向かう。

「あ、お、おはようございます」

「君は……」

控室となっている空き教室に入ると、そこには青っぽい髪をシュシユのようなもので束ね、眼鏡をかけている女子学生の姿があった。(確か、Galaxyでバイトをしているとかいう子か)

「あ、私は1年の朝日六花って言います」

「これはご丁寧に。僕は3年の美竹一樹。ここにいるということは、朝日さんは実行委員？」

朝早くに控室にいて、楽器を持っている様子がないところを見ると、おそらくはそうではないかと推測して聞いてみた。

「はい。ちよつとここの確認をするために……美竹先輩は合同ライブに出られるんですか？」

「そう言うわけではないんだけど、ちよつとした事情で、楽器を持ってきちゃってね……できれば隅のほうにでも今日一日置かせておいてほしいんだけど、構わないかな？」

僕の推測は正しかったようで、ちよつどいいと思った僕は、彼女に置かせてもらうことの許可を得ることにした。

……先輩が先輩にというのが少しだけ卑怯な気もするけど。

「はい……たぶん、大丈夫だと思います」

「もし、問題になったら僕が責任を取ると言ってたことを伝えておいてもらえる？」

「は、はい！ わかりました」

とりあえず、これでフォローのほうも大丈夫そうだ。

流石に後輩に迷惑をかけるのはまずい。

まあ、問題が起こった時点でかけているも同然なんだけど。

(とりあえず、文化祭を頑張ろう)

そんなこんなで、僕たちにとって最後の文化祭が幕を開けるのであった。

「こちら、クッキーセットになります」
「どうも」

クラスの出し物である『猫カフェ』で、僕はウェイターとしてその

役目を全うしていた。

二日目だからということもあるのか、始まって早々教室内はお客さんでにぎわっていた。

(にしても、男子も猫耳に尻尾はきついな)

僕が発案者なだけに、拒否権もなく猫耳を付けた状態で接客をしていた。

ちなみに、もう一人の発案者である啓介は、血の涙を流すのではないという勢いで、悲壮感を漂わせながら接客をしていた。

(まあ、僕はこれが日菜さんに見られなければいいか)

「あ、美竹君4番テーブルに、これ持って行ってくれる?」
「わかりました!」

そんなことを考えていると、クラスの女子から商品を運ぶようにとの指示が出たため、僕はトレイを受け取ると、指定された席に向かっていく。

「お待たせしました。こちら……ゲツ」

その席にいる人物を見た瞬間、思わず声を出してしまった僕を責めることができる人はいるまい。

「むう、あたしの顔を見て嫌そうな顔されたあ〜」

「あー、ごめんごめん。来ないだろうと思ってたから」

頬を膨らませながら抗議の声を上げる女子生徒……日菜さんに軽く謝りながら僕は頼まれた商品をテーブルに置いた。

「来ないはずないじゃん! だって、一君の猫耳姿見て見たかったんだもん♪」

「……………」

もはや、〃どうして知ってるんだ〃なんて野暮なことは聞かない。

そんなもの、理由は一つに限られているのだから。

(リサさん……裏切ったな)

僕はウエイトレスとして動いているリサさんに、抗議の意味を込めて視線を送るが当の本人はウインクで返してきた。

「それにしても、一君の猫耳とってもいいよっ! もう、るるるんっ♪ てしちやうくらい!」

「……だろうね」

このような奇抜な格好などすれば、確実に日菜さんの好奇心を刺激することは目に見えていた。

だからこそ、彼女には見せたくなかったのだ。

その時、“パシヤツ”というシャッター音が聞こえてきた

「つて、日菜さん。今何を？」

「え？ 記念に写真を撮ったの！ ほらー！」

悪びれた様子もなく満面の笑みでこちらにスマホの画面を見せてくる日菜さん。

そこには猫耳執事服を着こんだ自分の姿があった。

(うん。キモイ)

自分から見てそう思えるのだから、第三者からすればよほどの醜態だろう。

「ほら、じゃない。写真を消して。今すぐ」

「えー！ いやーじゃん別に。だって、一君の猫耳執事姿見ると、るんっ♪ てするよ」

「よくないから。全然よくないからッ」

(誰が悲しくて黒歴史を自分で生み出していくんだよ)

これを共有するであろう人物には妹も含まれている。

となるとこの黒歴史は妹の蘭にも知れ渡ることになる。

(あ、兄の威厳だけは守らないと)

元々ないかもだけど。

そんな時、再びシャッター音が聞こえた。

「日菜さん。さっきも言ったけど、写真はやめてっ」

「え？ 今のあたしじゃないよ」

再び日菜さんが写真を撮影したのかと思い、注意をした僕に、日菜さんはきよとんとした様子で否定してきた。

「それじゃ、今のは……」

日菜さんが嘘をついていないと直感で悟った僕は、音のしたほうを探していると

「あ、あの。写真は困ります」

「えー。別にいいじゃんか。減るもんでもないしさ」

少し離れた場所で二人組の金髪でチャラそうな男性客が、リサさんに絡んでいる光景が目に入った。

その手にはスマホと思わしき端末が握られている。

困った様子のリサさんを面白がるように、もう一人の男性客がリサさんの写真を撮影していく。

「はあ……」

その光景に、僕はため息交じりでズボンのポケットから風紀委員の腕章を取り出すと、それを装着させる。

こういった事態を想定していた僕は、いつでも取り締まりができるように風紀委員の腕章を携帯していたのだ。

とはいえ、本当にその通りになるのは複雑な心境だけど。

それはともかく、これで僕はこの瞬間風紀委員となったのだ。

「そちらのお客さま。失礼します」

リサさんをかばうように男たちの前に立ちふさがった僕に、二人は男性客はにらみつけるような視線を向ける。

「あ？ 誰だてめえ」

「私は風紀委員の者です。他の来園者や学生たちの迷惑になる行為は、ご遠慮願えますか？」

男性客たちの威勢にひるむことなく、できる限り丁寧に……されとて毅然とした態度で注意をする。

「風紀員だか何だか知らねえが、ガキはすっこんでろ！」

「俺たちは別に、風景写真を撮ってただけだろ。何いちゃもんつけてんだ？ ああ？」

だが、この二人はそれによって凶に乗ったのか罵声を浴びせ始めた。

その様子に、周囲の客たちもこの場を離れ始めていた。

（やれやれ。あまり大事にはしたくないんだけど）

合同文化祭を行うにあたって、口頭での注意にも従わずに著しく迷惑行為をする者がいた場合は、学園の備品であるトランシーバーを利用して担当の教師に応援要請をする手筈になっている。

だが、それをやるとかなり騒々しくなるので、出来れば穏便に済ませたかったが、どうやらそれも言ってられないようだ。

僕は、二人から視線をそらさぬよう警戒をしながら、これまたズボンのポケットに入れていたトランシーバーを取り出そうとした時だった。

「おい、お二人さんよ。いい加減によさねえか」

「ああ？ 何だてめえっ！」

その時、男性客の近くの席に腰かけていた一人の大柄の男性客の言葉に、二人組の男性客の一人が声を荒げる。

「ここは静かに楽しむ場だ。おめえさんのような品のねえやつが来る場所じゃねえな。騒ぎてえんだったら、そういう場所で騒ぎな」

「てめえ。名に偉そうに説教垂れてんだよ！」

大柄の男性の言葉に、激昂した金髪の男性が、大柄の男性の胸倉をつかんだ。

「ちよつと、皆さん喧嘩は——」

「フンっ！」

一触即発の雰囲気、止めようと声を上げる僕の言葉を遮るように、眼光鋭く金髪の男性を睨みつけた大柄の男性は、金髪の男性を床にたたきつけていた。

「おめえら。人が優しく言うてる内に聞いておくもんだぞ」

「ひいっ！ す、すみませんっ！ ちよつと調子に乗ってただけで——謝る相手がちげえだろ！」——はいいッ！ 本当にすみませんでしたあつ！ 写真は責任もって削除しますっ！」

大柄の男性の迫力、もう一人の金髪の男性は白旗を上げて完全降伏した。

そして、慌てた様子で目の前で自分のとたたきつけられた男性のスマホに保存されている問題の写真を削除した。

「よおし。だったら、とつとどこから出ていきなッ」

「はいいっ!!」

そして、大柄の男性の言葉に、金髪の男性は逃げるように教室を去って行った。

「すみません。助かりました」

「何。俺はうるさい若造を注意したまでだ」

それを見届けてからお礼を言う僕に、大柄の男性は絵をひらひらと振って応えようと、立ち上がってそのまま去って行った。

「……なんだか、嵐みたいだったね」

「うん……」

怒涛の如く展開した騒動に、その場に立ち尽くしている僕にかけられたりサさんのつぶやきに、僕は頷くことしかできなかった。

その後、教室内は先ほどまでの雰囲気を取り戻すのであった。

日菜さんも、教室を去って行き、僕は再びクラスの出し物のほうに戻ることにした。

(あ。日菜さんに写真消してもらったの忘れた)

そんなことを思い出しながら。

第42話 文化祭

「あ、一樹先輩」

「羽沢さんに白金さんたちも……ちよつと遅れたみたいで申し訳ない」

クラスの出し物の当番が終わり、生徒会としての務めを果たすべく生徒会室を訪れると、そこには日菜さんとつぐの二人以外にも、花女の生徒会メンバーである市ヶ谷さんに白金さんの姿があった。

「だ、大丈夫……です。私たちも、いま来たばかり、ですので」

とりあえず、羽沢さんの隣の席に腰かけた僕は、生徒会に支給されたノートPCを使用して、報告書を作成していく。

「そう言えば、さつき日菜先輩から聞いたんですけど、トラブルに巻き込まれたんですね？」

「あー。なんだか無断で生徒の写真の撮りまくっていたから注意したら逆上してね」

「うへえ……面倒くさいですね」

思い出したように聞いてきたつぐに、あらましを説明すると、嫌悪感たつぷりに声を上げる市ヶ谷さんの反応が、僕のあの時の気持ちのすべてを物語っていた。

「まあ、たまたま来ていた男性客の一喝で事は収まったけど」

「……そう言えば、昨日紗夜さんが、風紀を乱す人に声を掛けようとしたら、そばにいた男性の人が、注意して追い出したって言ってましたよ。お礼を言おうとしたらいつの間にか、いなくなっていたと」

（なんだか偶然が続くなあ）

なんとというか、話を聞く限りだと今日の一件と同じ流れのような気もするし。

（……そういえば、マツさんに頼んでいたボディーガードもどき。今日は大丈夫だって言っておいたけど……まさか、ね）

あの大柄の男性の雰囲気、どこことなく花咲ヤンキースの団長に似ているような気がした僕は、その考えを頭の片隅に追いやることにした。

こういうのは、深く考えないのが身のためなのだ。
そんなわけで、僕を加えた五人でデスクワークを始めるのであつた。

「はああ……疲れたあ」

それからしばらくして、作業のほうもひと段落着いたところで市ヶ谷さんが背もたれにもたれがかりながら大きなため息を漏らした。

「お疲れ様です、市ヶ谷さん」

「いやいや、燐子先輩と羽沢さん達のほうが大変そうだったので……」
「そうだとしても、大変だったのには変わりないんだから」

白金さんの労いの言葉に、背筋を正して言葉を返す市ヶ谷さんに、僕はそう言った。

例年どのくらいの作業量かは知らないが、今年はいつもより大変であるのは間違いなかったからだ。

（その発起人は……見なかったことにしよう）

我がが生徒会長のほうをちらっと見た僕は、すぐに視線を逸らす。とてもではないが、常人の物とは思えないような速さで作業をしている彼女の姿から、現実逃避をするために。

「その……タイムスケジュールの件、ありがとうございます」

「別に構わないよ。早い段階で言ってくれたから、再構築しやすかったです」

（果たして、うまくいくかどうか）

こちら側としては、問題はないはずだ。

昨日と同じライブスケジュールであれば、ギリギリ間に合う。

……だが、不安はある。

何が起ころのかかわからないのが、“ライブ”なのだから。
「気を悪くしたらごめん……本当に、大丈夫？」

「……はい。たぶんですけど」

だからこそ、僕が念を押すように聞くのもしようがないと思う。
市ヶ谷さんの答えに、僕はそれ以上聞くことはなかった。

彼女が大丈夫と言っている以上、何かを言うのも野暮だと思ったからだ。

「よしっ」

少しだけ重い雰囲気に含まれようとしていた中、作業を終えたのかパソコンを閉じた日菜さんは、勢い良く立ち上がった。

「おねーちゃんのところに行こーっ！ 一君も一緒に」

「は？ ちよつとま——」るるるるんっ♪——うわああ!？」

やっぱり、凄まじい速度で作業を進めていたのは紗夜のところに行くためだったのね、というツツコミもできぬまま、日菜さんは僕の腕をつかむと半ば強引に引っ張ってきた。

(この後見回りなただけど……)

そんなことを言ったところで、今日の日菜さんには通じないことくらい、もうわかっていた僕は心の中でため息を漏らしつつ日菜さんに引っ張られる形で花女へと向かうのであった。

「おねーちゃん、どこにいるかなー♪」

花女の校内に入った僕は、辺りをきよろきよろと見回しながら紗夜を探す日菜さんの隣を付き添うように歩いていた。

「……確か、クラスの出し物の担当をしてるって言ってたから、いると思うよ」

見回りのタイムスケジュールの確認の時に、紗夜がそう言っていたのを思い出した僕は、日菜さんにそれを伝えた。

「じゃあ、おねーちゃんの教室にしゅっぱーっ♪」

「はいはい」

何を言っても無駄だというのが分かっていることもあるが、正直なところ僕も紗夜の出し物を見たいなと思っていたので、僕は二つ返事で頷くと、紗夜達の教室に向かった。

「展示やってまーすっ！ よかったら見て行ってくださーいッ」

そんな中、来校者たちの声などでにぎやかな廊下に、聴きなれた人物の声が聞こえてきた。

「あ、花音ちゃんだっ」

「あ、一樹君に日菜ちゃん。二人とも見回り？」

「いや、ちょっと出し物を見てるところ……かな」

日菜さんに話しかけられた花音さんは首を軽く傾けながら聞いてくるので、僕はそれに頷きながら答えた。

正確には、連れまわされているようなものなのだが、それは言わぬが花だろう。

「おねーちゃんのクラスの出し物って何？」

「あ、うん。花女の歴史の展示をやってるんだけど……」

花音さんの手にある看板には『3-A 花女の歴史く街を見つめて』と書かれた看板があった。

文化祭恒例の調べ物の展示のようだ。

とはいえ、どうも花音さんの声色が変で、そのことを聞こうとした時だった。

「ねーねー、おねーちゃんどこ？」

それまで何も言わなかった日菜さんが花音さんに紗夜の居場所を聞いたことで、それはかなわなかった。

「紗夜ちゃんは今中にいる——「一君行こーよ♪」——ふええ」

「あー、わかったから引つ張らないで」

居場所がわかるや否や僕の腕をつかんで教室内に行こうとする日菜を止めるすべなど持っているわけもなく、僕は花音さんに片手で謝るジェスチャーをしつつも教室内へと連れていかれた。

「あ！ おねーちゃんに千聖ちゃんだっ」

「日菜ちゃん？ それに美竹君まで」

中に足を踏み入れた僕たちを出迎えたのは、スクリーンと思わしき垂れ幕の前に立つ白鷺さんと、後ろの機材があるところで立っている紗夜の二人だった。

二人はここに来るのが意外だと言わんばかりに驚く者もいれば、静かにため息を漏らすものがあったりと、様々な反応が返ってきた。

(へえ、かなり本格的に調べてるんだ)

ぐるりと教室内の壁に張り出された髪に書かれている内容を流し

読みしながら、僕はその質の高さに舌を巻く。

「二人はここで何やってるの?」

「花女の歴史について説明したりしてるのよ」

こういった展示はあまり人員が必要でないイメージが強かったのだが、どうもそうではないらしい。

「おねーちゃん。説明聞いてもいい?」

「はあ……別にいいけど、静かに聞いて」

そんな僕と紗夜のやり取りに興味を引かれたのか、目を輝かせる日菜さんの言葉に、紗夜はどこかあきらめた様子で返すと、説明の準備を始めた。

「一君一君、ここに座ろよ」

「あ、うん」

微かな違和感を感じながらも、僕は日菜さんに促されるまま日菜さんの隣に腰かけて、説明を聞くことにした。

『ここ、花咲川女子学園は——』

やがて、教室内の明かりが消え、白鷺さんのナレーションによつて始まった説明に、僕たちは耳を傾けていく。

そんな中で感じた違和感の正体もはつきりとわかってきた。

(人少なすぎじゃない?)

教室に足を踏み入れる人が誰もいないのだ。

ここは僕たち四人の貸し切り状態になっているのだ。

(まあ、内容がないようだからね……)

文化祭に来て、真面目な展示物を見ようと思う人は少ないことは想像に難くなく、こうなるのも必然ともいえる。

それに……

『それでは、ここでこの街に所縁のある偉人さんたちにスポットライトを当ててみましょう』

(ものすごく真面目……)

当たり前つちや当たり前だが、完全に硬い内容のそれがさらに足を遠のかせる結果になっていた。

真面目な性格の二人がそろえば、そうなるよねと思いながらも、僕

は説明に耳を傾け続けるのであった。

第43話 ライブ

花女の歴史についての説明を聞き終えた僕たちは、教室を後にして中庭のベンチ付近に立っていた。

「おねーちゃんまだかなー」

「気持ちに分かるけど、少し落ち着いて」

体を左右に揺らしながら紗夜が来るのを待つ日菜さんを落ち着かせつつも、僕は紗夜を待っていた。

説明を聞き終え、紗夜の当番が終わることを知った日菜さんが一緒に文化祭を回ろうと提案したからだ。

渋々といった様子だったが、内心はそうでもない様子の紗夜に待ち合わせ場所を伝えて教室を後にして今にいたる。

(それにしても、芸能人補正があっても駄目だったか……)

白鷺さんが芸能人で有名人であるの言うまでもない。

そう言う人が催し物に出ているのであれば、ファンや彼女見たさに人が来るのではと思っていたのだが、さすがにそれはなかったようだ。

催し物に出ていることを秘密にしているか、もしくは内容が内容だけに人足を遠ざけているのかのどちらかだろう。

(まあ、どう考えても前者だよね)

白鷺さんのことだ、混乱を起こして周りに迷惑をかけないように、最大限の配慮をしているはずだ。

花音さんが集客をしていたのがその最たる例なのかもしれない。

(まあ、人が集まらない＝失敗でもないしね)

何が成功で何が失敗なのかは、部外者の僕にはわからない。

(それは置いとくにしても……)

とりあえず、それ以上考えるのを辞めた僕は紗夜が来るのを待つことにした。

(最後の文化祭……できれば思い出の一つくらいは作っておきたいな)

紗夜と一緒に出し物を見て回ればよかったのだが、僕たちは生徒

会の役員。

見回りなどでさすがにそれは難しく、文化祭での定番ともいえるカップルで出し物を巡るのはできそうもなかった。

「あ、おねーちゃん！」

そんな時、聞えてきた日菜さんの声に、僕は彼女の視線の先を追うように顔を向けると、こちらに駆け寄ってくる紗夜の姿があった。

「待たせて……………ごめんなさい」

「ううん、そんなに待ってないから安心して」

軽く息を整えながら謝ってくる紗夜に返しながら、息が整うのを待つことにした。

「じゃあ、しゅっぱーっ♪」

そして、息が整ったのを見計らったように、日菜さんの号令がかけられ、僕たちは文化祭巡りを始めるのであった。

「うーん。これすつごくるるんっ♪ てするよー！」

「日菜、わかったから静かに食べなさい」

いくつか出し物を見て回り小腹がすいたので、出店で焼きそばなどの料理を購入した僕たちは、廊下の隅に立ってそれに舌鼓を打っていた。

ちなみに、日菜さんが食べているのは『納豆キムチパン』だった。名前を聞いただけでもあれな予感しかしないのだが、日菜さんの様子を見てみると、どうも良さそうに思えてくる。

……………食べないけど。

「日菜さん、それおいしい?」

「まずいッ! でもおもしろい味だよ」

(あ、やっぱり…………)

目を輝かせながら即答する辺り、どれほどのレベルなのかうかがえる。

「あたし、ちよつと手洗ってくる」

「ここで待ってるから」

そして、そのままどこかに（おそらくはトイレだろうけど）に向かう日菜さんの背中を見送りつつも、僕は焼きそばを口に入れる。

「まったく……だから言ったのに」

「あはは……まあ、日菜さんらしいけどね」

本日何度目かの深いため息を漏らす紗夜に、僕は苦笑交じりに相槌を打った。

日菜さんが納豆キムチパンを買おうとしているとき、本気で止めていただけに、そのため息の重さは計り知れなかった。

「……一樹君は、日菜の肩を持つのね」

「別にそう言うつもりじゃないんだけどね……ああいうのも、“個性”だし、それを押さえつけるとあまりよくないと思うんだよね。まあ、それで周りに迷惑をかけるのはどうかと思うけど」

主に被害を被るのは、つぐ辺りなだけになおさらだ……。

「でも、ちよつと優し過ぎよ」

不機嫌な様子でなおも食い下がる紗夜の様子に、僕はもしやと思い直接確かめてみることにした。

「紗夜、もしかして……やきもち？」

「っ!? 別にそんなんじゃない……ただ私は、日菜が迷惑をかけないようにするために言ってるだけで——「あー、うん。分かったから、少し落ち着いて」——わ、わかればいいのよ」

紗夜の必死に否定する姿に苦笑するのをこらえながら宥めるが、どうやら顔に出ていたようで紗夜から恨めし気な視線が送られる。

「一樹君、絶対にからかってるわよね」

「……バレた？」

「はああ……もう」

否定せずに肯定する僕に、呆れたような様子の紗夜に、僕は焼きそばを箸でつかむとそれを紗夜のほうに差し出す。

「はい、あーん」

「ち、ちよつと……人目があるのに」

周囲をきよろきよろと見まわしながら口を開く紗夜に、僕は

「大丈夫だって。誰も僕たちのこと見てないし、それに恋人らしいこ

との一つくらいしたっていいじゃん。たまにはね」

「それは……そうだけど」

僕の言葉に、紗夜は言葉を詰まらせる。

おそらくは恋人らしいことをしたいという思いと、風紀を乱してはいけないという思いとで拮抗しているのだろう。

……もしくは恥ずかしさとも言うが。

「……い、一回だけよ」

結局勝ったのは、前者のほうだったようで、頬を赤くしながら紗夜はそう言おうと目を閉じて口を控えめに開ける。

「それじゃ……あーん」

「あー……はむ」

焼きそばを紗夜の口の中に入れると、紗夜はそれを味わうように咀嚼していく。

「おいしい……」

顔を赤くして静かに紡がれた言葉に、僕は思わず表情が緩んでしまふのを感じていた。

「……はい」

「えっと……紗夜さん？」

「私だけなんて不公平よ。私もするわ」

僕と同じように手に持っていたパックから、焼きそばを箸で一掴みして差し出してくる紗夜さんの行動に目を瞬かせていると、紗夜は挑戦的というべきかそれとも吹っ切れたともとれるような表情を浮かべながら僕に言ってきた。

「はい、あーん」

「あー……うん、おいしい。でも、ちよつと恥ずかしいね」

周囲を歩き交う人は、こちらを気にした様子もないが、それでも人の多い場所でやるというのは少しだけ恥ずかしかった。

「……なんだか、恥ずかしいね」

「やる前に気づいて……でも、ちよつと嬉しかった」

紗夜の最後につぶやいた言葉は、聴かなかったことにしたほうがいいのかも知らない。

そう思った僕は、紗夜と一緒に焼きそばを食べながら日菜さんを待つのであった。

時刻は15時少し前。

生徒会の仕事に戻った僕と花女の生徒会長である白金さん、そして文化祭実行委員でもある朝日さんは、文化祭の記念ライブに参加する人たちの誘導をするために、講堂の舞台袖の通路にいた。

(合同記念バンドのほうは、盛況のようだ)

通路にいても聞えてくる観客たちの声援に、僕はほっと胸をなでおろしながら、それとは別の懸念事項のほうに意識を傾ける。

「合同記念バンドの演奏が終わるまで、ここで待機しててください」

白金さんの指示を聞き流してしまうほどに、深刻な状況だった。

そう、僕たちの前にいるステージ衣装に身を包んだPoppin Partyに関しての懸念事項が。

「演奏が終了後——」

「ポピパ、準備できてるー?」

白金さんの言葉を遮るように講堂に続くドアを開いて顔をのぞかせた日菜さんの言葉に、彼女たちは表情を曇らせる。

「すみません。まだおたえが来てなくて……」

そう、この場にまだ来ていない花園さんが、僕にとっての一番の懸念事項でもあり、不安要素でもあったのだ。

「何やってんだよ……もう次だぞ」

「……………」

市ヶ谷さんのつぶやきが、やけに大きく聞こえた。

(いやな予感がする)

そう。

例えば、先日のようにアンコールが出ていたら……………。

気休めではあるが、終了時刻を早めにしてもらえるように、チュチュに掛け合っていた。

多少嫌味は言われたが、それでも花園さんが間に合わなくなるという

うリスクを減らせることができたのであれば、些末なことだろう。

だが、それでもアンコールが出てしまえばそれに応じることになるのは当然であり、そしてそれによってライブの終了時刻が圧していたとしたら……

時間が経過するにつれて大きくなつてくるとめどなく募ってくる不安。

「ライブが押ししてるのか……もしかして事故!？」

「そんなんっ、たえ先輩」

その不安に、心配そうに何かがあつたのではないかと口にするりみさんの言葉に、その場はどよめく。

「大丈夫……大丈夫」

そんななどよめきを沈めるようにか、あるいは自分に言い聞かせるように口を開く戸山さんの表情に、いつもの明るさはなかった。

「あ、来たっ!」

そんな時、花園さんから連絡が来たのか戸山さんが声を上げながら手にしていた携帯の画面を確認する戸山さんに、僕は彼女の方に注目する。

「今こっちに向かつてるって!」

やがて彼女からのメッセージを読み終えた戸山さんが、僕たちにその内容を口にする。

「今から!」 間に合わねえって」

(最悪だ……)

市ヶ谷さんの言う通り、ライブハウスdubからどんなに急いでも30分……タイミングが悪ければ1時間以上はかかる距離だ。

Poppin' Partyの順番まで残り10分程度。

到底、間に合うというレベルではない。

「会場の人に事情を話して待つてもらいますか?」

「え? どのくらいかかるかわからないのに?」

「駄目だっ」

そんな中出された白金さんの提案を、日菜さんと僕は却下する。

「この後、片付けだつてある。ただでさえ時間的にギリギリの状態だ。

これ以上の延長は不可能。出来ても10分か20分が限界だ」

正直、今の時点でも保護者からの苦情が出かねないほどに時間が圧している状態だ。

これ以上の延長は、さすがにまずい。

「うーん、じゃあパスパレが出るか——」事務所NGを忘れないで——
「あ、そうか」

「っ！」

その場が混乱する中、いきなり戸山さんが出口に向かって走り出した。

「香澄?」

「おたえを迎えに行ってくる」

突然の行動に名前を呼ぶ山吹さんに、戸山さんはそうやってその場を後にした。

(これで、もう後はない)

さつきまでなら、花園さんの代わりに誰かをヘルプでいれるか、このままで強引にステージに出させるかの選択肢もあったが、戸山さんもいなくなった以上彼女たちの辿る結末は、間に合うか否かの二択でしかなくなつた。

「僕は先生に延長するように掛け合うから、二人は今ステージに立っているみんなに時間稼ぎの要請。市ヶ谷さん達はすぐにステージに出られるようにスタンバイっ」

『はいっ (おーけー)！』

今できる限りの指示をその場にいる全員に飛ばした僕は、その後にしていく皆をしり目にトランシーバーを使って先生にコンタクトを取る。

『どうしました?』

「記念ライブに出場する団体で、一名来ていない生徒がいます。生徒が来るまで催しを延長したいのですが、できますか?」

『少し待ってください。確認します』

コンタクトを取った先生は、そう告げると通信を切った。

僕は、返答を静かに待つ。

返答は予想よりも早く来た。

『延長は大丈夫です。ただし20分が限界です』

「ありがとうございます」

とりあえず、何とか20分の猶予はもらえた。

だが、果たして待たせた観客たちは、Poppin' Partyのライブを楽しむことはできるのだろうか？

「……………ったく。仕方ないな」

先輩面できるような性格ではないが、それでも後輩のピンチだ。

何もせずに見ているだけというのはできない相談だ。

僕は、速足でその場を後にすると控室として用意された教室に向かった。

そこには、今朝受け取った僕のギターが入ったケースが置いてあった。

僕はそれを手に取ると、来た道を速足で戻るのであった。

『アンコールっ、アンコールっ!』

そして始まるアンコールの声は、ある意味当然の流れだった。そんなアンコールの声に、朝日さんは体をふるわせて固まっていた。

「……行ってくる」

「え、美竹先ば——」

後ろからかけられる山吹さんの声を聴き流しながら、僕はギターを肩にかけてステージに上った。

「ステージの上に立ったら狼狽えるな、狼狽えるなら立つな」
「えッ?」

僕のかけた言葉に驚いた様子でこちらに顔を向ける朝日さんをしり目に、僕はアンプにリードを接続させて素早くセッティングを済ませるとマイクスタンドを手にしてこちらにマイクを近づける。

『同じく羽丘三年、美竹一樹。大人げないが少しばかり付き合ってもらうよッ』

(チューニングもしてないし、試し弾きもしてない……まあ、弾かないよりはましか)

正直、うまく弾ける自信などない。

だが、後輩が身を挺して演奏を披露したのだ。

先輩の僕が二の足を踏むわけにはいかない。

(僕の持てるすべての力を込めて)

僕は軽く深呼吸をして集中力を高める。

観客たちの期待に満ちた声も、何もかもが遠のいていく。

「ッ!」

そして、僕は演奏を始めた。

曲目は、『devil went down to georgia』
『a』

それは、かなり前……SMSでHPとして演奏した楽曲だ。

そのギターソロのパートの部分を僕は弾くことにしたのだ。

(ん? 何だ、これ)

最初の一音で、僕はギターの変化に気づいた。

それまで、このギターは教科書通りに弦を押さえても出したくない音を出させてくれない、ひねくれた性格が特徴だった。

それが、さらにひねくれているのだ。

僕は、いつも通りに弾いたつもりだったが、音を盛大に外したのだ。それは初めてギターに触れて以来、初めてのことだった。

だが……

(こっちのほうに、しつくりくる)

理由は分からない。

だが、そのひねくれは修理に出す前のひねくれとは違い、どこかストリートで素直な風に思えるのだ。

その感覚になじむのに、そう時間はかからなかった。

最初の簡単なフレーズの部分が終わり、速弾きのフレーズに入るころにはそのギターに順応することができるようになっていた。

荒れ狂う嵐がごとく弾いていくその感覚は、どこか懐かしい気持ちを抱かせ、いつもよりも熱が入る。

そしてそのまま、僕はソロパートを弾ききった。

(ぶっつけ本番にしては上出来……だが)

観客席のほうから上がる歓声に、僕は微かな手ごたえを感じているが、まだ二人が着た様子はない。

(こうなったら、一か八かでセッションをするしかないか)

とはいえ、セッションをするにもこの場にいるのはギターのみ。

朝日さんは隣で呆然としているので、心許ない。

僕一人でもできることには限度がある。

(さてどうしたものか……)

そんなことを考えていると、会場内の歓声が再び高まったのと同時に、後ろのほうからスネアを叩く音が聞こえてきた。

「ろっか、一樹さん。カツコよかったですよっ」

「あこちゃん……」

「ありがとう」

ドラムのセッティングをしなら声を掛けてきたあこさんにお礼を言っていると、一緒にステージに上がったのか白金さんもキー

ボードのセッティングを始める。

さらに、それに続くようにステージ袖からリサさんがベースを手にステージに出てくる。

(これでボーカル以外が揃った！)

まさかここまで揃うとは思ってもいなかったが、これでセッションをすることはできる。

「で、どうすんの？」

「Poppin' Partyの皆さんがそろそろまでつなげますっ」

リサさんの問いかけに、いつになく真剣な面持ちで答える白金さんの表情から、その気持ちの強さがうかがえる。

「りよーかい☆」

「ごつちも、いつでもいいよ」

やることはこの間の合同ライブと同じだ。

僕は手早く演奏の準備を整え、いつでも始められるようにする。

「勝手に始めないで頂戴」

そんな時、湊さんの注意の声とともに、さらに大きくなる歓声を受けながら湊さんと紗夜の二人がステージに上がってきた。

「Roselliaはいつでも完璧な演奏をしなければいけないのよ」

それは自分たちがライブを行うと言っているのと同じだった。

その言葉に、僕は無言で頷くとピックをしまい、ステージ袖に下がる準備を始めた。

「誰かギターを」

「おねーちゃん！ これ使って！」

そんな中、こうなることを予想していたのか、もしくは僕と同じことを考えていたのかはわからないが、自分のギターを手にした日菜さんが、ギターを借りようとしていた紗夜に差し出す。

「……しようがないわね」

そんな日菜に、一瞬柔らかい表情を浮かべながらそれを受け取る紗夜の姿は、少し前まではありえないものだった。

そんな感慨深い思いを抱きながらステージ袖に下がった僕に少し

だけ遅れて朝日さんもステージ袖に下がった。

「いい演奏だった」

「あ、ありがとうございますっ」

ステージをつなぐうとしたいわば戦友でもある朝日さんに労いの言葉をかけると、彼女は足を震わせながらも嬉しそうにお礼を言ってくる。

「……………これで間に合えばいいんだけど」

「……………」

僕のつぶやきに、その場にいた朝日さんや市ヶ谷さん達は何も答えることはなかった。

そんな中、Roselliaの演奏が始まった。

(……………これは負けてられないな。僕も)

会場全体がRoselliaの色に……………世界に染められていくのを感じながら、僕は自分を奮い立たせる。

いつの日か、同じ頂からその景色を眺めるといふ、僕の野望を胸に、僕は彼女たちの演奏をステージ袖から見守るのであった。

『どうも、ありがとう』

そして、彼女たちのライブが終わり、会場内からは彼女たちへ惜しめない拍手が送られる中、湊さんの落ち着いた声がこのライブの終わりを意味していた。

僕は念のためにステージ袖をぐるりと見まわし、会場の様子に意識を傾ける。

「……………これまでのようだな」

ステージ袖、会場内に目立った変化が見られないのを確認した僕は、静かにつぶやく。

「……………」

その息をのむ声は、誰のものなのかはわからない。

「……………終了のアナウンスを」

トランシーバーで、記念ライブの終了を告げるアナウンスをするよ

うに指示を出す。

『文化祭記念ライブにお越しの皆様にご案内いたします。これを持ちまして、文化祭記念ライブは終了となります。お帰りの際は、お忘れ物のないようご注意ください。繰り返しです——』

それから間髪入れずに、会場内に終了を告げるアナウンスが流れ始める。

……戸山さんと花園さんは、間に合わなかった。

第45話 試練

ドタバタした文化祭も、終わってみればすべてがあつという間のことのようにも感じられる。

『皆さんと地域の方のご協力のおかげで、合同文化祭は無事に終えることができました』

白金さんにとってある種の初陣のようなこの文化祭という行事で、成功という結果で幕を閉じることができたのは幸いだと言えるだろう。

「おねーちゃん、一君お疲れー」

周りにいる生徒たちから労いの声がかかけられ、慌てた様子で頭を下げている白金さんを見ると、飲み物を片手に日菜さんが僕たちのところにやってきた。

「本当に疲れたわ……日菜のおかげで」

「そうだね。ま、終わってみればそれもいい思い出だけど」

「……そうね」

僕の言葉に紗夜さんもそっぽを向きながら肯定の声を上げる。

そっぽを向いたのは赤くなっている顔を僕たちに見えないようにするためなのかもしれない。

「えへへ。ありがと、一君、おねーちゃん。一緒に文化祭したかったんだー」

（だと思った）

日菜さんの純粋な願いが、かなりの騒動にまで発展してはいるが、それもそれでいい思い出だろう。

「ポピパちゃんは残念だったけど」

「つと……ごめん、事務所からだ」

日菜さんが表情を曇らせて呟いたのと同時に、僕の携帯が着信を告げるように震え出したので、ポケットから携帯を取り出して相手を確認するとその相手を二人に告げた。

「一君も大変だねー」

「まあね。ちよつと行ってくる」

日菜さんの同情とも哀れみとも取れる口調の言葉に相槌を打ちながら、僕は二人にそう言つてその場を離れた。
そう。

僕は素直に、文化祭の成功を祝えるような状況ではなかったのだ。生徒たちが集まっている場所からそこから少しだけ離れた所に移動すると、僕は電話に出た。

「はい、美竹です」

「お疲れ様です。ライブですが、どうなりましたか？」

電話の相手は、僕たちが所属する事務所のスタッフである相原さんだ。

「……はい、Poppin' Partyはライブに穴をあけました」

開口一番で問いかけてくる相原さんに、僕は先ほどのライブの結果を伝えた。

『そうですか……危惧していた通りになりましたね』

僕の言葉に返ってくる相原さんの声色はかなり深刻そうなものだった。

なぜ、僕が事務所にPoppin' Partyがライブに出られなかったことを報告しているのかというと、話は文化祭の準備期間のころにまで遡る。

戸山さんから僕……Moonlight Gloryに主催ライブへの参加をお願いされたのと同時に、Pastel*Paletteにも同様のお願いをしていたらしいのだ。

だが、僕たちは事務所に所属するバンドだ。

個人の一存で参加ができるわけではなく、事務所への許可が必要になる。

その許可を取ろうとした際に、相原さんを通じてPoppin' Partyの直近で開かれるライブの報告をするようにと伝えられたのだ。

事務所としては、主催ライブを開いたという実績のないバンドのライブに出演した際に、“万が一”のことが起こる可能性を不安視してのものだったのだろう。

だが、結果は事務所側の憂慮した通りのことが起きた。

『Poppin Partyの皆さんから、Moonlight GloryとPastel*Paletteへの主催ライブへの出演を依頼されておりますが、肝心のステージで穴をあけるといのは、あまり我々としても看過はできません』

そう告げる相原さんの言葉は、かなり重苦しい雰囲気を感じられる。

「あの、一つだけお願いしたいことがあるのですが」

『はい、なんでしょうか？』

このままだと、僕だけではなくパスパレの出演もNGとなるのは目に見えている。

僕たちだけならともかく、パスパレまでもがそうなるのは、僕的にはあまり後味の悪い結果だ。

だからこそ僕は

「出演の許可の判断、少しだけ待つてはいただけませんか？」

無茶を承知で次の一手に打って出るのだ。

『……申し訳ありませんが、いくら美竹さんのお願いだとしても、そればかりは』

相原さんの申し訳なさそうな声と共に却下の言葉が返ってくる。

「彼女たち……Poppin Partyが信頼に値するか否かを判断する方法で、私に一つ考えがあります」

『……お聞かせいただけますか？』

「はい」

僕は、ある計画を相原さんに伝える。

「——という感じです」

『なるほど……』

僕の説明を聞き終えた相原さんは、そう相槌を打つと考えこむように黙り込んだ。

(やっぱり、無理か)

僕の考えている案は受け入れられる可能性など皆無なものだ。

それができたからと言って、彼女たちの信頼を証明できるものには

なりえない。

でも、これが僕にできる精一杯のことなのだ。

『わかりました……美竹さんのご希望に沿えるよう、できる限り最善を尽くしましょう』

だが、相原さんから返ってきた言葉は、そんな僕の予想を裏切るものだった。

「ッ……ありがとうございますッ」

『お気持ちわかりますが、落ち着いてください。ところで、活動再開の件ですが』

思わず声をうわ面せてしまう僕に、相原さんは苦笑気味に落ち着くように言うと、話題を変えてきた。

「日程が決まったんですか？」

『はい。来月の上旬ごろにライブを行います。そこから活動再開という形に持っていくということになりました』

(来月……あまり時間はないけど何とかなるか)

「わかりました。ではほかのメンバーにそのことを伝えておきます」

僕はそう告げると電話を切った。

(まずは、目先の問題から……かな)

活動再開はうれしいことには違いないが、その前にやらなければいけないことがある。

「一樹、揃ったらしいぞ」

こちらに向かって歩いてきていた田中君が、険しい表情をしたままそう告げてきた。

「……行こうか」

それに僕は無言で頷くと、田中君と一緒に彼女たち……Poppi'n Partyがいるであろう講堂のほうへと向かうのであった。

「全員そろっているようだな」

「田中先輩」

「み、美竹先輩」

講堂内に足を踏み入れるなり声を上げた田中君と、その後ろを歩く僕にその場にいた戸山さん達と朝日さんの視線が集まる。

そんなものを位にも返さずに階段を下りて行つた田中君は戸山さんたちの前で足を止めると彼女たちと向き合うように立った。

僕もそんな田中君の隣に立つ。

見ると、花園さんは泣いていたのか、少しばかり目が赤い。

それだけに、この後のことを考えると少しだけ胸が痛むが、今更田中君を止めることもできるはずもなかった。

「馬鹿野郎ツ!!」

「ツ!」

田中君の怒鳴り声は、まるで雷が落ちたかと思うほどに講堂内に響き渡り、その勢いにその場にいた全員が身をすくめる。

それは、全く関係ないはずの朝日さんが身をすくませるほどにすごかった。

「ステージに穴を空けるとか、一体何を考えてるつ。それが主催ライブをやるうとしていいる奴のやることかつ!!」

「そ、それは……ツ」

田中君の言葉に、一度は口を開きかけた戸山さんだったが、すぐにその口を閉ざしてしまう。

「それ以前に、お前たちは強硬に参加しようとしていた一樹の顔に泥を塗つたんだ。人として……ミュージシャンとして恥を知れっ!」

(田中君のあれ、やられると何も言えなくなるんだよね)

血の気が多い田中君だが、本格的にブチギレるとどうにもならなくなる場所がある。

手は出さずに怒鳴るだけだが、色々な意味できついには変わりない。

「俺はお前たちを信用はできない。ゆえに、主催ライブの参加の件は白紙……と、言いたいところだが、一樹のやつが食い下がって聞かないから、条件付きで再考のチャンスをくれてやる」

(くれてやるって……)

こっちは参加させてもらう側なので上から目線で言える状況では

ないのだが、こちらに矛先が向くのもあれなので黙っていることにした。

「条件は、これから出す試練に合格することだ。試練の内容は……一樹」

「そこで僕に振るの？ ……試練の内容は『あなた達がPoppin Partyである証を示せ』だ」

こちらに視線が集まる中、僕はその試練の内容を戸山さん達に告げる。

これが、今僕にできる彼女たちが信頼できるか否かを判断する精一杯のことなのだ。

「僕たちが参加できるか否かとか、顔に泥を塗った云々はともかくとして、この試練の内容だけは覚えておくほうがいい……本当に主催ライブをやるのなら」

「あ、あのツ。それってどういう——」それは貴女達が考えることだよ——……」

僕の試練の意味が解らない様子の戸山さんの疑問を、僕は一蹴すると田中君に声を掛けてそのまま行動を後にする。

「あ。後夜祭の飲み物を用意しておいたから、必要なら後で取りに来て」

そして、去り際に彼女たちの分の飲み物が用意されていたことを思い出した僕は、一度足を止めて彼女たちのほうに振り返ってそう告げると、今度こそ講堂を後にするのであった。

第46話 理由

「……で、詳しく聞かせてもらおうじゃねえか。一樹」

戸山さんたちに試練を告げて行動を後にした僕を待っていたのは、田中君たちの詰問だった。

特に田中君は納得できないというのを隠すこともなく態度で示しているほどに、不満げで不機嫌な様子だった。

「どうして、彼女たちにチャンスを与えたんだ？」

口火を切ったのは神妙な面持ちをしている啓介だった。

「まさか、知り合いだからと情けをかけたのか？ お前のプライドもその程度かよ」

「ちよつと、聡志。いくらなんでもそれは言い過ぎよ」

「ふ、二人とも喧嘩は……」

吐き捨てるように言い放った田中君に森本さんが食って掛かり、それを仲裁するように中井さんが割って入るというまさに力オスな状況ができてつつあった。

(うーん。僕が原因なんだけどね……)

「説明したいんだけど、いい？」

「……」

どこか他人事のようにその様子を見ていた僕は、状況を収めるべく口を開くと、それまで言い争っていた田中君たちは口を噤んでこちらに視線を向けてくる。

「あの試練の理由は主に二つある」

「……言ってみろ」

ぶつきらばうに先を促す田中君を見ながら、僕はその理由を告げる。

「まず一つ目。ステージに穴をあけたとはいえ、Roseliaや朝日さんによって完全に穴をあける事態を回避できたこと。彼女たちの演奏によって観客たちをがっかりとさせる事態を回避できたのであれば、そこまで徹底して責任を咎める必要性はないと判断したから」

Poppin' Partyがステージに立って演奏をするのがベストだとはいえ、Roseliaのサプライズライブということで、観客たちを残念な気持ちにさせることを最低限に済ませることができたことは、紛れもない事実だ。

「だからって、試練を与えるだけでいいという理由にはならねえぞ」
「もちろん。御託を並べたところで、彼女たち……花園さんの責任がないということにはならない」

ダブルブッキングが判明した際、彼女は文化祭のライブを優先させるという選択肢もあり、そのチャンスだつて少なからずあつたはずだ。

それをすべて棒に振った時点で責任がないとは言えない。

「だからこそその『試練』なんだ。あの試練は、自分たちで全部を導かなければいけない。問題文も、答えもね」

「……………」

僕の出したのは、かなり抽象的なものだったはずだ。

僕の言う、Poppin' Partyの証が何なのか。

そして、その示し方。

すべてを戸山さん達は自分たちの力で組み立てていかなければならない。

「オーケー。とりあえずそれは良しとしよう。で、二つ目の理由は？」

「結局、彼女たちに問われるのは主催ライブができるのか否かだ。その確証にもなるのがあの試練だ。そしてもう間もなく、僕の試練が『動き出す』だろうね」

僕はそう前置きを置いたうえで、みんなにこの後起こるであろうことを告げるのであつた。

文化祭も終わればあつという間で、いつも通りの日常に戻る。

(文化祭も好評だったみたいだし、よかった)

来年がどうなるかはわからないが、合同で文化祭を行ったという前例は作れたわけでそう言う意味では日菜さんの功績は大きい。

そんな中放課後、僕はチュチュのマンションを訪れていた。

もちろん、制服から私服に着替えて変装した状態で。

「Sweet, Excellent! とても素晴らしいライブだったわt」

「おめでとうございますッ。おめでとうございませす!」

「……えらくご機嫌のようですね」

中に入るなり、やたらとハイテンションなチュチュとパレオさんの姿に、ソファアに腰かけていたマスキングに話しかける。

「ん? ああ。なんでもこの間のライブが好評だったらしいぜ」

「あー。なるほど」

マスキングのその答えで、すべてを察した僕は何とも言えない気分で二人のほうを見る。

(その成功と引き換えに、花園さんは……)

啓介たちには冷たく切り捨てたが、それでもやはり知り合いということもあって、複雑な心境だった。

チュチュも早く終わらせようと頑張ってくれたのも知っている。

それでも、やるせない気持ちはぬぐえることはない。

「あ、ハナちゃん」

「来たわね、タエ・ハナゾノ!」

そんな中、渦中の人でもある花園さんが姿を現す。

「おめでとうございまーすッ」

「あなた達の評判かなりいいわよつ。次のライブでは二人のソロも——」

「……いいわよ、何でも言っつてちょうだい」

上機嫌な様子の子のチュチュの言葉を遮るようにして切り出した花園さんに、チュチュは顔色一つ変えずに先を促す。

「……ッ」

そんなチュチュに、花園さんはつらそうな表情を浮かべる。

「すみません。RASのサポートギターを辞めさせてください」

「え……」

「……ッ」

頭を深々と下げ告げられたその言葉に、その場にいた全員が別々の反応を示した。

レイヤさんは驚いた表情を浮かべ、マスキングは表情を変えずに静かに花園さんのほうに視線を向け、パレオさんはシヨックを受けた様子で息をのみチュチュのほうに視線を向ける。

かくいう僕も、マスキングと同様に静観しているだけだが。

「……Pardon?」

チュチュも、まさかサポートギターを辞めたいと言われるとは予想もしていなかったのか、目を瞬かせて花園さんに聞き返した。

「RASのサポートギターを辞めさせ——Why? どうしてよ——私の力が足りませんでした」

繰り返し口にするハナゾノさんに、チュチュが理由を尋ねると、花園さんは申し訳なさそうな表情で静かに理由を話し始めた。

“成長したい”、“このバンドでいい演奏をしたい”その理由が告げられるたびに、チュチュの表情は徐々に歪んでいく。

それが悔しきからか、それとも悲しきからなのかはわからない。

「だから、こんなすごい人たちのところで修業ができ——いま、修行って言った?——ッ!」

それまで表情を歪ませているだけだったチュチュが、花園さんの一言で一気に攻撃的な鋭い視線を花園さんに向ける。

花園さんのその言葉は、完全にアウトで、室内にチュチュが机を殴りつける音がやけに大きく響き渡る。

「私は本気でやってるのっ! そんな素人のような感じでやられると迷惑なのよっ!」

「ッ!」

そして響き渡るチュチュの罵声。

思い返せば、彼女の罵声を聞くのは初めてかもしれない。

「ちよっとやってダメだったら辞めるって、自分勝手すぎるんじゃない

いのツ？ やるならもつと全力でやんなさいよっ！」

(助け舟、出すか?)

花園さんも、悪気があってその言葉を言ったわけではない。

彼女はサポートギターであって、このバンドのメンバーではない、最低限度の指示に従うのは言うまでもないが、すべての指示に従う必要はない。

特に、そのバンドのメンバーの考え方や思想などは。

それがサポートか否かの違いなのだと思は思う。

とはいえ、この場で助け舟を出せば下手するところにも飛び火しかねない。

「……チュチュ、ちよつと話してきていい?」

そんなことを考えている間に、静かに様子を見ていたレイヤさんが花園さんのそばに歩み寄って静かに肩を置きながらチュチュに声を掛けていた。

「少し頭冷やしてきなさいっ」

突き放したような口調で返すチュチュの言葉に、レイヤさんは花園さんに促してそのままその場を離れていく。

途端に、ブース内は重苦しい沈黙に包まれる。

マスキングはソフアーに腰かけ、パレオさんはチュチュのそばで静かに立っているが、その表情はどこか暗かった。

(しかし……)

「修行……か」

「……何よ」

花園さんの口にした『修行』という単語に、少しだけ思うところのあった僕は思わず口に出してしまい、チュチュから鋭い視線を受ける。

「いや、何でもありませんよ」

下手なことを言っただけで彼女の怒りに火をつけるわけにはいかないの
で、僕はそう言っただけで逃げた。

花園さんの言う『修行』も、あながち間違いではない。

サポートギターをする理由も、人それぞれだが、僕のように腕を鈍らせないようにするためというものだってあるはずなのだ。

それを修行と表現したとしても間違いではないし、花園さんを責める筋合いは僕にはない。

とはいえ、タイミングと相手が悪かったただけなのだ。

「この状況で辞めるなんてcrazyすぎるッ」

花園さんとレイヤさんの二人がブースを後にした後、チュチュは椅子を回転させながら声を荒げるが、その様子は誰がどう見ても不機嫌なものだった。

「だけど、もともとサポートっていう話だっただろ」

「でも、すぐにお別れなんて寂しいです……」

そんな中でもいつも通りに相槌を打つマスキングと若干寂しげな表情で口を開くパレオさんの言葉に、チュチュは静かに舌打ちをするだけだった。

「チュチュ」

「……さつきは、すみませんでした」

それからしばらくして、再び戻ってきた花園さんは、悲しげな表情を浮かべて戻ってきた

「それで、さつきの話は本気なのね？」

チュチュのいつになく圧を感じるその視線に、花園さんは静かに頷いて答える。

それと同時に、ブース内に再び緊張感が張り詰めだす。

「……………ふう」

再びパレオさんが不安そうな表情をチュチュに向ける中、緊張の糸を断ち切るようにチュチュが静かに息を吐きだす。

「OK。わかったわ、あなたのサポートは終了よ」

「ッ！ ありがとうございま——「ただし」——」

チュチュが折れる形で花園さんのサポートの辞退を認めただけに、深々と頭を下げてお礼を言おうとする花園さんの言葉を遮るようにしてチュチュは口を開いた。

「次回のライブが終わってから。それが条件よ、OK?」

「はいッ」

チュチュが出した条件に、花園さんが頷いたことで、花園さんのサ

ポルト辞退は決定となった。
結局この日はチュチュの号令で、そのまま解散となった。

第47話 動き出す者たち

ライブハウスDubの控室。

「全員、グラスは持ったかしら？」

「はい、チュチュ様ツ」

チュチュの言葉に、パレオが手に持った飲み物がはいたグラスを掲げながら応える。

「それじゃ、今日のライブの成功と、そしてタエ・ハナゾノのサポートギター終了を労って——」

『乾杯ツ』

あれから数日が経過し、ささやかではあるが花園さんとの送別会のような催しを開いていた。

チュチュの音頭で、それぞれが心地よい音を立てながらグラスを合わせる。

「タエ・ハナゾノ。いいライブができたわ。Thanks」

「ありがとうございますツ」

「お前のギター、悪くなかったぜ」

それぞれが花園さんにねぎらいの言葉をかけて行く中、僕はそれら少し離れた場所で静かに見ていた。

「チュチュ、少し話良いですか？」

「もちろんよ」

そしてタイミングを見計らうように僕はチュチュに声を掛けると、話の内容を聞かれないようにするべく場所を移すことにした。

その時、パレオさんが一緒に行こうとしていたが、大事な話であることを悟ったのか、それとも信頼してくれているからなのかは分からないが、ついてくることはなかった。

「で、話って何よ」

「チュチュ、花園さんの所属するバンド……Poppin Partyにスカウトの話をするつもりですよね？」

控室を後にしてそこから少し離れた通路に移動するや否や用件を聞いてきた彼女に僕は単刀直入にそう告げると、チュチュは驚いた様

子でこちらを見上げてきた。

「この世界長いので」

「コホン……それで、それが何なのよ」

どうしてわかったと言わんばかりの表情に、僕がそう答えると、軽く咳ばらいをしようとやや不機嫌な様子で聞いてくる。

「一つだけアドバイスをと思いましたが」

それを無視して僕はチュチュに本題を言う。

「アドバイス？」

「ええ。チュチュの提案を、向こうが聞き入れる可能性を高めることができるかもしれないアドバイスです」

僕の言葉に予想通り食いついてきたチュチュに、僕はそのまま話を進める。

「簡単に言えば、“チェンジ”です」

「change?」

どういうことだと言わんばかりに首を傾げる彼女に、僕は説明を続ける。

「今、彼女はPoppin'Party所属でここにはサポートという形です。それをRAS所属でPoppin'Partyのサポート“に変えるんです”

「……………」

僕のその説明に驚いた様子で目を瞬かせるチュチュ。

僕の打ち出した提案は、花園さんをRASのギターリストとして迎え入れ、Poppin'Partyにサポートという形で入ってもらったものだった。

「こうすれば、向こう側も彼女と一緒にライブができますし、チュチュもこのギターリストとしてライブに出られることができます、まさに良いとこ取りな案だと思いますが、どうでしょう?」

「……………考えてみるわ」

最後のごり押しとばかりに提案すると、しばらく考えこんだ後にチュチュはそう答えた。

(よし、これでひとまずは大丈夫だろう)

控え室のほうに戻っていくチュチュの後姿を見ながら、僕は計画の第一段階が終了したことを確信しながらその後についていくのであった。

翌日の昼休み、僕は廊下である人物に電話をかけていた。

これから話す内容的に、本当は屋上でとも思ったが、あそこはあそこで人気があるのであまり適さない場所でもある。

もつとも、それはここも言えるのだが、むしろ人気が多いので下手なことをしなければ、そこまで気にする必要もないという理由で、この場所を選んでいたりする。

現に、僕の後ろを歩きかう学生たちは、僕のことを気にする様子は見受けられない。

『もしもし』

「あ、中井さん。今大丈夫?」

電話の相手である中井さんは、数コールで電話に出たので、僕は取り合えず話せる状況なのかを確認する。

『うん。大丈夫だけど……』

「ならよかった」

どこか歯切れの悪い中井さんの様子がちよつと気になるが、あまり時間がないので僕は用件を伝えることにした。

「近いうちに、この間話したプロデューサーがPoppin Partyに接触を取る可能性が高い。可能な限りでいいからその場に立ち会ってほしい」

『えつと……』

「ん? どうかした、中井さん?」

僕の言葉にも歯切れの悪い様子で答える中井さんに、僕は違和感を感じて本人に問いかける。

『さつき、戸山さんたちがそのことを話してるのを聞いて、私も同行させてほしいって、お願いしちゃった』

「なるほど……」

「こちらが言うまでもなく、好転していたようで僕はほっと胸をなでおろした。」

「それなら問題はないよ。しつかりと、見届けてあげて」

『うん……私、頑張るね』

それから二言三言言葉を交わして、僕は電話を切った。

(頑張る……か)

中井さんが先ほど言っていた言葉が、どうにも頭の中から離れず、妙な胸騒ぎを抱かせる。

(僕の取り越し苦労ならいいけど……)

僕は、念のためにと持ち歩いていたもう一台の携帯電話を取り出すと、チュチュの携帯に電話をかける。

『……Hello』

「こちらも、数コールで電話に出た。」

「いきなり申し訳ない。ちよつと伝えたいことがあってね」

口調が少々不機嫌そうな感じがするが、僕は本題を切り出すことにした。

「Moonlight Gloryのことは知ってます？」

『ええ、当然よ』

ムングロの単語を出した瞬間、チュチュの声のトーンがかなり低くなる。

……よほど啓介の無礼なあれが尾を引いているようだ。

「そのバンドのメンバーの一人が、チュチュの動向をかなり、気にしているという話を小耳にはさんだので。もしかしたら、話し合いの場にバンドメンバーを送り込んで干渉する可能性もあるので、知らせておこうかと」

『………いったい誰よ』

「………」

しばらく無言だったチュチュの問いかけに、今度はこちらが黙り込

む番だった。

正直言って、この電話自体が必要である可能性も少ないうえに、かなりリスクのある物だ。

そんな電話で、答えようとしていることがどのようなことを意味するかは、考えるまでもなくわかっていた。

「……ギター兼、作戦参謀の一樹です」

『……………そう。わざわざありがとう』

名前を告げたとたん、再び押し黙るチュチュに僕は心臓をバクバク言わせて相手の反応を伺っていたが、返ってきたのはいつも通りの感じの物であった。

「はあ……………」

通話が終わり、一つ深いため息をついた僕は、なんとも言えない気持ちだった。

(本当は言う必要もないんだけどね)

田中君の名前でもよかったのだが、嘘についてもバレそうなので、正直に答えたがかなり危険な橋を渡っていると思う。

一歩間違えば僕の素性が向こうに知られる可能性がある。

そうになると、彼女の監視もできなくなるばかりか、RoseliaやPoppin'Party関連の状況を悪化させる可能性も考えられる。

「まあ、こればかりは祈るしかないか」

僕が、そこまでしてチュチュに連絡を入れたのは、中井さんへの牽制のためだった。

電話での中井さんの感じだと、下手な干渉をするような気がしたからの対策だったりする。

(そういうところが中井さんの良いところだけど、でも今回はちよつとだけそれは止めさせてもらおうよ)

中井さんには申し訳ないと思いつつも、心の中でそう呟いた僕は、屋上を後にするのであった。

★ ★ ★ ★ ★

放課後、夕暮れに染まる道を私は一人で歩いていた。

その足取りはとても重く感じた。

「はあ……」

口から出るのは重いため息。

(なんで私って、こうなんだろう)

私は、戸山さんたちがRASのプロデューサーの人であるチュチュさんと話をすると聞いて、その手助けにと思って同伴を申し出た。

彼女たちの役に立てるかも、と思った私だったけど

『アナタは部外者ですよ？ 口を出さないでいただけますか』

その一言で、私は何も言えなくなってしまった。

(こういう時、明美ちゃんだったツラなんていうのかな?)

きっと明美ちゃんだったら、もつときっぱりと何かを言い返しているかもしれない。

そう思うと、自分の弱さにため息を再び漏らしそうになる。

「そのアナタ」

「え？」

そんな私の背後から声を掛けてきたのは、先ほどまで私たちと話をしてきたRASのプロデューサーであるチュチュさんだった。

彼女の横には、先ほどまでいた“パレオ”という名前の子の姿は見えない。

「アナタ、確かMoonlight Gloryのバンドメンバーのユミだったわね？」

「は、はい……」

一体自分に何の用なのだろう、と思いながらも私はチュチュさんの問いかけに答える。

「アナタのバンドのメンバー……カズキってどういう人物か教えてもらえる？」

「一樹君、の？」

予想もしていない問いかけに、目を瞬かせる私にチュチュさんは“アナタの感じたままに結構よ”と付け加える。

「えつと、一樹君はギターがすごくうまくて……それで」

一体どういう風に言えばいいのだろうか？

「先のことを見通している人……です」

もう少しいまい言いはなかったものかと思うけど、でも私が今できるのはこの言い方しかなかった。

一樹君は作戦参謀と名乗っているだけあつてか、先のことを見据えている。

……いい意味でも悪い意味でも。

今のサポートミュージシャンも、そして私に戸山さん達のことを見守るように言ってきたことも。

「そう……Thanks、ユミ」

私の漠然とした答えに、チュチュさんは何か思うところがあつたのか、考えこむ仕草をしたのちにそう言っただけ私の前から去って行った。

「……私、何かまずいことでも言ったかな？」

一樹君に迷惑をかけるようなことを言ってしまったのではないか。

そんな不安が頭をよぎつたのは、チュチュさんの姿が夕陽の光に飲み込まれるようにして消えて行った時のことだった。